

茨城県笠間市

うら山古墳・石井台平安時代集落跡

発掘調査報告書

1972・3

笠間市教育委員会

茨城県笠間市

うら山古墳・石井台平安時代集落跡

調査研究報告書

1972・3

笠間市教育委員会

序

終戦後の混乱期から脱却してめざましい復興をみせ、産業界をはじめ各分野にわたって世界的な成長をとげた要因は、日本民族の偉大な創造力と努力の結晶であった。

笠間市は、昭和30年町村合併促進法に基づき、隣村大池田、北山内、南山内の1町3か村を対等合併し、さらに昭和33年稻田町を合併し、市制を施行して笠間市が誕生、将來へ益々発展する基盤が築かれたのである。平和な現在の安らぎは、私どもの手によってのみ育成されたものではなく、遠い昔から、私たちの祖先の遺された文化活動の集積がその基盤となっているのである。われわれは、これらの先人による業績や文化遺産を正しく評価し、理解するとともに、子々孫々に伝えなければならない義務を負うものである。

このたび、国道50号笠間バイパスの建設に伴い、建設省の特段のはからいにより、国上館大学大川清先生を団長とする調査団によって、うら山古墳、並びに石井台遺跡の発掘調査がおこなわれ、貴重な遺跡・遺物が発掘されたことは周知のとおりである。

ここに、古墳並びに集落跡の歴史的意義が解明され、発掘調査報告書の刊行をみたことはまことに喜びに堪えない次第であり、本書によって、先人の生活様相とともに、その収知をしり、郷土笠間市発展の資として活用されるならば、幸いこれにすぐるものはないのである。

終りに、調査全般から報告書の刊行に至るまでの建設省・国上館大学大川先生並びに県文化財関係者はじめ各位のご尽力に心から感謝申し上げ、あわせて、この事業にご指導ご支援を賜わった多数のかたがたに謝意を表する次第である。

昭和47年3月25日

笠間市長

山 口 茂

発刊にあたりて

笠間の古代についての文献はきわめて少なく、わずかに常陸風上記などに散見はあるが、詳細な史実は求められなかつた。また、「笠間城記」などにも古代に関して記されてはいるが、いずれも「仄聞するに」といった表現で、ややもすれば学問的に的確を欠く感みがなくもない。

このたび、国道50号線笠間バイパスの建設にあたり、その路線上に「うら山古墳」と「石井台集落跡」が含まれているため、これに対し学術的発掘調査をおこなう場合、笠間の古代史研究に新たな曙光を見出すことができるであろうという希望をもつた。

幸いにも、この学術的発掘の計画段階で、茨城県教育委員会文化財担当関係者のご指導と建設省現場担当関係者のご理解を得ることにより笠間の古代について、何等かの手がかりを得られるであろうという期待をもつて至つた。

これが実施については、現地の発掘調査と資料整理を国士館大学考古学研究室に依頼し、同大学助教の大川清先生ご指導のもとに研究員並びに学生25人が当り、事務処理は笠間市教育委員会が担当、約1か月の日時を費やして発掘調査を完了することができた。時あたかも盛夏、スタッフは炎暑とたたかいながら、流汗淋漓、黙々と作業をすすめるその情熱には、われわれ関係者一同感激を深くし、ただただ若い世代に惜しみない期待と敬意を表するのみであった。

報告書の作成にあたつては、現地作業終了前後の段階で、徹夜作業を経て中間報告の趣旨で異例の現地報告書をものされ、その後、大学研究室においてうかか月余りにわたり膨大な資料に慎重な整理検討を重ねた結果、ここに本報告書が発刊の運びとなり、大川 清先生をはじめ資料整理、原稿作成にあたられたスタッフの熱意と努力に衷心から謝意を表するとともに、この貴重な労作を笠間の古代史研究の資料に役立てて戴くことを希望する次第である。

なお、本事業の計画から実施、完成にいたるまで、笠間市長山口 茂氏をはじめ市当局関係者、笠間市教育委員会関係者の積極的なご支援と、茨城県教育委員会担当職員及び建設省常陸工事事務所担当係官のご協力によって、成功に導くことのできたことを心から謝意を表する。また、長期にわたり、各方面との連絡折衝に尽力された笠間市教育委員会社会教育係長島田甲司氏に対し、とくに記してその功をねぎらうものである。

昭和47年3月25日

笠間市文化財愛護協会会長　田中嘉彦

例　　言

- 1 本書記載の発掘調査は、国道50号笠間バイパス建設工事前の学術調査実施を建設省と笠間市とにおいて協議し、その実施については国土館大学文学部考古学研究室が担当した。
- 2 遺物・記録図面の整理には、国士館大学考古学研究室員並びに学生がこれに当った。
- 3 報告書原稿は、古墳は近藤利由、集落跡遺構は有吉重藏、遺物は戸田有二、写真は大門直樹が主任となり、他の諸君が合議、協力して作成したものの大川清が補訂し、戸田有二を助手として編集した。
- 4 本書は、その性格上、原稿作成には下記諸君の共同作業によって成ったものであり、その学術的資料の位置づけは諸君の共同の学術的業績である。

考古学研究室員 戸田有二

タ 技師 大門直樹

タ 学生 板橋範芳 二宮淳子 有吉重藏 近藤利由

大島秀俊 青木健二 宮下幸夫 水野順敏

高橋陽子 村松春代 長嶺操 松井政信

堺恭子 山崎景子

- 5 本書は遺構・遺物の実測図・写真をできるかぎり示し、記述はそれを補う程度にとどめた資料篇である。

- 6 本書での略号は

「S」……須恵器 「H」……土師器 「K」……灰釉陶器 「t」……
鉄製品 「メ」……カワラケ 「横」……横瓶 「ス」……スリ鉢
「紡」……紡錘車 「石」……石製品

「T—II」……掘立式建物跡II号 「3—E」……グリット「D—2」
……土塙・柱穴・小さな穴など 「埋」……埋積土 「カ」……カマド
「支」……支脚 「床」床直上に接して出土 「」……無記入のものは
埋積土中出土 「黒」……黒色土器 「耳」……耳皿 「底墨」……
底部墨書き 「体墨」……体部墨書き 「底ヘラ」……底部ヘラ記号 「再
使」……高台破損後再使用 「混」……混入 「口墨」……口辺墨書き
「t o」……砥石

本 文 目 次

はじめに.....	1
うら山古墳.....	3
うら山古墳出土の遺物.....	7
まとめ.....	8
石井台集落跡.....	9
縄文期遺構.....	12
1号住居跡.....	13
2号住居跡.....	16
3号住居跡.....	18
4号住居跡.....	20
5号住居跡.....	24
6号住居跡.....	26
7号住居跡.....	30
8号住居跡.....	33
9号住居跡.....	36
10号住居跡.....	39
11号住居跡.....	41
12号住居跡.....	44
13号住居跡.....	47
14号住居跡.....	48
15号住居跡.....	51
16号住居跡.....	54
17号住居跡.....	58
18号住居跡.....	61
19号住居跡.....	63
20号住居跡.....	65
21号住居跡.....	67
22号住居跡.....	70
23号住居跡.....	72

24号住居跡	75
25号住居跡	78
26号住居跡	81
27号住居跡	83
28号住居跡	85
29号住居跡	85
30号住居跡	85
31号住居跡	85
D—27上塗	85
16号住居跡について	87
住居跡並びに掘立建物跡新旧関係	87
掘立式建物跡	89
墨書き土器一覧表	111

図 版 目 次

- 屏 土器（土師器）
- 第1図版 うら山古墳・石井台集落跡空中写真
- 第2図版 〈上〉発掘前のうら山古墳 〈下〉発掘中のうら山古墳
- 第3図版 うら山古墳の空中写真（発掘終了後）
- 第4図版 〈上〉うら山古墳全景 〈下〉前方部から後円丘を見る
- 第5図版 〈上〉後円部東側の周溝 〈下〉くびれ部東側周溝
- 第6図版 〈上〉東側周溝 〈下〉東側周溝
- 第7図版 〈上〉後円部東側の周溝断面 〈下〉同上右側部分拡大
- 第8図版 うら山古墳封土中の土器片
- 第9図版 うら山古墳封土中の土器片
- 第10図版 石井台集落跡空中写真
- 第11図版 〈上〉石井台集落跡全景 〈下〉同上
- 第12図版 〈上〉縄文期土塙 〈下〉1号跡
- 第13図版 〈上〉1号跡外北東のローム上面遺存の土器 〈下〉1号跡カマド
- 第14図版 〈上〉2号跡 〈下〉3・5号跡
- 第15図版 〈上〉4号跡 〈下〉4号跡内の遺物出土状態
- 第16図版 〈上〉6号跡 〈下〉6号跡カマド
- 第17図版 〈上〉7号跡 〈下〉7号跡の遺物出土状態
- 第18図版 〈上〉8号跡 〈下〉8号跡カマド
- 第19図版 〈上〉鉄製鎌 〈下〉9号跡
- 第20図版 〈上〉10号跡 〈下〉11号跡
- 第21図版 〈上〉11号跡東壁のカマド内に遺る土製支脚
〈下〉11号北壁のカマド
- 第22図版 〈上〉12・13号跡 〈下〉13・14・15号跡
- 第23図版 〈上〉16号跡 〈下〉17号跡
- 第24図版 〈上〉17号跡カマド 〈下〉鉄製紡錘車

- 第25図版 (上) 19・20・21号跡 (下) 21・22・23・24・25号跡
- 第26図版 (上) 18号跡 (下) 19号跡
- 第27図版 (上) 20号跡 (下) 21号跡
- 第28図版 (上) 紡錘車 (下) 21号跡カマド
- 第29図版 (上) 22号跡 (下) 22号跡カマド
- 第30図版 (上) 23号跡 (下) 23号跡内の遺物出土状態
- 第31図版 (上) 24号跡 (下) 24号跡カマド
- 第32図版 (上) 25号跡 (下) 紡錘車
- 第33図版 (上) 26号跡 (下) 27号跡
- 第34図版 (上) 掘立式建物跡T—I (下) 掘立式建物跡T—I
- 第35図版 (上) 掘立式建物跡T—II (下) 掘立式建物跡T—II
- 第36図版 (上) 掘立式建物跡T—III・IV (下) 掘立式建物跡T—III・IV・V
- 第37図版 (上) 掘立式建物跡T—V (下) 掘立式建物跡T—VI
- 第38図版 (上) 掘立式建物跡T—VII (下) 平安期土塁D—27
- 第39図版 ノミ・刀子
- 第40図版 鈕・カスガイ・明錢
- 第41図版 紡錘車・鎌
- 第42図版 不明鉄製品
- 第43図版 土器類
- 第44図版 土器類
- 第45図版 土器類
- 第46図版 土器類
- 第47図版 土器類
- 第48図版 土器類
- 第49図版 土器類
- 第50図版 土器類
- 第51図版 土器類

- 第52図版 土器類
第53図版 土器類
第54図版 土器類
第55図版 上器類
第56図版 土器類
第57図版 土器類
第58図版 土器類
第59図版 土器類
第60図版 土器類
第61図版 上器類
第62図版 土器類
第63図版 土器類
第64図版 上器類
第65図版 土器類
第66図版 土器類
第67図版 上器類
第68図版 土器類
第69図版 土器類
第70図版 上器類
第71図版 土器類
第72図版 上器類
第73図版 土器類
第74図版 土器類
第75図版 上器類
第76図版 土器類
第77図版 土器類
第78図版 土器類

- 第79図版 土器類
- 第80図版 土器類
- 第81図版 土器類
- 第82図版 墨書き土器
- 第83図版 墨書き土器
- 第84図版 墨書き土器
- 第85図版 墨書き土器
- 第86図版 土器類
- 第87図版 土器類
- 第88図版 土器類
- 第89図版 土器類
- 第90図版 土器類

挿 図 日 次

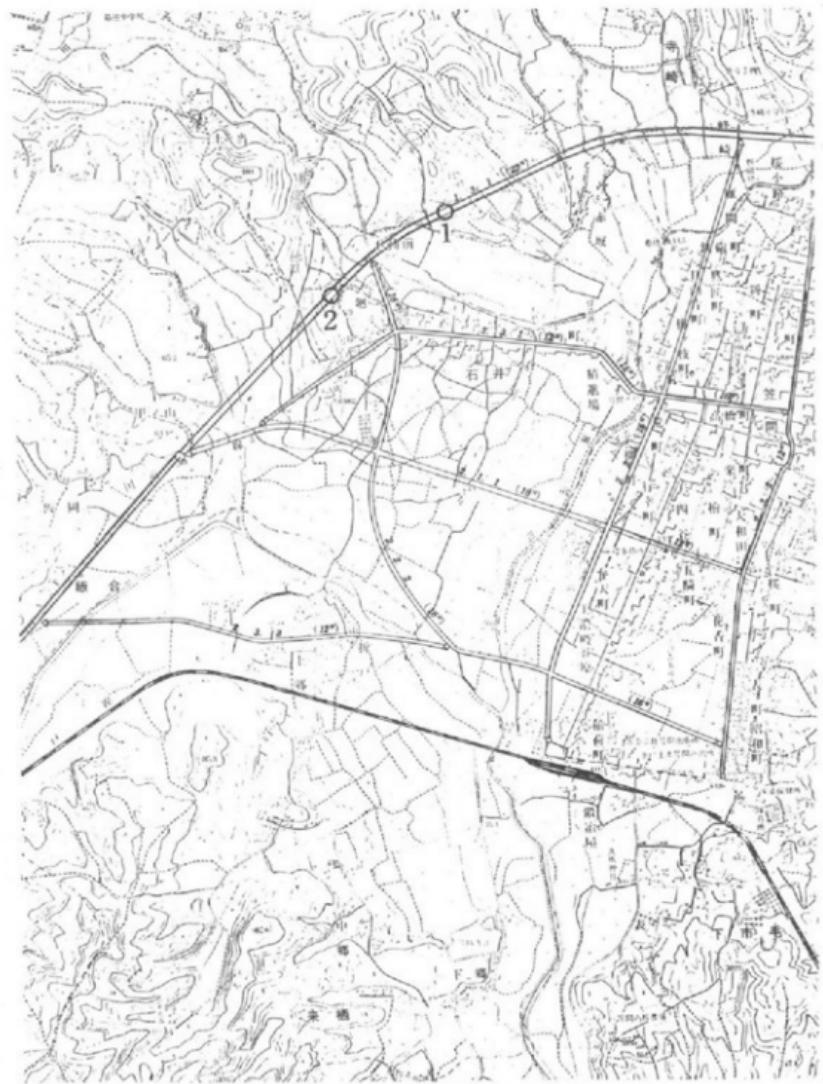
Fig . 1	遺跡附近地形図	
Fig . 2	うら山古墳地形図	3
Fig . 3	墳丘実測図	4
Fig . 4	周溝及びトレング面図	
Fig . 5	うら山古墳構築過程模式図	6
Fig . 6	墳丘並びに周溝出土土器実測図	6
Fig . 7	石井台集落跡全体測量図	9
Fig . 8	石井台集落跡遺構配置図	10
Fig . 9	石井台トレング面図	
Fig . 10	J - 1 土塙実測図	12
Fig . 11	J - 2 上底実測図	12
Fig . 12	第1号住居跡石礫実測図	13
Fig . 13	第1号住居跡実測図	13
Fig . 14	第1号住居跡土器実測図	14
Fig . 15	第2号住居跡実測図	16
Fig . 16	第2号住居跡上器実測図	17
Fig . 17	第3号住居跡実測図	18
Fig . 18	第3号住居跡上器実測図	19
Fig . 19	第4号住居跡実測図	20
Fig . 20	第4号住居跡鉄製品実測図	20
Fig . 21	第4号住居跡土器実測図	21
Fig . 22	第4号住居跡土器実測図	22
Fig . 23	第5号住居跡実測図	24
Fig . 24	第5号住居跡上器実測図	25
Fig . 25	第5号住居跡鉄製品実測図	25

Fig .26	第6号住居跡実測図	26
Fig .27	第6号住居跡遺物実測図	27
Fig .28	第6号住居跡土器実測図	28
Fig .29	第6号住居跡鉄製品実測図	28
Fig .30	第7号住居跡実測図	30
Fig .31	第7号住居跡鉄製品実測図	30
Fig .32	第7号住居跡土器実測図	31
Fig .33	第7号住居跡土器実測図	32
Fig .34	第8号住居跡実測図	33
Fig .35	第8号住居跡砥石実測図	34
Fig .36	第8号住居跡土器実測図	34
Fig .37	第9号住居跡実測図	36
Fig .38	第9号住居跡土器実測図	37
Fig .39	第10号住居跡実測図	39
Fig .40	第10号住居跡土器実測図	40
Fig .41	第11号住居跡実測図	41
Fig .42	第11号住居跡遺物実測図	42
Fig .43	第12号住居跡実測図	44
Fig .44	第12号住居跡土器実測図	45
Fig .45	第12号住居跡鉄製品実測図	46
Fig .46	第13号住居跡実測図	47
Fig .47	第14号住居跡実測図	48
Fig .48	第14号住居跡土器実測図	49
Fig .49	第15号住居跡実測図	51
Fig .50	第15号住居跡鉄製品実測図	51
Fig .51	第15号住居跡土器実測図	52
Fig .52	第16号住居跡実測図	54

F i g . 53	第16号住居跡土器実測図	55
F i g . 54	第16号住居跡鉄製品実測図	57
F i g . 55	第16号住居跡砥石実測図	57
F i g . 56	第17、18号住居跡実測図	58
F i g . 57	第17号住居跡土器実測図	59
F i g . 58	第18号住居跡土器実測図	61
F i g . 59	第19号住居跡実測図	63
F i g . 60	第19号住居跡上器実測図	64
F i g . 61	第20号住居跡実測図	65
F i g . 62	第20号住居跡紡錘車及び石錘実測図	65
F i g . 63	第20号住居跡土器実測図	66
F i g . 64	第21号住居跡実測図	67
F i g . 65	第21号住居跡土器実測図	68
F i g . 66	第21号住居跡鉄製品実測図	69
F i g . 67	第22号住居跡実測図	70
F i g . 68	第22号住居跡鉄製品実測図	70
F i g . 69	第22号住居跡土器実測図	71
F i g . 70	第23号住居跡実測図	72
F i g . 71	第23号住居跡土器実測図	73
F i g . 72	第23号住居跡鉄製品実測図	74
F i g . 73	第24号住居跡実測図	75
F i g . 74	第24号住居跡土器実測図	76
F i g . 75	第25号住居跡実測図	78
F i g . 76	第25号住居跡紡錘車実測図	78
F i g . 77	第25号住居跡土器実測図	79
F i g . 78	第26号住居跡実測図	81
F i g . 79	第26号住居跡土器実測図	81

Fig .80	第27号住居跡実測図	83
Fig .81	第27号住居跡土器実測図	84
Fig .82	D—27土塙鉄製品実測図	84
Fig .83	第29号住居跡土器実測図	86
Fig .84	D—27土塙実測図	86
Fig .85	T—I実測図	90
Fig .86	T—II実測図	91
Fig .87	T—III実測図	92
Fig .88	T—IV実測図	93
Fig .89	T—V実測図	94
Fig .90	T—VI実測図	95
Fig .91	T—VII実測図	96
Fig .92	掘立式建物跡鉄製品実測図	97
Fig .93	グリット内遺物実測図(1)	98
Fig .94	グリット内遺物実測図(2)	100
Fig .95	グリット内遺物実測図(3)	102
Fig .96	グリット内遺物実測図(4)	104
Fig .97	グリット内遺物実測図(5)	106
Fig .98	グリット内遺物実測図(6)	108
Fig .99	グリット内遺物実測図(7)	110
Fig .100	墨書き土器出土範図	
Fig .101	7月15日	
Fig .102	7月14日	
Fig .103	鎮魂祭	
Fig .104	8月1日 現地説明会	
Fig .105	8月5日	
Fig .106	8月15日	

遺 跡 付 近 地 図



石井台遺跡



は じ め に

国道50号線の笠間バイパス道路建設に伴い、同路線上にある古墳と土器包含地を事前調査の対象とした。

本調査は建設省と笠間市において工事着手前の学術発掘調査実施の取り決めがなされ、発掘調査は国土館大学考古学研究室が、事務処理は笠間市教育委員会が担当した。なお、調査実施にあたっては茨城県教育委員会の指導を受けることもあった。

発掘調査は国土館大学文学部考古学研究室が中心となり、笠間市文化財調査委員会、笠間市文化財愛護協会の各位並びに地元笠間中学校生徒の協力を得て順調に進み、予定通り現地調査を無事に終えることができた。

発掘調査関係者はつぎの通りである。

(笠間市関係)

市長	山口 茂
助役	柳橋清作
収入役	山田 忠
市議会教育厚生委員長	甲斐 豊
教育委員長	英昌昌次郎
教育委員	江川文展 小林 茂 柳橋 道
文化財調査委員	結解 治 平早仲雄 小林三郎
	能島清光 天津忠興 小室 昭
文化財愛護協会会长	田中嘉彦
副会長	河村 博 太田祐司
市教育委員会教育長	小室 武
事務局長	永田 弘
社会教育係長	鳥田甲司

(茨城県関係)

県教育委員会社会教育課長	板垣久敬
文化財係長	大森信英
主事	西宮一男
タ タ タ	高根常昭

(国土館大学関係)

考古学研究室主任	大川 清
室員	戸田有二 (イラク国出張)

タ	技師	大門直樹
タ	学生	有吉重蔵 森 広樹 大島秀俊
		近藤利由 青木健二 北原実徳
		宮下幸夫 水野順敏 真玉秀樹
		智田政基 高橋陽子 村松春代
		本田恵子 横 恵子 山崎景子
		松井政信 長嶺 操 新井和之
		鶴島昭彦 衛藤恭孟 菊池京子
		細谷政策(千葉大学学生)
(協力者)	飯村 實	飯村はづ 染谷 清
	山口信明	笠間中学校郷土研究会生徒諸君
		以上

発掘調査終了後、仲秋ころより資料と記録の整理作業が学業のかたわらにおいて日夜すすめられ、ことに年末は12月11日より合宿により報告書作成のための資料整理にあたり、その作業も新春5日からは継続し、ここに一応の資料を公開するはこびとなつた。この報告書は発掘調査参加者の努力は述べるまでもないが、ことに、資料整理から報告書作成には研究室員並びに学生諸君の共同作業によつて成ったものであり、その学術資料の位置づけに諸君の共同の学術的業績であることを記し心から謝意を表する。

うら山古墳 (箱田字山王下862-2)

笠間盆地のやや東寄りに位置する笠間市の中心は地山より南へ細長く形成されている。全國遺跡地図(文化財保護委員会刊)によれば市の南、来栖には鍛冶家山A古墳・B古墳・中の郷古墳群、西の飯合には大塚古墳・飯岡古墳群、北方の箱田には下箱田古墳・四所神社古墳群、うら山古墳群がある。本報告書はうら山古墳群のうち一基を調査したものである。

うら山古墳は箱田の南、すなわち、市街をはさんで佐白山と相対し標高76.6mを最高点とする独立小丘陵の南端の東へのびる小丘丘上に位置している。

本古墳は発掘調査前には周濠をもつ円墳とおもわれたが、墳丘実測の結果、前方後円墳と考えられ、さらに周濠の発掘によって前方後円墳であることを確認するにいたった。

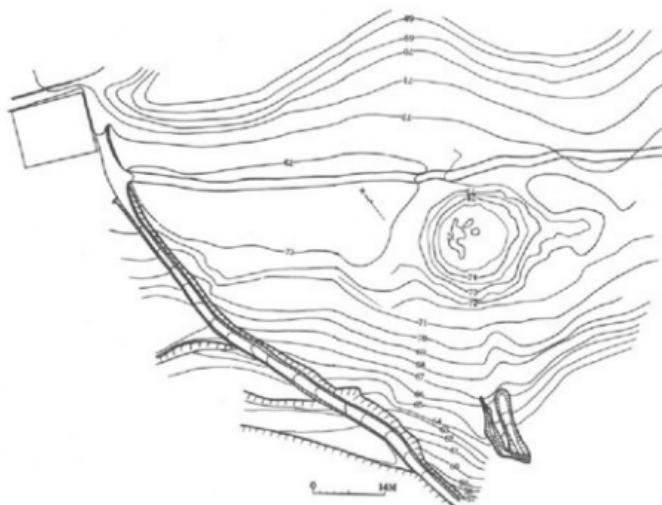
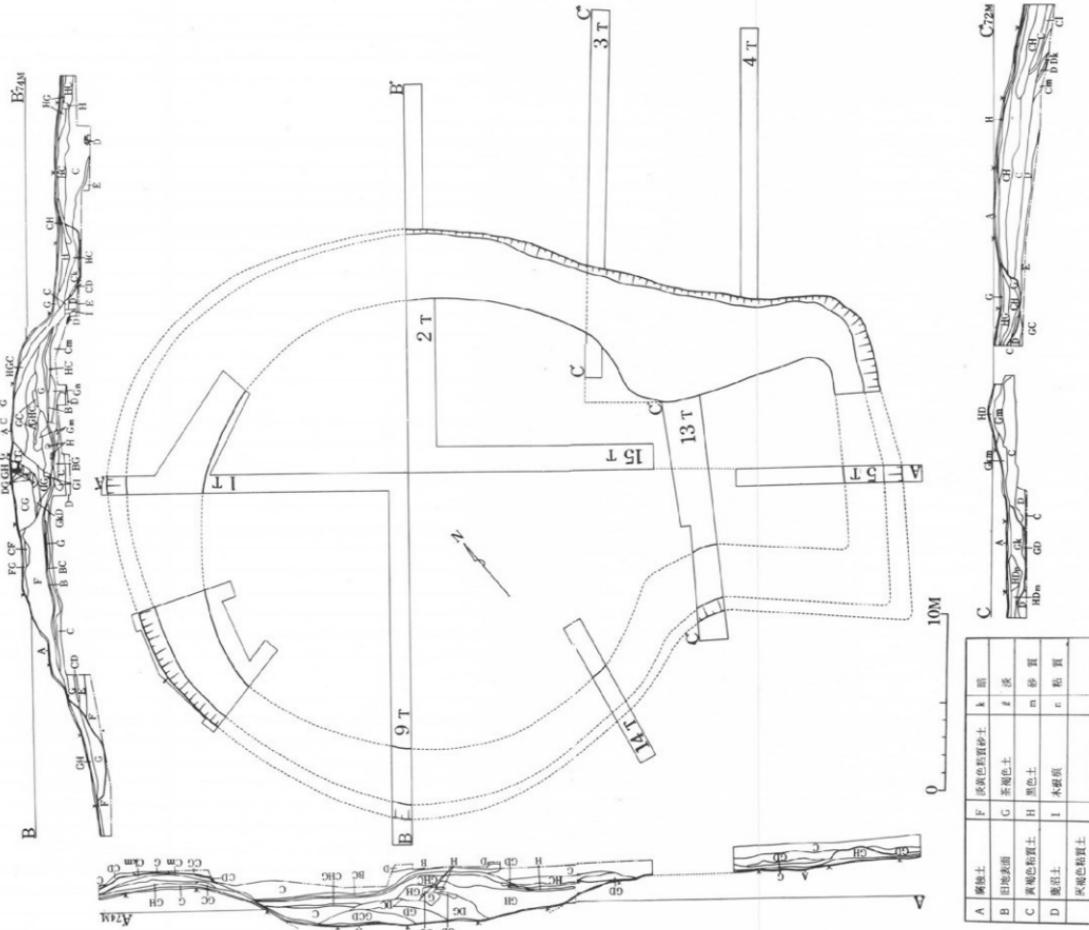


Fig. 2 うら山古墳地形図



Fig.3 墳丘実測図

Fig4 周溝及びトレンチ断面図



※ アルファベットは層の多い順に記しました。

(例) G C D というのは茶褐色土が一番多く、黄褐色土がこれにつづき、黒土が若干含まれます。

古墳築造以前のこの小丘の地形は北西より南東にかけてなだらかに低くなつておき、最も高い部分を後円部として盛土し、墳形を築造している。したがつて前方部は後円部より低く、地山を削平したのみで形をつくつてある。前方部に盛土は行なわれていない。この小丘の土層は上から表土（腐植土）、黄褐色粘質土、鹿沼土、灰褐色粘質土、淡黄色粘質砂土（玄母含有）の順に堆積している。南西部では黄褐色粘質土、鹿沼土、灰褐色粘質土が自然に切れ、淡黄色粘質砂土上に腐植土が堆積している。

この古墳の周りには塗をめぐらしてあつた。周塗は墳丘の西側から東側にかけては鹿沼土、灰褐色粘質土を掘入んでいる。後円部北西側（第1トレンチ）で周塗の幅は約6.5m、深さ約0.9mをはかるが、北東側（第2トレンチ）では幅約5.2m、深さ約1.0m、南西側（第9トレンチ）においては鹿沼土の堆積が非常にうすく、その下の灰褐色粘質土および淡黄色粘質砂層まで掘込んでいる。

この部分では幅約5.2m、深さ約0.8mである。前方部（第5トレンチ）では黄褐色粘質土を掘入しているが、鹿沼土層までは達せず、幅約3.0m、深さ約0.5mと幅せまく、かつ浅くなつてくる。さらに第11、第12、第13トレンチにおいてもそれぞれ周塗を確認することができたが、第14トレンチでは明確につかむことはできなかつた。また、第3、第4トレンチを東へ延長したのは土層がどのようになつてゐるか、二重周塗になつてないかを見る爲であったが、土層が現地表とほぼ同じような傾斜をもつて堆積をしているのみで何ら変化はみられなかつた。

盛土についてみると、後円部南西側は淡黄色粘質砂土が多くみられ、北東側では鹿沼土混りの黄褐色粘質土がみられる。

のことと、前述のように周塗南西側は淡黄色粘質砂土を、北東側は鹿沼土を掘込んでいるということから、古墳築造にあたり、まず周塗を掘下げ、その土を後円部の縁に盛りあげながら前方部周塗および前方部成形のため削平した土をもつて後円部を築き上げていったとおもわれる。しかし、これらの土量をもつても後円部を盛り上げるにはとうてい不足するので他所より搬入したことには明らかである。これにより、墳丘築造の順序の一端をうかがえる。（模式図参照）

前方部および後円部に数本のトレンチを設定し、地山まで掘下げたが、主体部を検出することはできなかつた。後円部頂部は現在ほぼ平坦になつておき、1m程削平されてしまつたと思われ、この削平された部分に本古墳の埋葬土体が安置されていたものと考えられる。笠間市長や古老の話を総合すると、すでにこの古墳は盗掘にあったとのことであり、調査の結果とほぼ符合するものであつた。

後円部盛土中および周塗内の埋積土中より、中期に属する若干の弥生式土器片や土師器片、須恵器片が出土している。この土師器片は出土位置はそれぞれ別であるが、ともに後円部周塗の底部に近いところより出土している。器形は壺および小形罐であり、他は小破片の為、器形をうかがい得ることはできなかつた。

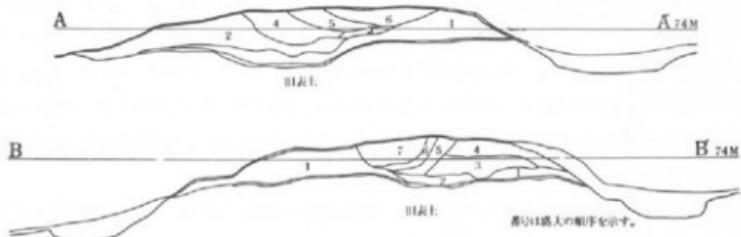


Fig. 5 うら山古墳構築過程模式図

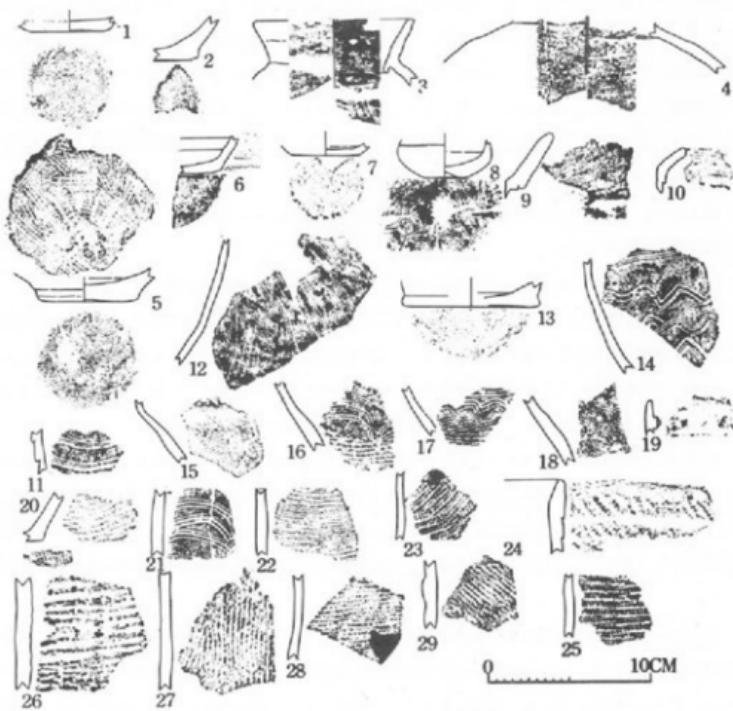


Fig. 6 墓丘並びに周辺出土土器実測図

うら山古墳出土の遺物

器 形 別	種 類	地図	国版	出土	色 調	内側 外側	輪 寸	成 分	手法上の特色		備考
									底	腹	
环	S	1	8-1	黄褐色	黄褐色	青母贝	良	底部のみ、糸切り			
环	S	2		淡黄	淡黄	タ	タ	体・底のみ。底部へラ整形。			
壶	H	3	8-7	タ	暗褐色	タ	タ	口辺部のみ。			
壶	H	4	8-8	黄褐色	赤褐色	粗砂粒型	タ	上体部の破片。外面丹塗り。			
壶	H	5	8-4	暗褐色	黄褐色	タ	タ	底部のみ。内面は擦状のカキ目。外はヘラ			
环	S	6	8-5	灰	灰	タ	タ	体無ロクロ、底部へラ整形。			
环	S	7	8-2	淡褐色	淡褐色	タ	タ	底部のみ。糸切り。			
皿	H	8	8-3	赤褐色	黄褐色	タ	タ	底部のみ。外底中央にくぼみあり。			
壶	H	9	8-6	淡黄	淡黄	タ	タ	口辺のみ。			
壶	H	10		黄褐色	黄褐色	タ	タ	口辺部のみ。			
Y	11	9-2		淡褐色	淡褐色	タ	タ	沈縞文、輪噴み痕			
H	12	9-1		黄褐色	黄褐色	タ	タ	体部片のみ。ヘラ整形。			
Y	13			淡褐色	淡褐色	タ	タ	底部のみ。			
唐	Y	14	9-3	浅	暗褐色	タ	タ	三条・四条の平行波状と平行沈縞文。			
H	15			黄褐色	黄褐色	タ	タ	体部片のみ。ひつかき痕			
Y	16	9-6		暗褐色	褐色	タ	タ	二条の平行波状沈縞文。			
Y	17	9-7		淡褐色	淡褐色	タ	タ	細縞文地面上に三条の平行波状沈縞文。			
Y	18	9-12		タ	タ	タ	タ				
Y	19	9-4		暗褐色	暗褐色	タ	タ	はり付け墻骨。隆脣上に指圧による波状文。			
Y	20			淡褐色	淡褐色	タ	タ				
Y	21	9-5		淡黄	淡黄	タ	タ	三本の平行沈縞を施文。			
Y	22	9-8		タ	タ	タ	タ				
Y	23	9-1		タ	タ	タ	タ				
Y	24	9-15		黒褐色	黒褐色	タ	タ	巻上げ、口縫折返し。口縫上部に二条の捺文。			
Y	25	9-9		淡褐色	淡褐色	タ	タ				
Y	26	9-1		タ	タ	タ	タ	不			
Y	27	9-10		黒褐色	青褐色	タ	タ				
Y	28	9-11		暗褐色	暗褐色	タ	タ	良			
Y	29	9-14		タ	タ	タ	タ				

ま　　と　　め

周辺より出土の土師器は五鏡期に属するものである。これらの土師器も弥生式土器同様、他所より運ばれてきたものとおもわれるが、器形を知ることができる土器が後円部副溝の底部に近いところから出土していることや、小形壇のように、住居跡などのものとするには不自然な器形のものが出土していることは、これらの土師器が本古墳に関するものではないかとも推測される。また、墳形から考え、前方後円墳としても比喩的古いタイプに属することからも、築造年代を5～6世紀代までもつていいことができるのではないだろうか。

石井台集落跡

石井台遺跡は、茨城県笠間市石井字新地台1444~1449の1にある。

笠間市一帯は仏頂山、三峰山、佐白山 国見山の比較的低い山々に囲まれ、盆地をなしている。

国見山に源を発する潤沼川は北に大きく迂回し、市街地の西側で仏頂山の東方より流れ出た片庭川と合流する。潤沼川の支流である片庭川が、笠間の平野部に達する地点に、仏頂山より分岐した新地の低い丘陵（標高100 m）が、畠田から南東に細長く伸び平野部に突き出ていて、先端部に市役所が存在する。市役所より北方400 m付近は、標高50mほどで東西にゆるやかな斜面を作り、片庭川によって形成された沖積地に続いている。遺跡は、この斜面が沖積地に変わるところに存在する。

遺跡付近は、現在でも石井神社を中心として丘陵より沖積地にかけて多数の民家があり、生活適

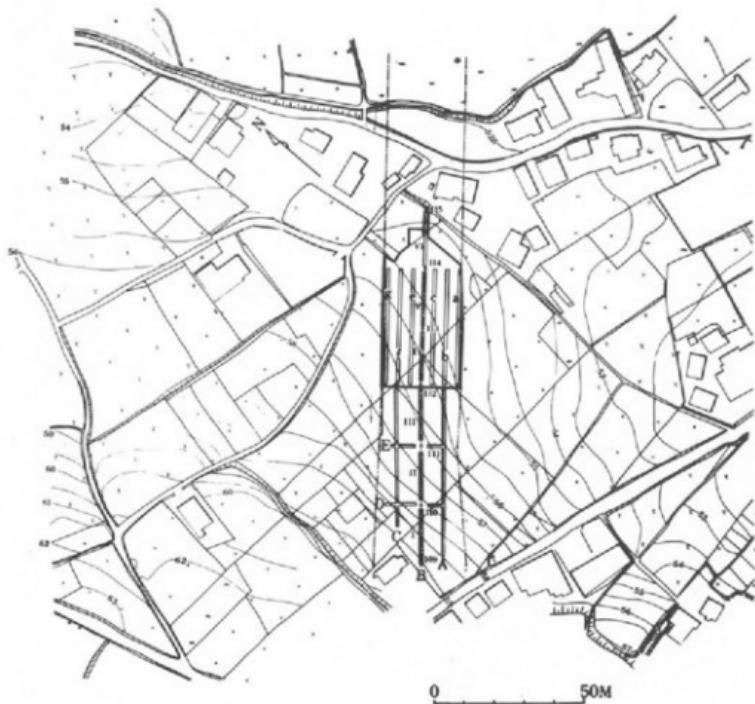


Fig. 7 石井台集落跡全体測景図

Fig.8 石井台集落跡遺構配置図

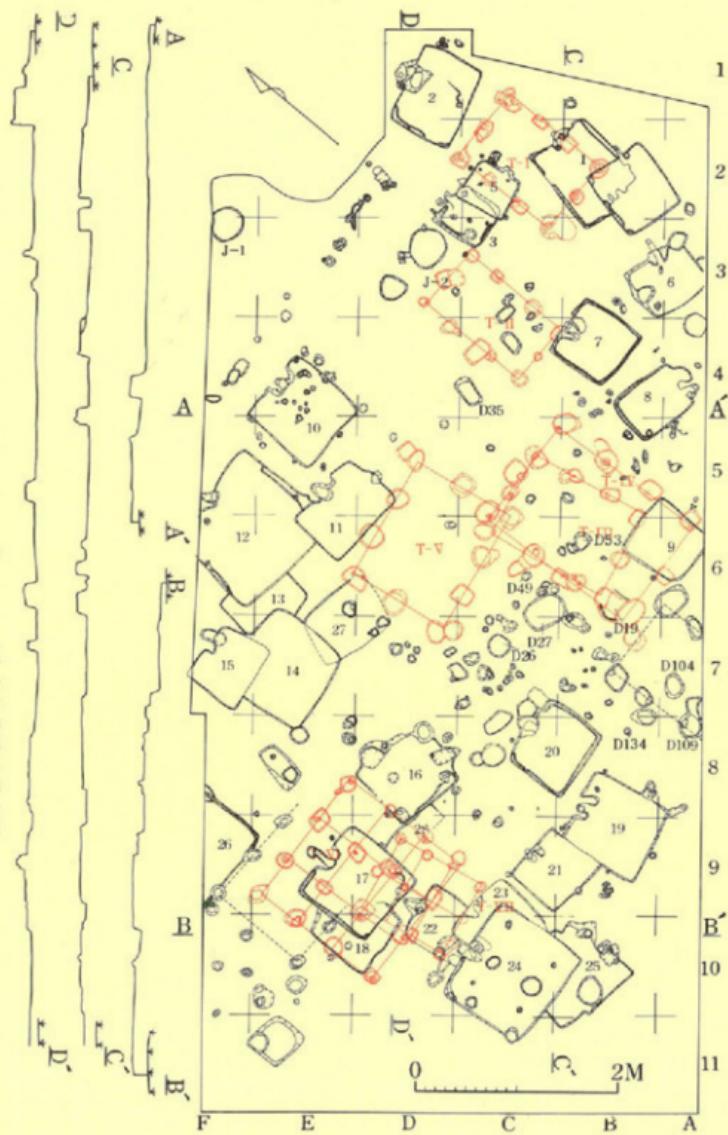
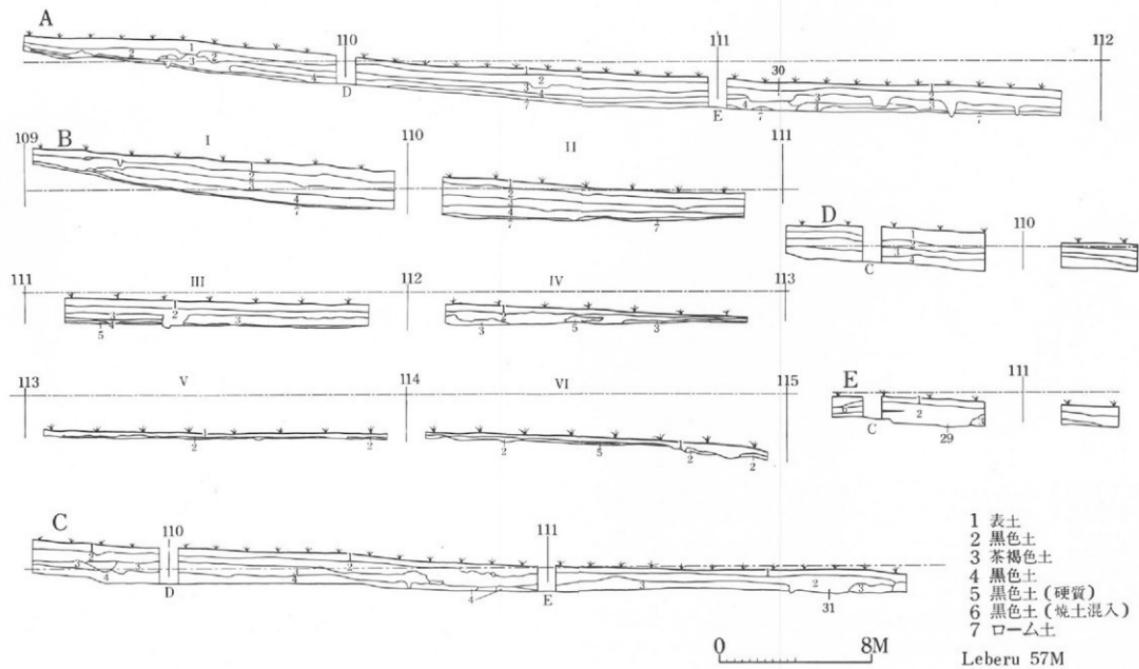


Fig. 9 トレーンチセクション



地である。丘陵上方の縄文遺跡の土器片が丘陵の中腹までみられるが、平面発掘を実施した沖積地寄りにいたっては、まれにしかみられなかつた。

遺跡の総面積は25m×140m（3500㎡）であり、25m×50m（1500㎡）に平面発掘を実施した結果、竪穴式住居跡29軒、掘立式建物跡7棟（1棟は倉庫跡と思われる）、出土遺物には土師器、須恵器、カワラケ、灰陶器、鉄製ノミ、鎌、刀子、纺錘車などがある。特に土器には文字を墨書きしたものが多く見い出され、集落居住民の文化程度が高かつたことを思わせる。

これらより本遺跡が平安時代の集落遺跡であり、鎌倉時代に栄えた当方は、常陸風上記・新治郡の条に「郡より東五十里に、笠間の村あり。」とあるように、古代からきわめて豊かな人口を擁していた生活適地であったことが理解できる。

層位観察のためのトレンチはA～Eまで計5本設定したが、特にBトレンチは本跡の東西に通じたもので、このトレンチによって観察されたことはまずローム層上に堆積した黒色土〔4〕が最も111付近まで認められることであり、他のトレンチもほぼ同様な状態を示すことがある（Eトレンチはわずかに黒色土〔4〕の堆積外にある。）最も110付近で幅0.5mのローム層の落ち込みが認められるが、これはおそらくAトレンチの最も111付近に認められる幅約5mのローム層の落ち込みに続くものと考えられる。これは上方のCトレンチには認められない。黒色土中における遺物は縄文土器片とそれに伴う石器などで上方から流下堆積したものであろう。本跡に構築された住居跡などの遺構は、つぎの地質土である茶褐色土層〔3〕か、もしくは黒色土層〔2〕からと思われるがBトレンチⅣについて述べるなら、黒褐色土層がみとめられるということはBトレンチⅦの黒色土がローム直上にあり、この黒色土中より遺物が多く出土していることなどから考えると、黒色土中より遺構が掘り込まれたものと考えてよいものと思われる。遺物としては茶褐色土中より縄文土器、須恵器、陶器の出土が見られ、特に東方は堆積が浅いためローム層上面、もしくはその上方より集中的に出土した。

以上のことから集落が形成されたのは最も110付近に認められた谷を西の境として、東方は最も115付近のローム層の傾斜変換点が台地の先端となり、東西100mの幅であったことはほぼ間違いないものと思われるが、南北については明らかではない。しかし遺跡東部を南北に流れる片庭川の沖積地を考慮に入れて考えると、ある程度の集落の範囲を推定しうることができる。

つぎに発掘調査地域内に認められた遺構は縄文時代のものが一部と、土師器、須恵器、カワラケ土器を併せ竪穴式住居跡・掘立式建物跡であった。ことに竪穴式住居跡と掘立式建物は単独のものが少なくそのほとんどが互いに切り合っていた。

縄文期遺構

J-1 土塙

本跡は、F-3（丘陵の沖積地寄りに）に位置し、平面形は長径約1.8m、短径約1.6mの椭円形で、塙壁はローム層上面まで除土したため低く、最深約36cmを計り、内傾気味に立ちあがっている。底面は、ほぼ平らであった。

出土遺物は縄文土器の細破片が、少量なため時期を決定するには不充分であった。

J-2 土塙

本跡は、D-3に位置し、平面形は径約1.8mの不整円形で塙壁は、ローム層上面まで除土してもかかわらず、最深約50cmを計り、内傾気味に立ちあがっている。本跡は上端の径より下端の径がやや大きく、底面は平坦で、フラスコ状のいわゆる袋状土塙と称されている遺構と思われる。

出土遺物はJ-1と同様に少量の縄文土器片のみであり、時期を決定することは困難であった。

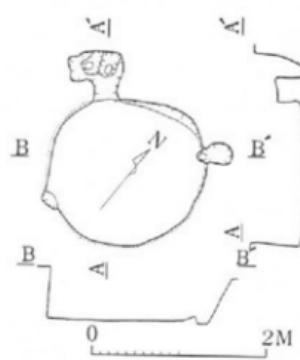
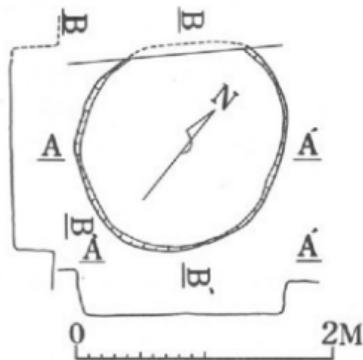


Fig.10 J-1 土塙実測図

Fig.11 J-2 土塙実測図

1号住居跡

平面形	側壁	床	周囲	柱穴	カマド	備考
本跡は4号住居跡の上に構築され、さらに掘立式建物T-Iが後に掘りこまれている。一辺が3.5×4.2mの長方形平面で、北壁の中央にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	側壁はローム層上面まで残土したため立ちあがりが低い。とくに東壁は部分のみ貼床となっている。掘立式建物跡T-Iの掘り方が3個ある。南東隅付近に廃土が遺存していた。	床はローム層そのもので、4号住居跡との重複部分のみ貼床とされる。幅約15~20cm、深さ約10cmである。	東壁、及び北西壁と南西壁の間に認められなかつた。	柱穴は全く認められなかつた。	北壁中央よりやや東寄りに、黄白色粘土で構成している。火床は方形でよく焼け赤色を呈していた。煙道中央に河原石が認められたが、天井を支えるためのものと思われる。	床面中央に径約30cm・深さ約40cmの性格不明の穴がある。



Fig.12
第1号住居跡石塚実測図

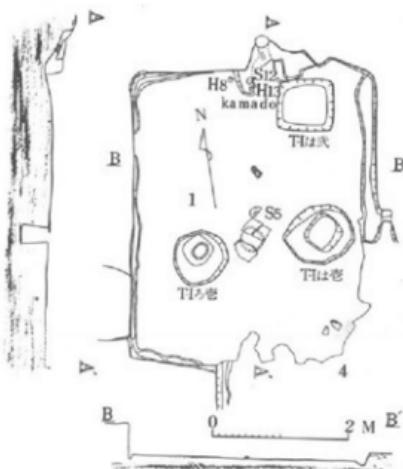


Fig.13 第1号住居跡実測図

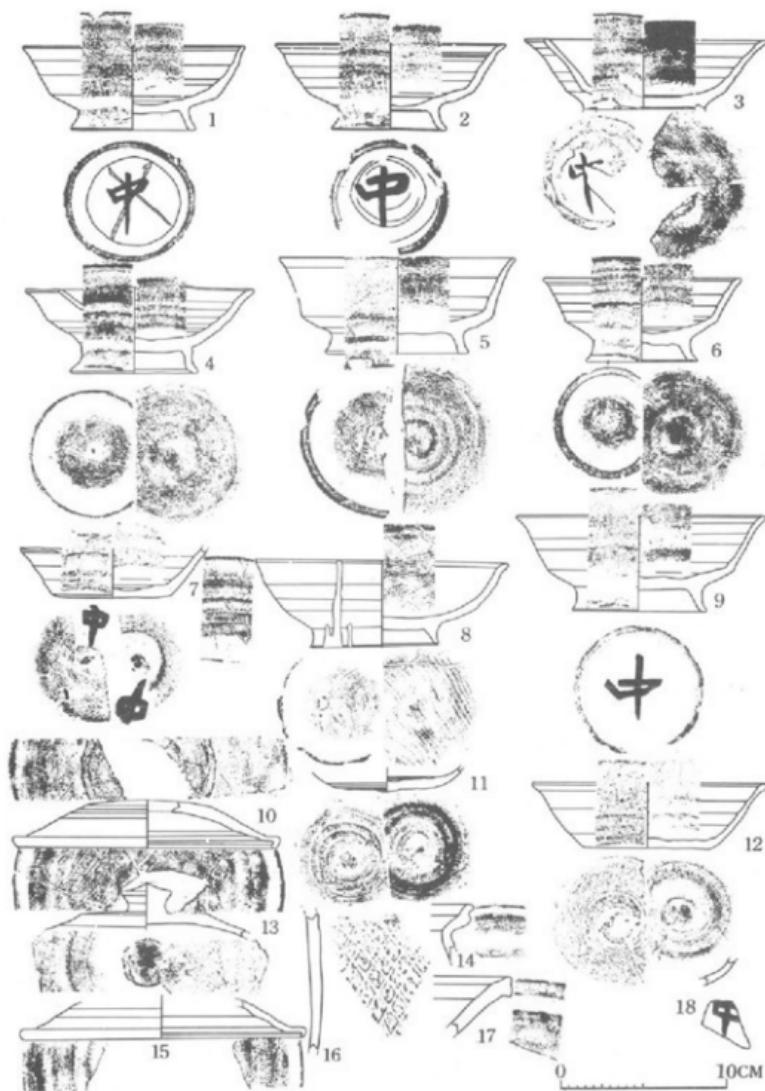


Fig. 14 第1号住居跡土器実測図

1号住居跡出土十器一覧表

器形	種別	埋蔵	測定	出土場所	色調		胎土	焼成	手法上の特色	備考
					内側	外側				
壺	S	1	45-3	埋	灰褐色	灰褐色	石英混	良	口辺、体部ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底墨「中」
壺	S	2	45-4	タ	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ヨクロ。底墨ヘラ起し。付高台。	底墨「中」
壺	H	3	44-3	タ	黒	黄褐色	雲母混	タ	口辺、体部ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底墨「中」再使
壺	S	4	43-1	タ	鈍灰	暗灰	粗砂粒混	タ	口辺、体部ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底ヘラ
壺	S	5	43-2	床面	灰褐色	黑灰	タ	タ	口辺、体部ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底ヘラ
壺	S	6	43-3	埋	茶褐色	茶褐色	タ	タ	口辺、体部ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
壺	S	7	45-2	タ	黄褐色	黄褐色	タ	タ	体部ヨクロ、底部ヘラ起し。	底内外墨「中」
壺	H	8	44-2	床	墨	黄褐色	雲母混	タ	体部、底墨ヨクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底部墨朱
壺	H	9	44-1	埋	タ	褐	粗砂粒混	タ	口辺、体墨ヨクロ。底墨ヘラ起し。付高台。	底墨「中」
蓋	S	10	43-4	タ	黒	茶褐色	石英混	タ	口辺、体部ヨクロ。他欠	
壺	S	11		タ	灰褐色	黄褐色	タ	タ	底部ヘラ起し。	
壺	S	12	45-1	床	タ	タ	粗砂混	タ	口辺、体部ヨクロ。底墨ヘラ起し。	底ヘラ
蓋	H	13		タ	黒	黄褐色	微砂粒混	タ	体部ヨクロ、上部ヘラ起し。	宝珠つまみ
甕	H	14		埋	黄褐色	タ	雲母混	タ	口辺ヨクロ。	
甕	H	15		タ	黒	黄褐色	小石混	タ	口辺、体部ヨクロ。上部ヘラ起し。	つまみ不明
甕	Y	16	44-4	タ	暗褐色	褐	雲母混	タ	斜格子文。	
甕	S	17		タ	鈍灰	黑灰	砂粒混	タ	口辺ヨクロ、他欠。	
壺	H	18		タ	黒	黄褐色	粗砂粒混	タ	体部ヨクロ。	体外墨「中」

2号住居跡

平面形	気 壁	床	周 壁	柱 穴	カ マ ド	備 考
土壌によつて カマドを構さ れているが、 一辺が4.4×3.2 mの長方形平 面で北壁にカ マドを設けた 壁穴式住居跡 である。	側壁はローム層上 面まで除土したた め立ちあがりが低 い。とくに南壁は ローム層が傾斜し ていてため損著で ある。北壁約50cm、 南壁約10cm、東壁約50cm、 西壁約25cmで いずれの側壁もやや外傾気味である。	貼床ではば平ら であったが、南 壁寄りに貼床が 剥離した段が認 められた。	西壁にのみ認 められ、幅約 20cm、深さ約 4cmである。 P 4は本住居跡に伴なうものか どうかは明らかでない。	柱穴らしき穴は 住居跡内に1個 外に4個認めら れたが、P 2～ P 4は本住居跡に伴なうものか どうかは明らかでない。	土壌によつてそ の大部分を構さ れ、わずかに右 袖が遺存し、黄 白色砂質粘土で 北壁中央に構築 していた。壁道 は確認できなか つた。	

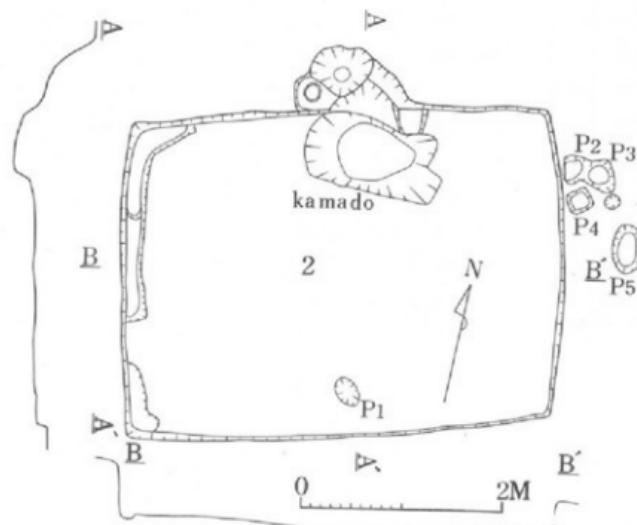


Fig.15 第2号住居跡実測図

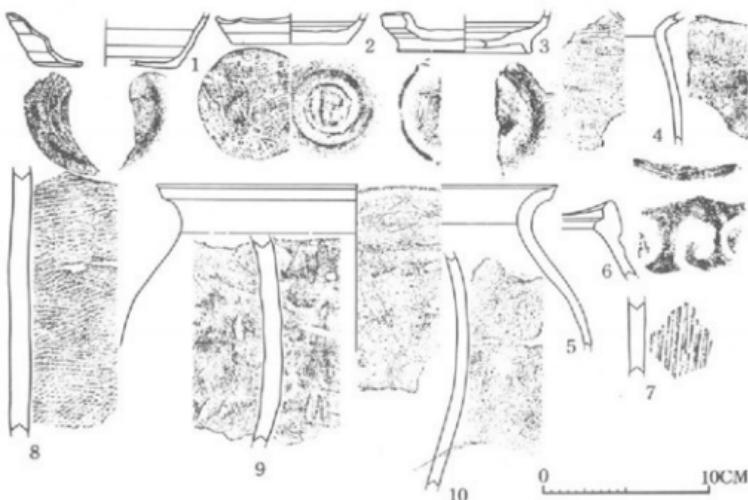


Fig.16 第2号住跡出土土器実測図

2号住跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	鉢 底	図版 番 号	出土 場所	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
环	S	1		埋	灰褐	灰褐	粗砂粒混入	良	口辺欠、体部ロクロ、底部ヘラ起し。	
甕	S	2	46-2	夕	夕	夕	夕	夕	底部、一部体部遺存、ヘラ整形、再整形。	
环	H	3	46-3	夕	黑	褐	砂礫混入	夕	底部のみ、ヘラ起し、付高台。	
甕	H	4		夕	茶褐	茶褐	石英混入	夕	体部のみ、ヘラ歪形、巻き上げ。	
甕	H	5	46-4	夕	夕	夕	雲母石英混	夕	口辺ロクロ。体部ヘラ整形。	
	J	6		夕	夕	夕	夕	夕		
	J	7		夕	褐	褐	石英混入	夕		
甕	S	8	46-1	夕	灰	黑褐	夕	夕	体部のみ、平行沈線タタキ。	
甕	H	9		夕	茶褐	夕	粗砂粒混入	夕	体部のみ、ヘラ整形、巻き上げ。	
甕	H	10		夕	黄褐	夕	雲母石英混	夕	体部のみ、ヘラ整形。	

3号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	備考
本跡は5号住居跡の後に構築され、さらに獨立式建物跡T-Iによつて北東隅を若干壊されてゐる。一辺2.6×2.4mのほぼ方形平面で北壁中央にカマドを設けた窓式住居跡である。	ローム層上面まで 土したため壁の 立ちあがりがきわ めて低く、北壁約 8cm、南壁約28cm 西壁約38cmで直立せず外傾して いる。なお東壁は5号住居跡内の黒 色土中に塗かれているため確認で きなかつた。	床はローム層で 堅く、5号住居 跡との重複部分 は貼床であった。	南、西、北、 壁に認められ 、幅約10~20 cm、深さ約4 cmである。	柱穴らしき穴は 計5個認められ た。P1~P3が 主柱で、P4 は補助柱と思わ れる。なおP5について は本跡に 伴うものか、どうかは明らかで ない。	北壁中央にロー ム層を梢円形状 に掘り込んだ部 分が認められた が、余りにも作 りが粗末で、カ マドとは断定し がたいが、わざ かな痕が認められたことからして、たとえカ マドであつても余り使用されなかつたものと 考えられる。

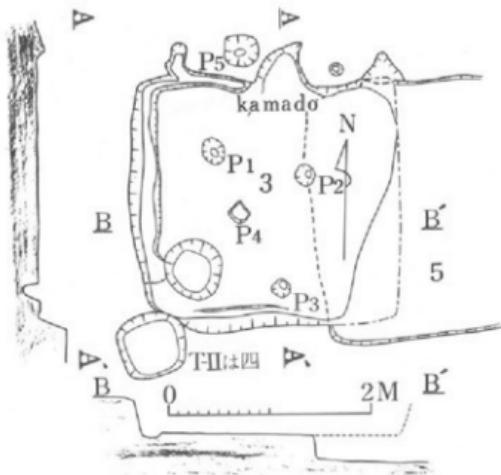


Fig.17 第3号住居跡実測図

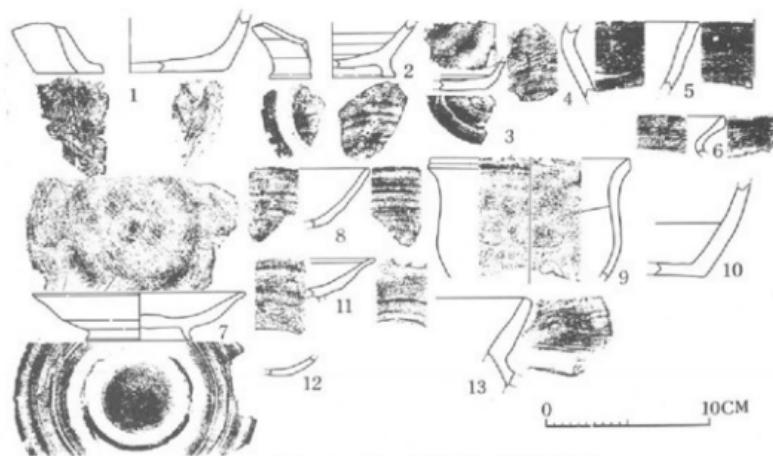


Fig.18 第3号住居跡土器実測図

3号住居跡出土土器一覧表

器種 形 別	種 類	図版 番	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手法上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
甕	S	1	46-7	埋	青灰	青灰	石英混	良	体部、底部へラ整形。
坏	S	2	46-5	ク	灰褐	黑	タ	体部ロクロ、底部付近高台。	
坏	S	3		ク	灰褐	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部へラ起し。	外カーボン附着
甕	S	4		ク	タ	石英混	タ	体部ロクロ、他欠。	
甕	S	5		ク	黄褐	黄褐	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部欠。
甕	H	6		ク	淡茶	茶褐	タ	口辺ロクロ。体部、底部欠。	
坏	H	7	46-6	ク	黑	黄褐	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し、付高台。	
坏	H	8		ク	焦茶	茶褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。
坏	H	9		ク	赤褐	赤褐	雲母混	タ	口辺ロクロ、体部へラ整形。巻き上げ。
甕	H	10	46-8	ク	茶褐	茶褐	石英混	タ	体部、底部へラ整形。巻き上げ。
坏	H	11		ク	黑	黄褐	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。付高台。
坏	H	12		ク	茶褐	茶褐	粗粒混	タ	体部ロクロ。
甕	H	13		ク	黄褐	タ	石英混	タ	口辺のみ。磨り消文。

4号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は1号住居跡の構築前に構築され、更に掘立式建物跡T-1が北壁の一部を横していた。一边が3.3×3.8mの跡がやや張る長方形平面で、北壁中央にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	ローム層上面まで除土したためと、ローム層が傾斜しているため壁の立ちあがりはまちまちである。北壁約38cm、南壁約28cm、東壁約24cm、西壁約54cmで、直立せざに内溝気味に全体的に外傾している。	床はローム層で堅く、遺存状態も良好ではば平らである。	西壁北隅寄りに認められ幅約10cm、深さ約6cmである。	柱穴は全く認められなかつた。	左袖が壊されているが、北壁中央やや東寄りに黄白色砂質粘土で構築していた。火床は長方形であまり焼けていないが、わずかに赤色を呈す。ローム層を外側に掘り込み縁道を設けている。	

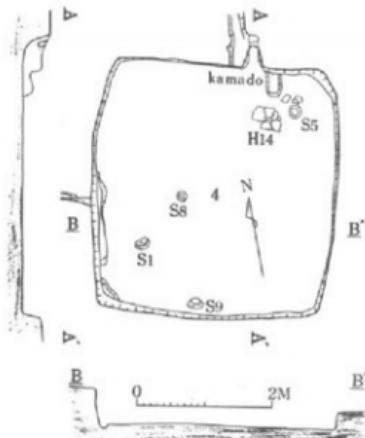
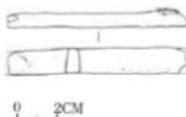


Fig. 19 第4号住居跡実測図

Fig. 20 第4号住居跡鉄製品

不明鉄器 (fig. 2-①)
埋積土中出土。現存長9cm、幅11cm、厚さ0.7cmの断面長方形 (1.3×0.7cm) で両端は欠失し、種別は不明である。



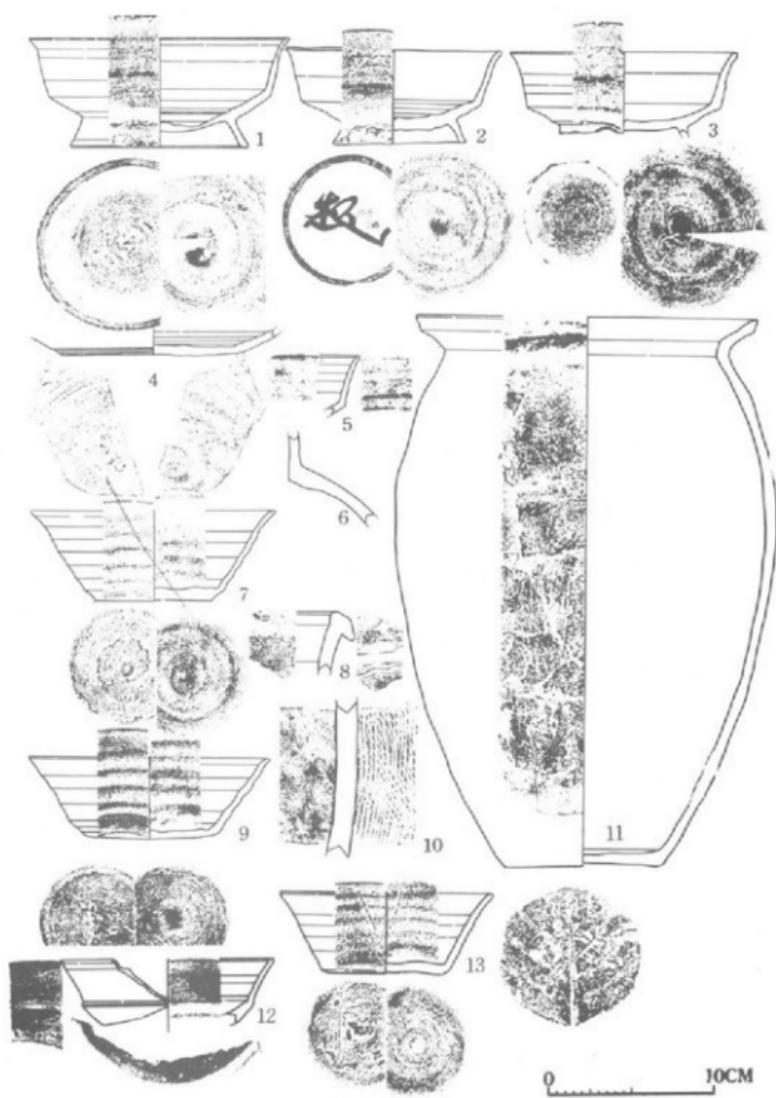


Fig. 21 第4号住居跡土器実測図

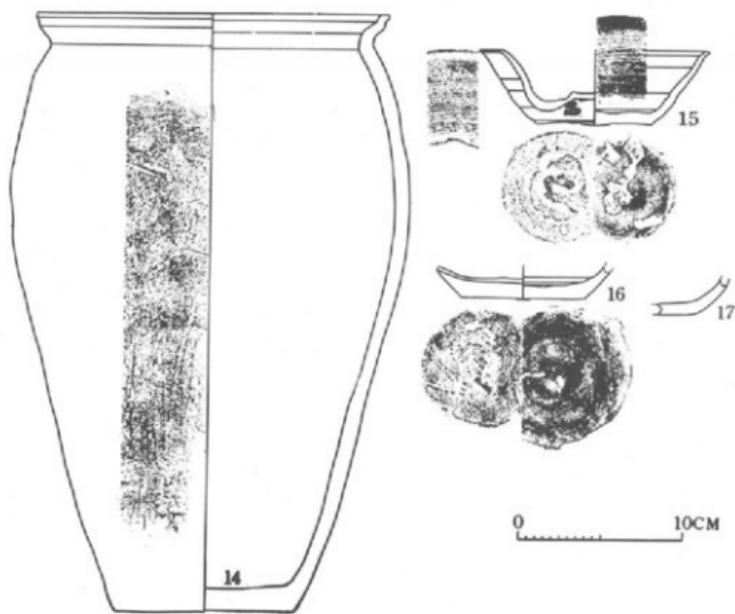


Fig.22 第4号住居跡土器実測図

4号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	標 本	國 版	出 土	場 所	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
						内 側	外 側				
环	S	1	49-2	床	青灰	黑灰	石英混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底ヘラ	
环	S	2	48-3	埋	灰褐	灰	粗砂粒混	々	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	底墨	
环	S	3	49-1	々	灰褐	灰褐	粗砂粒混	々	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	青使	
盤	S	4		々	灰	青灰	云母石英混	々	底部ヘラ起し。他欠。		
环	S	5		々	青灰	々	石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部欠。		
臺	S	6		々	灰褐	黄褐	粗砂粒混	々	体部のみ、ロクロ。		
环	S	7	48-4	々	黄褐	褐褐	粗砂粒混	不	口辺、体部ロクロ、底部ヘラ起し。		
甕	S	8		々	白灰	灰	石英混	良	口辺のみ、ロクロ。擦拂き波状文。		
环	S	9	48-1	床	淡褐	淡褐	云母石英混	小	口辺、体部ロクロ、底部ヘラ起し。		
甕	S	10	49-5	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒混	良	体部のみ、平行沈線文。		
甕	H	11	47-1	々	黄褐	褐	云母混	良	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。底部木集部		
环	S	12	49-4	々	陶灰	陶灰	石英混	良	口辺、体部ロクロ、底部欠。		
环	S	13	48-2	々	褐	褐	粗砂粒混	不	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	底ヘラ	
甕	H	14	47-2	々	淡褐	淡褐	云母混	良	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。底部欠。		
环	H	15	49-3	々	黑	黄褐	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	体墨「……呂」	
环	H	16		々	々	淡褐	云母混	良	底部のみ、ヘラ起し。		
环	H	17		々	々	々	々	良	体部ロクロ、底部ヘラ起し。		

5号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡の西壁を壊して3号住居跡が構築され、さらに掘立式建物跡T-Iが掘り込まれている。	側壁はローム層上に面まで除土したため、壁の立ちあがりは低い。北壁約32cm、南壁約40cm、東壁約42cm、西壁約32cmで直立せずやや外傾している。	貼床で堅く、遺存状態が良好でほぼ平らであつた。	周溝は全く認めることができない。	本跡に伴なうと思われる柱穴は計9個が認められた。P 1-P 3は主柱、P 6とP 8は補助的な柱穴と思われる。他の柱穴については不明である。	東壁中央よりやや南寄りに、ローム層を外方に形狀に掘り込んだ部分が認められた。一面焼け	ておりカマドと
2.5×2.6mの台形平面で東壁中央にカマドを設けた櫛穴式住居跡である。					と思われる。粘土が若干認められたことから、恐らく他の住居跡と同様に砂質粘土で構築したものと思われる。火床は方形で良く焼けており赤色を呈す。壁道の痕跡が二ヶ所認められた。	

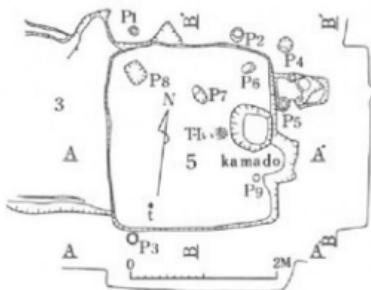


Fig.23 第5号住居跡実測図

5号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	捕 獲 系	図 版 番	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
环	S	1	50-1	埋	白灰	暗灰	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ、底部ヘラ起し。	

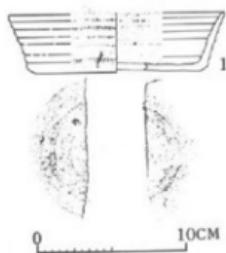


Fig. 24
第5号住居跡土器実測図

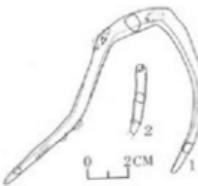


Fig. 25 第5号住居跡鉄製品実測図

カスガイ (Fig. 25-1)

住居跡内北西隅床面に接しての出土。比較的短いもので、足が非常に長い。

釘 (Fig. 25-2)

住居跡内埋積土中より出土。現存長 3.4cm、断面は方形 (0.5×0.7cm)。頭部と先端は欠失。

6号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
北東隅と東西 壁中央は掘り 方によつて壊 されている。 一辺が 3.2× 2.7m の長方 形平面で北壁 中央にカマド を設けた堅穴 式住居跡であ る。	地表面よりローム 層上面までかなり の堆積があつた。 ローム層上面まで 歯土したにもかか わらず四壁の遺存状態は良好で、 北壁約48cm、南壁約46cm、東壁約 40cm、西壁約60cmで壁の立ちあが りは直立している。	床はローム層で 堅く、中央が若 干くぼんでいた。	周溝は全く認め られなかつた。 柱と思われるが、P 3について 柱穴とするにはカマドの前とい う位置より考えて困難である。	柱穴らしき穴は 計3個認め得た。 P 1とP 2は主 柱と思われるが、P 3について 柱穴とするにはカマドの前とい う位置より考えて困難である。	カマドの遺存状 態は良好で、北 壁中央よりやや 東寄りにローム 層を外側に掘り くぼめ、石英質 の砂礫を多く含んだ黄色砂質粘土で構築していた。 煙道が認められ、天井は遺存がよい。火床は長方 形でよく焼けていて堅い。またカマド内に小型の 甕が横倒しの状態で出土した。	床面上30cm の埋積土中 より鎌が出土した。

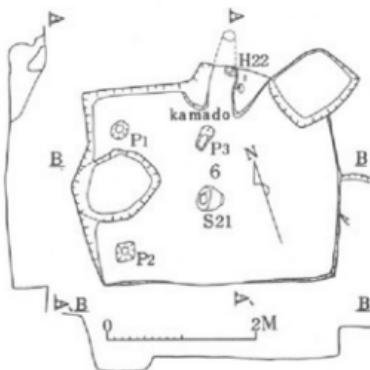


Fig. 26 第6号住居跡実測図

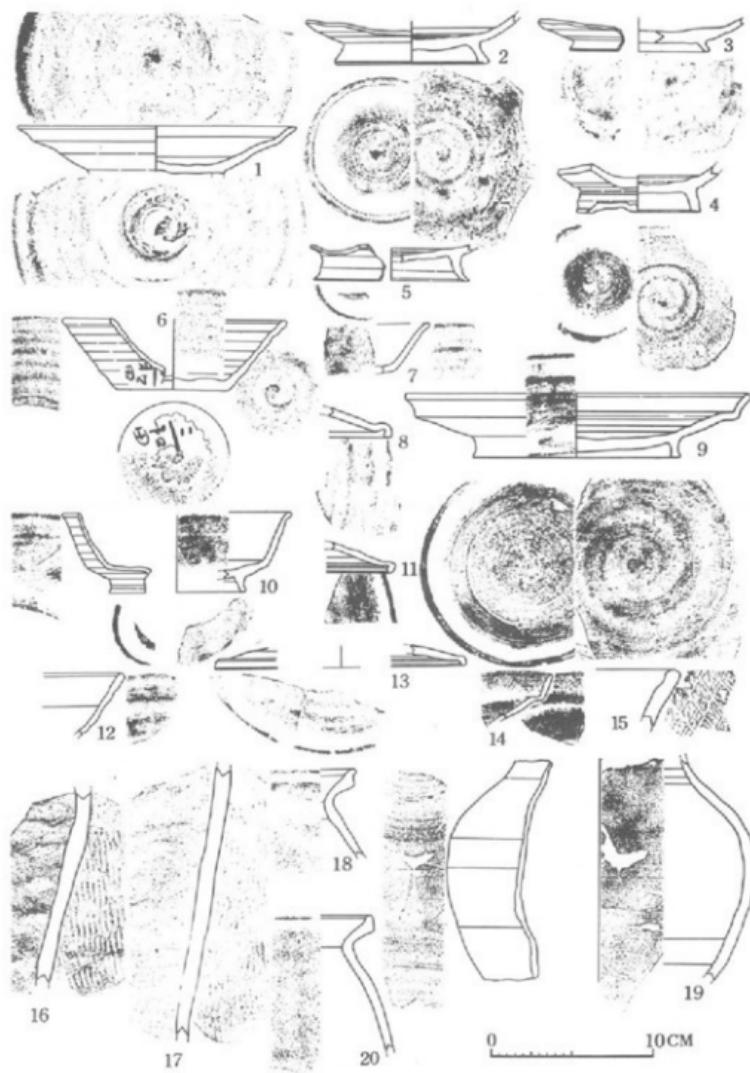


Fig. 27 第6号住居跡遺物実測図

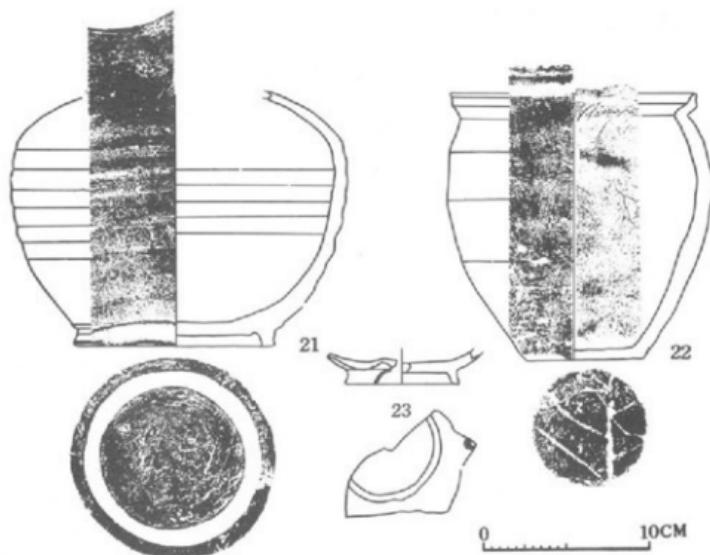


Fig. 28 第6号住居跡土器実測図

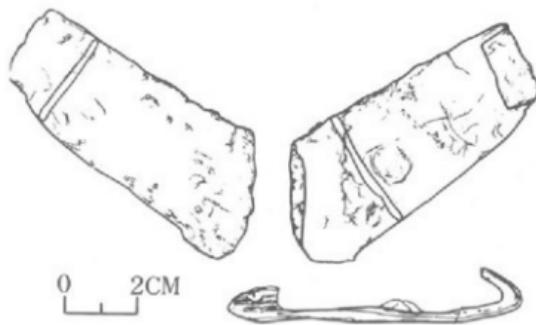


Fig. 29 第6号住居跡鉄製品実測図

6号住居跡出土土器一覧表

器種 形 別	持 因 名	尺板 底	出土 場所	色調		胎 土	製 成	手法上の特色	備考	
				内側	外側					
盤	S	1	52-1	埋	灰褐色	粗砂混	長	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。付高台。	円筒	
环	S	2		タ	タ	石英混	タ	体部ヘラ起し。付高台		
环	H	3		タ	黑	粗	粗砂混	タ	口辺、体部ロクロ。	
环	S	4	50-3	タ	灰褐色	灰褐色	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。	底へラ	
环	S	5		タ	灰	灰	タ	底部ヘラ起し。付高台。		
环	S	6	50-4	タ	青灰	青灰	タ	口辺、体部ロクロ、底部ヘラ起し、再整形。	体底墨「三和田」	
环	S	7		タ	褐	白褐	粗砂混	不	口辺体部ロクロ。	
盖	H	8		埋	白褐	黄褐	金雲母混	良	口辺、体部ロクロ。	
盖	S	9	50-5	タ	灰褐色	灰褐色	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
环	S	10		タ	黄褐	黄褐	云母石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
盖	S	11		タ	灰褐色	灰	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。上部欠。	
环	H	12		タ	黑	黑褐	粗砂粒混	タ	底部ヘラ起し。付高台。	
盖	H	13	50-2	タ	褐	褐	タ	口辺、体部ロクロ。欠。		
盖	S	14		タ	灰褐色	灰褐色	タ	口辺、体部ロクロ。		
Y	15			タ	黑褐	黑褐	云母混	タ	お格子文。	
盖	S	16	52-2	タ	暗灰	灰	粗砂粒混	タ	体部のみ、平行沈線タタキ。	
盖	S	17	52-4	タ	黑灰	黑灰	石英混	タ	体部のみ、平行沈線タタキ。	
盖	H	18	52-3	タ	褐	褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ。	
盖	S	19		タ	米褐	米褐	云母石英混	タ	体部のみ、ロクロ。	
盖	H	20	52-5	タ	*	*	タ	タ	口辺ロクロ。	
盖	S	21	51-1	床	黑灰	黑灰	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。	
盖	H	22	51-2	タ	米褐	米褐	石英混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形、巻き上げ。	
环	H	23	埋	黑	黄褐	云母混	タ	体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	木製裏	
									体墨	

カマ (Fig. 29)

住居跡北東隅寄りの埋積土中より出土。現存長8cm、幅3.3cm、厚さ0.3~0.4cmである。柄の着裝部は2.5cm程度の幅と考えられる。末端はわずかに折りかえしが認められる。先端は着裝部端のように折りまがって先端部が欠失している。折り曲った部分をも含めて、長さは上端で8cm、下端で9.5cmである。

7号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
北壁中央は掘立式建物跡T一Ⅱによつて壊されているが、一辺約3.2mの方形平面で北壁中央にカマドを設けた堅穴式住居である。	ローム層上面まで 疊土したが地表面より深いため北、西壁では遺存状態 がよいが、傾斜しているため南、西壁は立ちあがり が低い。北壁約60cm、南壁約35cm、東壁約56cm、西 壁約30cmで直立せず外傾している。	貼床で堅く、ほぼ平らであった。	全般に盛り、深さ約5cmである。	本跡の内部には柱穴は全く認められず、外部に穴3個を認めえたが本跡に伴なうものかは明らかでない。	北壁中央部にありローム壁よりスザ混り黄白色粘土で周袖を構築していたが、カマド上部を掘立式建物跡T一Ⅱによつて壊されているため煙道の有無は明らかでない。火床は円形でよく焼け赤色を呈していた。	本跡からは特に石の出土が多くみられた。またカマド左袖横に青灰色の粘土がみられたがこれはカマドの粘土とは異なり、他の使用されたものと考えられる。

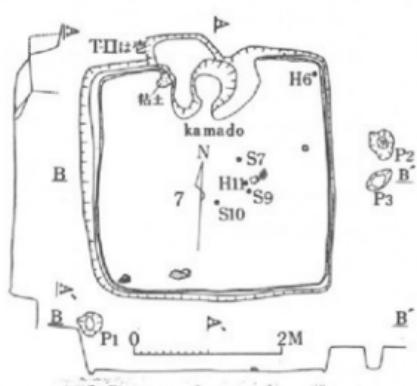


Fig. 30 第7号住居跡実測図

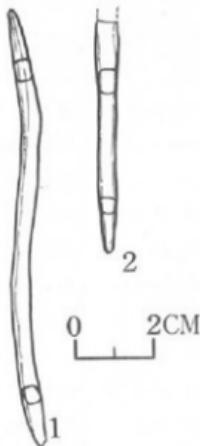


Fig. 31 第7号住居跡鉄製品実測図

不明鉄製品 (Fig. 31-1)

埋積土中出土。現存長11cm、断面は丸味をもつた方形で経約0.5cm、損耗が強いが一端が方形で細くなり、鐵錠の基を思わせる。

釘 (Fig. 31-2)

住居跡中央の埋積土中出土。現存長5.7cmで断面は方形である。頭部は欠失。

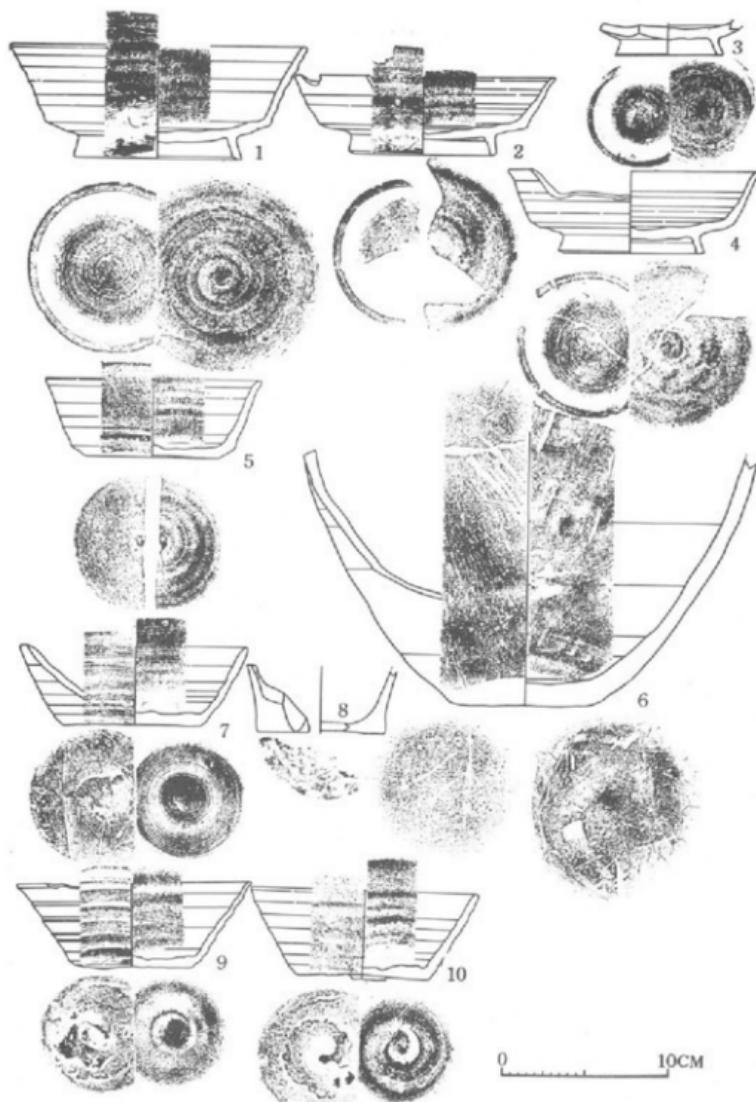


Fig.32 第7号住居跡土器実測図

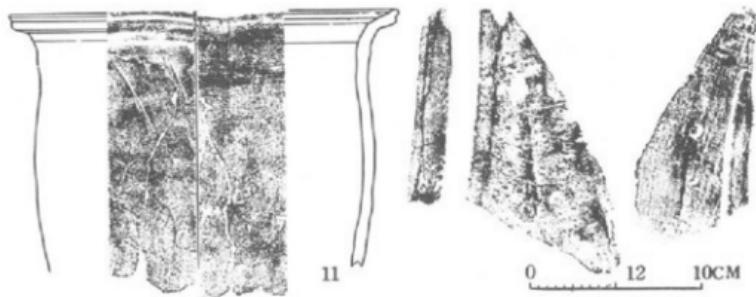


Fig. 33 第7号住跡土器実測図

7号住跡出土土器一覧表

器形 別	種 類	鉢 盆	圓版 板	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手法上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
坏	S	1	55-1	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
坏	S	2	53-4	タ	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
坏	S	3	55-3	タ	灰白	灰白	タ	タ	底部ヘラ起し、付高台。他欠。	
坏	S	4	55-2	タ	灰褐	灰褐	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	
坏	S	5		タ	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
甕	H	6	54	床	淡褐	淡褐	雪母混	タ	体部ヘラ整形。巻き上げ。底部木葉底。	
坏	S	7	53-1	タ	青灰	青灰	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し、再整形。	
甕	J	8		埋	茶褐	赤褐	微砂粒混	タ	磨り消し文。	
坏	S	9	53-2	床	青灰	青灰	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
坏	S	10	53-3	埋	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
甕	H	11		床	黄褐	褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形、巻き上げ。	
瓦	女	12	55-4	埋	赤褐	赤褐	タ	タ	横骨痕、布目合わせ目。	

8号 住居跡

平面形	側 壁	床	周 溝	柱 穴	カ マ ド	備 考
東壁カマド左 袖が掘り方の 上に構築され た。一辺が 2.6 × 3.4m の長 方形平面の堅 穴式住居跡で ある。	ローム層上面まで 除土したため壁の 立ちあがりがきわ めて低く、北壁約 20cm、南壁約 6cm 東壁約26cm、西壁約22cmで直立せず 外傾している。	床はローム層で 堅く、ほぼ平ら であるがカマド に向って傾斜し ている。	北、西、南壁 の一部に認め られる。幅約5 ~10cm、深さ 約3cmである。	柱穴は住居跡内 には全く認めら れなかった。住 居跡外にP 1 ~ P 6 の穴を認め たが、P 1 P 2 は主柱の可能性 が考えられ、P 3 ~ P 6 については後に掘られたものと思われる。	東壁の南寄りに あり、花崗岩質 の石を周袖の芯 とし、サヤ混り の黄白色砂質粘 土で構築してい た。火床は方形 でよく焼けてお り赤色を呈して	いた。徑道は確認できなかつた。

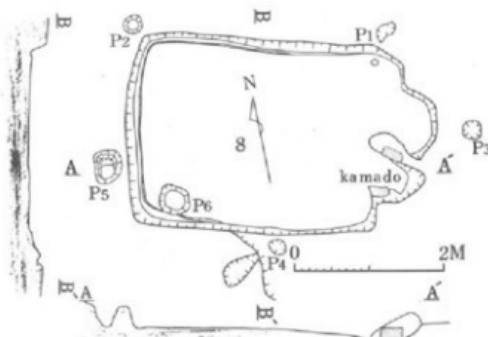


Fig. 34 第8号住居跡実測図

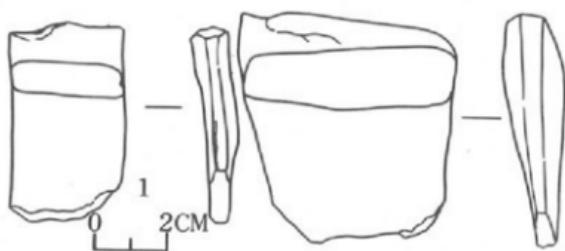


Fig. 35 第8号住居跡石実測図

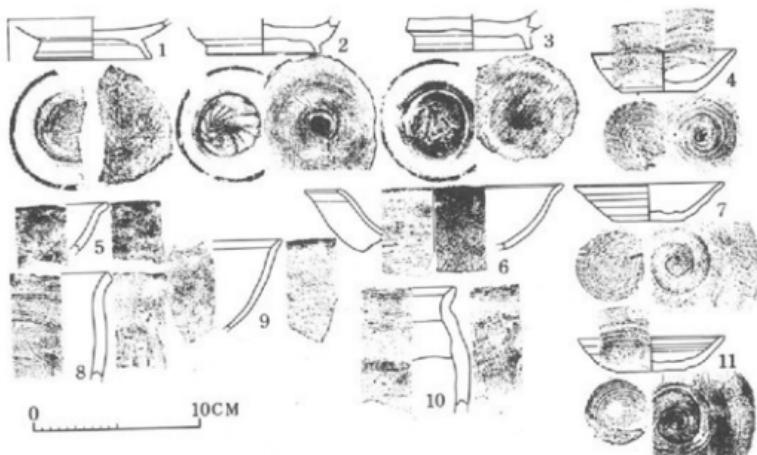


Fig. 36 第8号住居跡土器実測図

8号住居跡出土上器一覧

器形 別名	種類	地質	出土場所	色調		胎土	集成	手法上の特色	備考
				内側	外側				
杯 H 1	II	56-1	堆	黒	褐	雲母石英混	火	底部余切り、付高台。	
杯 H 2	H	56-2	*	*	青緑	雲母混	火	付高台、再整形。	
杯 H 3	H	56-3	*	褐	褐	雲母石英混	火	付高台、再整形。	
杯 X 4	X	56-6	*	*	火	火	火	口辺、体部ロクロ、底部余切り。	
杯 H 5	H		*	黄褐色	黄褐色	粗砂粒混	火	口辺、体部ロクロ。他欠。	
杯 H 6	H	56-3	*	黒	火	火	火	口辺、体部ロクロ。他欠。	
杯 X 7	X	56-7	*	淡褐	淡褐	石英混	火	口辺、体部ロクロ。底部余切り。	
甕 H 8	H	56-5	力	褐	褐	粗砂粒混	火	体部ヘラ整形。匂欠。巻き上げ。	
杯 H 9	H		堆	黒	茶褐	石英混	火	口辺、体部ロクロ。他欠。	
甕 H 10	H	56-4	*	赤褐	火	火	火	口辺、体部ヘラ整形。巻き上げ。	
杯 X 11	X	56-8	*	赤褐	赤褐	火	火	口辺、体部ロクロ、底部余切り。	直径約 8.9cm

紙引 (Fig. 35-1・2 第56図版 9・10)

1・2件に埋積土中出土。それぞれの現存長は1が 5.3cm, 2が 6.0cmで、いずれも両面および両側面が磨り減っている。また両者の片面には刃を底いだと思われる痕跡がみられる。

9号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
掘立式建物跡 T-I, Nが 北。東、西壁 を壊している。 一辺 3.2mの 方形平面の堅 穴式住居跡で ある。	ローム層上面まで 除土したが、地表 面までかなりの堆 積があつた。壁の 遺存状態は良好で、 北壁約60cm、南壁 約30cm、東壁約30 cm、西壁約42cmで 直立せず外傾している。	床はローム層で 堅く、ほぼ平ら であるが、カマ ドに向って傾斜 している。	周溝は全く認め められなかつた。 住居跡外のP 1についてもその 性格を明らかにす ることができなかつた。	柱穴は全く認め られなかつた。	北壁中央にあり T-Iにその大部 分を壊されてい るが、ローム壁 より黄白色砂質 粘土で兩袖を構築して いた。火床はほぼ方形で、余り良く焼けて いない。煙道は確認できなかつた。	南東隅は調 査区外にな るため完掘 できなかつた。

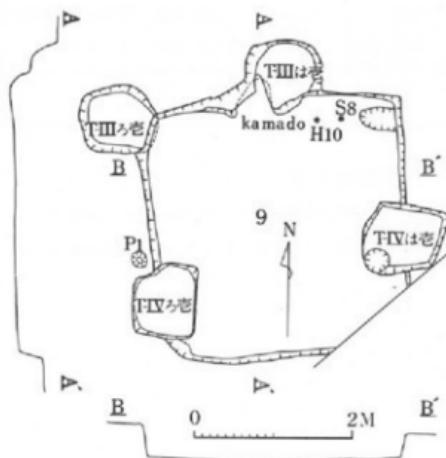


Fig. 37 第9号住居跡実測図

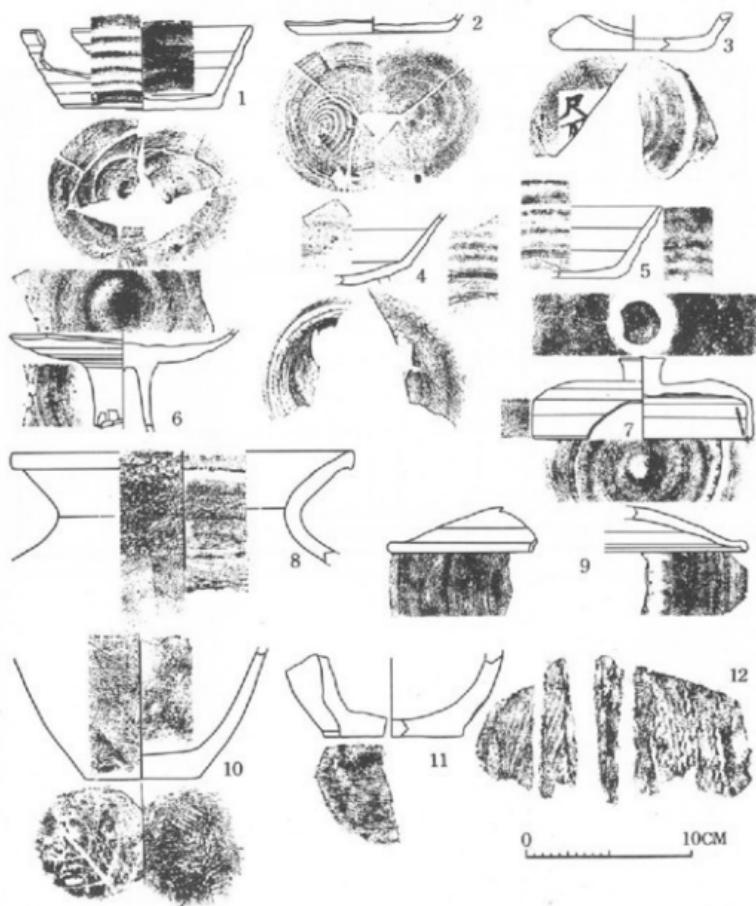


Fig. 38 第9号住居跡土器実測図

9号住居跡出土土器一覧表

器形 形別	量 数	新國 年	國版 年	出土 場所	色調		胎土	施成	手法上の特徴	備考
					内側	外側				
环	S	1	57-2	埋	灰	灰	石英混	良	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。	
环	S	2	57-4	タ	白褐	黑灰	タ	タ	底溝糸切り。再整形。	
环	S	3	57-3	タ	淡灰	淡灰	粗砂粒混	タ	底部へラ起し。	真環「尺口」
环	H	4	58-3	タ	黑	茶褐	タ	タ	体部ロクロ、底部へラ起し。付高台。	再使
环	S	5	57-5	タ	灰褐	灰褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。	
高环	S	6	58-1	タ	タ	黑褐	墨母石英混	タ	环、体部ロクロ。他欠。	
瓶	S	7	57-1	タ	淡灰	淡黄	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。上部宝珠つまみ。	自然粘附着
甕	S	8	58-4	灰	黄褐	黄褐	霞母石英混	タ	口辺ロクロ、他欠。	
盆	S	9		埋	灰	黑褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。上部欠。	
要	H	10	58-2	床	黑褐	タ	タ	タ		底木葉痕
甕	H	11		埋	黑	茶褐	タ	タ		
瓦	女	12	58-5	タ	陶目	平行沈線あり。布の合せ目あり。				

10号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
3.8×4.1m の長方形平面 で、カマドを 北壁に設けた 竪穴式住居跡 である。	地表面よりローム 層上面までわずか く、ほぼ平らで の堆積であるため ローム層上面まで の隙土できわめて 低い。北壁約20cm、南壁約8cm、 西壁約16cmで、立ちあがりは直立 せず、外傾している。	床はローム層堅 く、ほぼ平らで ある。	東壁にのみ認 められ幅約4 cm、深さ約5 cmである。	柱穴らしき穴は 計20個認められ たが、いかなる 柱の配置を考え るべきか判断しがたい。あえて言うならばP 1と P 2を主柱としP 3とP 4を補助的な柱とするこ とができるよう。なおP 5～P 10までは本跡に確実 にともなうもので、P 11～P 15とP 18は後に掘ら れたものであり、P 16・P 17・P 19・P 20は明ら かでない。	北壁中央より東 寄りにあり、石 英質の土を多く 含んだ黄色粘土 でローム壁より 両袖を構築して いる。火床は方 形でくぼんでい てよく焼けてお り赤色を呈す。	経道は確認できなかった。

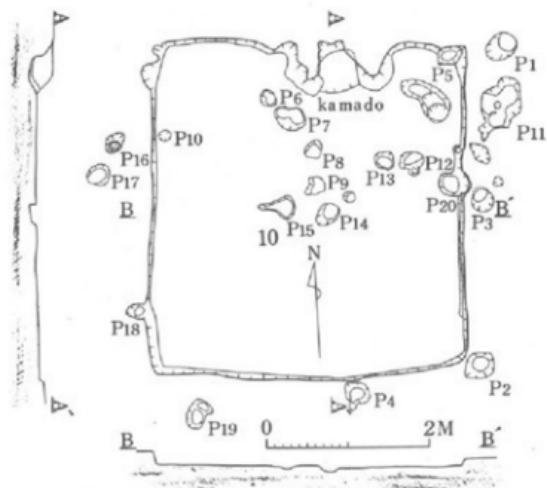


Fig.39 第10号住居跡実測図

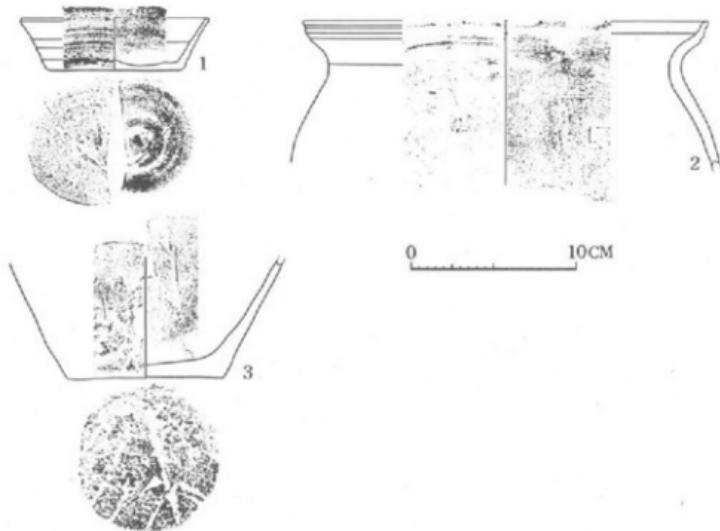


Fig. 40 第10号住居跡土器実測図

10号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	圓 盤 形 式	出土 場所	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
坏 甕	S	1	59-1	埋	灰	灰	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。 外自然粘附着
甕	H	2	59-3	夕	黄褐	黑色	云母石英混	夕	口辺ロクロ。体茎ヘラ整形
甕	H	3	59-2	夕	茶褐	黑褐	夕	夕	体部ヘラ整形。底部本茎底。

11号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は12号住居跡の南東壁を壊して構築したものである。立式建物跡T-Vが北壁を構成している。	地表面より非常に浅いことと、ローム層上面まで除土である。	床はローム層で堅く、ほぼ平らである。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴は全く認められなかつた。	北壁中央よりやや西寄りにローム層を外側に半円状に掘り込み、白色砂質粘土で構築していた。火床は半円形でよく焼けおり赤色を呈していた。	東壁中央にローム層を外側に半円形に掘り込み一面焼け赤色を呈した部分があり、この中から土脛支撑が立ったままの状態で出土したが、これにはカマドのような袖は通せぬ。カマドと認めがたい点もあるが、本跡の最初のカマドをここに設けて、後に北壁に新設したのではないか。
					円状に掘り込み、白色砂質粘土で構築していた。火床は半円形でよく焼けおり赤色を呈していた。	

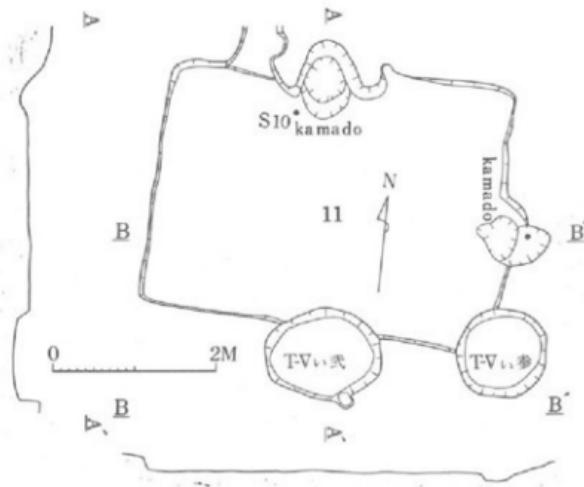


Fig. 41 第11号住居跡実測図

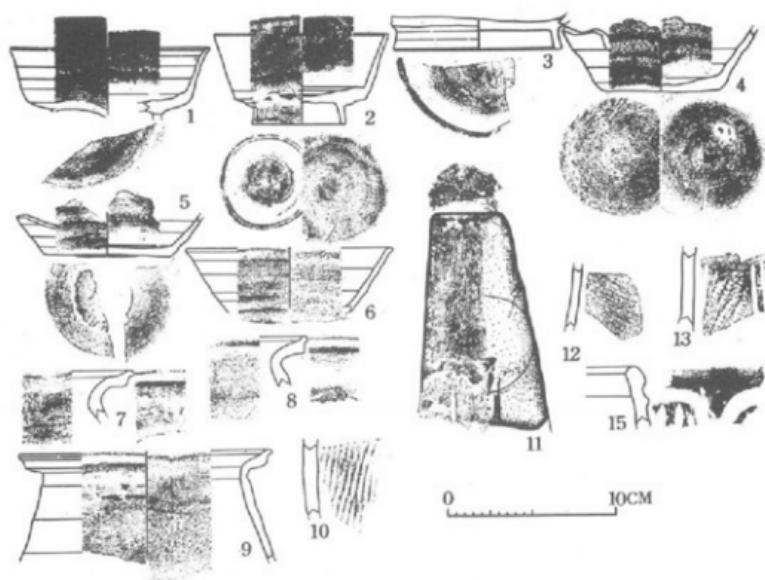


Fig. 42 第11号住居跡遺物実測図

11号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	地盤	出土 場所	色 調		整 土	製 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
环	S	1	59—6	力	褐灰	灰褐	粗砂粒混	良	口沿、体部ロクロ。付高台。
环	S	2	59—4	タ	シ	灰	石英混	タ	口沿、体部ロクロ。近部ヘリ起し。付高台。
环	S	3	60—1	埋	青灰	青灰	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。
环	S	4	59—5	タ	W.R.色	灰灰	石英混	タ	体部ロクロ、底部ヘリ起し。
环	S	5		タ	灰	暗灰	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。
环	S	6		タ	淡灰	淡灰	石英混	タ	口辺ロクロ、他欠。
甌	H	7		力	赤褐	黄褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ、他欠。
钵	J	8		タ	黄褐	タ	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ、他欠。
甌	H	9	60—2	タ	褐	褐	云母混	タ	口辺ロクロ、他欠。
甌	S	10		埋	青灰	青灰	雲母石英混	タ	体部のみ、平行沈線。
甌	S	12		力	绿灰	黄灰	粗砂粒混	タ	
钵	J	13		埋	暗褐	タ	雲母石英混	タ	
环	S	14		埋	深褐	灰	石英混	タ	体部ロクロ、底部ヘリ起し。
钵	J	15		タ	茶褐	茶褐	粗砂粒混	タ	
支		11		力	黄褐		砂岩を切り取り、円形の柱状に作り粘土を上塗りしたものである。		

12号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は13号住居跡の北壁を壊し、さらに11号住居跡が北東壁に構築されている。	ローム層上面より地表面までわずかであり、ローム層上面まで除土したため壁の立ちあがりがきわめて低く	床はローム層で地表面に近いせいか堅くしまつた。	西壁の一部と東壁に認められ、西壁は幅15cm、東壁は約90cmで深さは約10cmである。	柱穴らしき穴は3個認められたが、いかなる柱の配置を考えるべきか判断しがたい。	北壁中央にあり壁と直交するのかマドは少しうに曲っている。	北西隅が調査区外のため発掘できなかつた。
一辺5.8mの台形平面で北壁中央にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	北壁約8cm、南壁11cm、東壁約5cm西壁約15cmで、直立せず外傾している。				黄白色砂質粘土で構築されていた。火床は方形であまりよく焼けていない。	



Fig. 43 第12号住居跡実測図

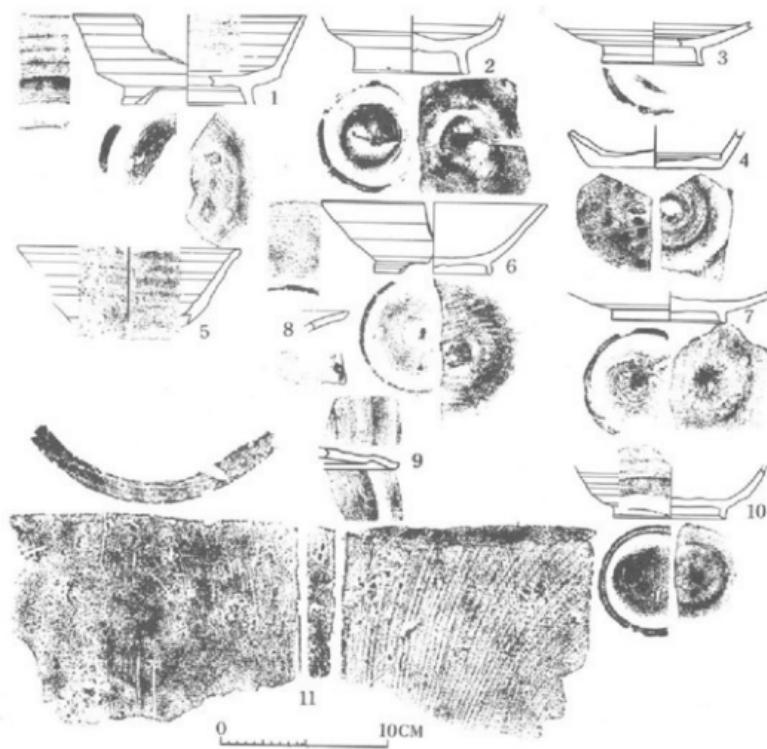


Fig. 44 第12号住居跡土器実測図

12号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	攝 図	図版	出土 場所	色 調		胎 土	焼 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
环	S 1	60—6	埋	灰褐	灰褐	石英混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し、付高台。		
环	S 2	60—5	タ	灰白	灰白	雲母混	タ	体部ロクロ、付高台。他欠。		
环	S 3		タ	赤褐	赤褐	タ	タ	体部ロクロ、他欠。		
环	S 4	60—4	タ	淡灰	淡灰	タ	タ	底部ヘラ起し、他欠。		底ヘラ
环	S 5		タ	暗灰	暗灰	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。他欠。		
环	H 6	60—7	タ	黑	暗褐	雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し、付高台。		
环	H 7		タ	褐	雲母	石英混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し、付高台。		
环	H 8	60—9	タ	黄褐	黄褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ、他欠。		口墨「中」?
蓋	H 9		タ	タ	タ	タ	タ			
环	H 10	60—8	タ	黑	赤褐	雲母混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。		
瓦	男 11	61—1	タ	表面はヘラによつて文様を消され、裏面には布目の下に平行沈線文がある。						

釘 (Fig. 45)

埋積工事中出土。現存長 5.5cm, 断面は方形 (0.4×0.5cm) である。頭部と先端は欠失。

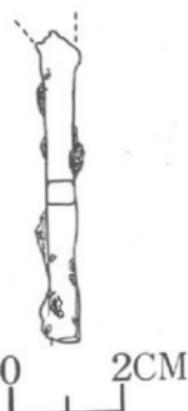


Fig. 45 第12号住居跡鉄製品実測図

13号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は北壁を 12号住居跡、 さらに南壁を 14号住居跡に よって狭され ている。一辺	ローム層上面まで 除土したため壁の 立ちあがりはきわ めて低く、北壁約 20cm、南壁約8cm、東壁約5cm、西壁約20cmで、直立せず外傾してい る。	床はローム層で 堅く、ほぼ平ら である。	周溝は全く認め られなかつた。	柱穴は全く認め られなかつた。	カマドが構築さ れたと思われる 北壁の大部分が 焼されているた め確認できなか つた。	
		が 3.6×2.7m の長方形平面の竪穴式住居跡である。				



Fig. 46 第13号住居跡実測図

14号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は15号住居跡に北西隅を壊されていて、一辺が約4.7×4.5mのほぼ方形平面で、北壁にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	ローム層上面まで 除土したため、壁の立ちあがりがきわめて低く、北壁約10cm、南壁約16cm、東壁約10cm、西壁約25cmで、直立せずやや外傾している。	貼床で堅く、平らであった。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴は全く認められなかつた。	15号住居跡によりその大部分を壊され、わずかに右半分が遺存するのみである。ローム層を外に半円形に掘り込み白色砂質粘土で構築していた。火床は半円形をなすものと考えられ、一面よく焼けており赤色を呈していた。椎道は確認できなかつた。	「中火殿」の墨書き器が南西隅附近より出土した。

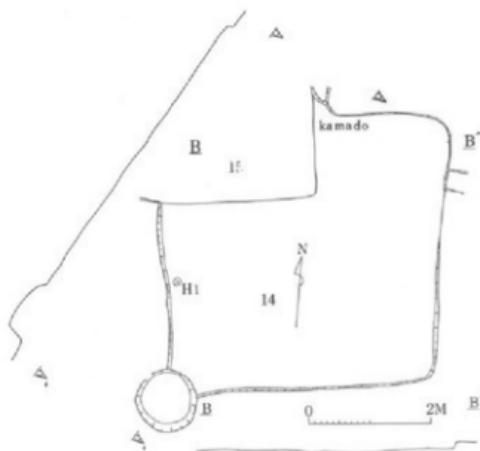


Fig. 47 第14号住居跡実測図

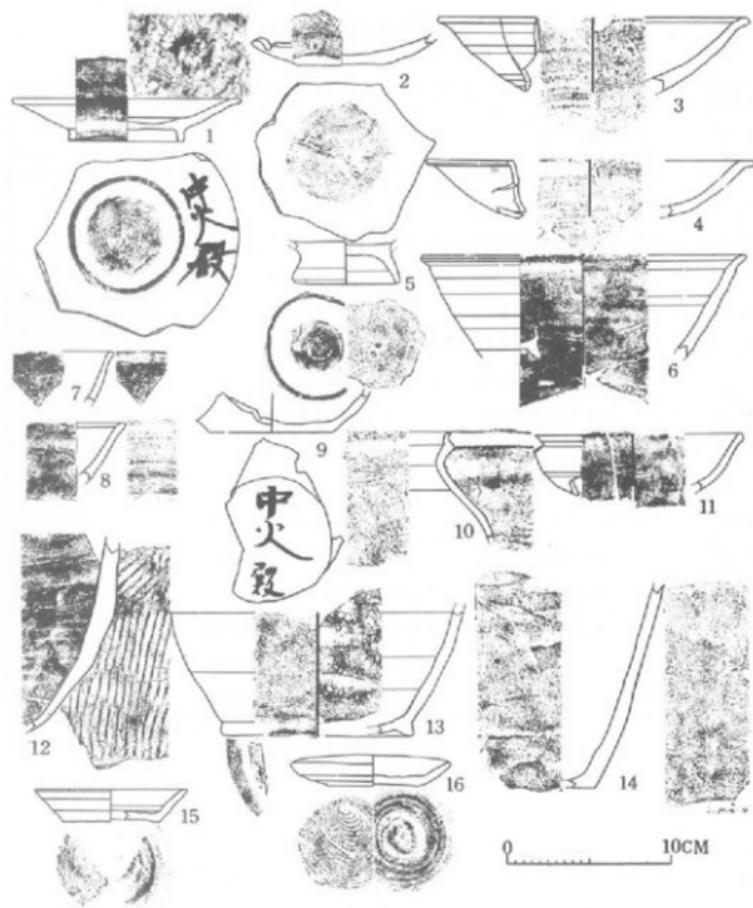


Fig. 48 第14号住居跡土器実測図

14号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	捕 获 年	回 数	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
坏	H	1	61-3	床	黑	黄褐	粗砂粒混	良	口辺。体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	体墨「中火照」
坏	H	2	61-4	埋	タ	褐	青母混	タ	体部ヘラ整形。底部ヘラ起し。	体墨試不明
坏	H	3	62-1	*	黄褐	黄褐	青母砂混	タ	口辺。体部ロクロ。他欠。	
坏	H	4	*	淡褐	淡褐	粗砂粒混	タ	口辺。体部ロクロ。他欠。		
坏	H	5	*	茶褐	茶褐	タ	タ	付高台。他欠。		
陶	H	6	*	黑	褐	青母混	タ	口辺。体部ロクロ。他欠。		
坏	X	7	*	黄褐	黄褐	粗砂粒混	タ	口辺。体部ロクロ。底部糸切り。		
坏	H	8	*	褐	赤褐	青母混	タ	口辺。体部ロクロ。他欠。		
坏	H	9	61-5	*	黑	タ	粗砂粒混	タ	体部ロクロ。底部ヘラ起し。	底墨「中火照」
陶	H	10	62-2	*	褐	褐	青母石英混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形。	
坏	H	11	*	タ	タ	タ	粗砂粒混	タ	口辺。体部ロクロ。他欠。	
陶	S	12	*	暗灰	暗灰	タ	タ	巻き上げ手法。平行沈線タタキ。		
陶	S	13	*	灰褐	灰褐	タ	タ	体部ヘラ整形。付高台。		
陶	H	14	*	黄褐	黄褐	タ	タ	体部ヘラ整形。底部欠。巻き上げ。		
坏	X	15	*	タ	タ	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底部糸切り。		
坏	X	16	62-4	タ	タ	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底部糸切り。		

15号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は14号住居跡の上に構築され、一辺が3.5×2.9mの台形状平	ローム層上面まで除土したため、壁の立ちあがりがき	貼床で堅く、西壁に向って傾斜している。	周溝は全く認められなかつたが、西壁にそれらしきものがあったが明らかでない。	柱穴は全く認め得なかった。	北壁中央より東寄りに、やや西向きに白色砂質粘土で構築して	
mの台形状平面をなし、北壁中央にカマドを設けた堅穴式住居跡である。	わめて低く、北壁約22cm、東壁約20cm、西壁約34cmで直立せず外傾している。				いた。火床は方形でよく焼け、赤色を呈し中央にくぼみがある。	
					煙道は確認できなかった。	

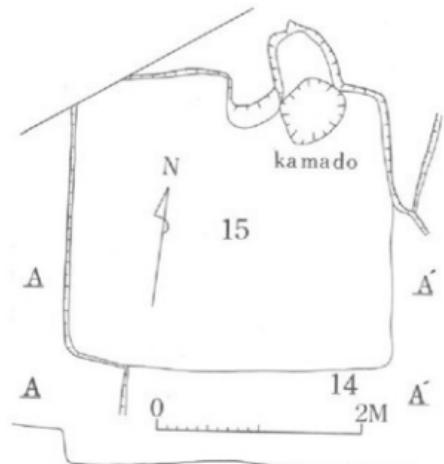


Fig. 49 第15号住居跡実測図

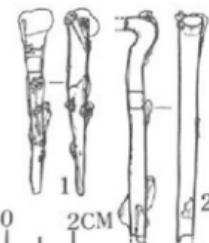


Fig. 50
第15号住居跡鉄製品実測図

釘 (Fig. 50-1・2)

いざれも住居跡内埋積土中より出土したものである。

1は現存長5.6cm、方形の断面で先端は尖っている。頭部は折り曲げられている。

2は現存長7cm、方形の断面で1と同様頭部は折り曲げられている。

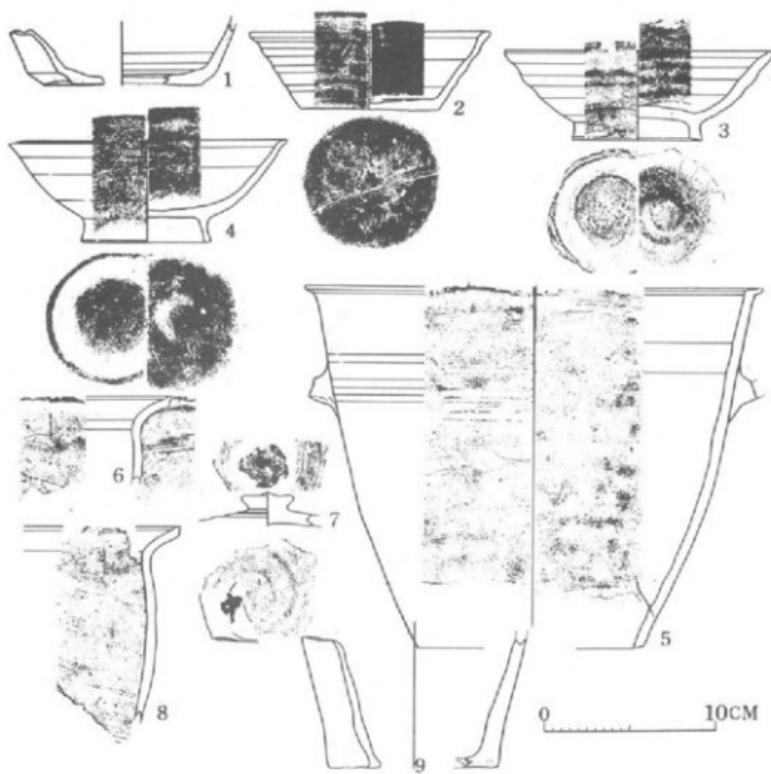


Fig. 51 第15号住居跡土器実測図

15号住居跡出土土器一覧表

器 種 別 名	鉢 名	圓 盤 名	出上 位置	色 調		治 土	焼 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
环	S 1	62-7	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒混	良	体部ロクロ。眞部へラ起し。他欠。	
环	H 2	63-1	夕	黑	褐	雲母石英混	夕	口辺。体部ロクロ。底部へラ起し。	
环	H 3		夕	夕	黄褐	粗砂粒混	夕	口辺。体部ロクロ。付高台。	
环	H 4	63-2	夕	夕	褐色	雲母石英混	夕	口辺。体部ロクロ。底部へラ起し。付高台。	
瓶	H 5	62-6	夕	黄褐	黄褐	粗砂粒混	夕	口辺ロクロ。体部へラ整形。	把手付
甕	H 6	62-9	夕	赤褐	赤褐	雲母混	夕	口辺ロクロ。他欠。	
蓋	S 7	62-5	夕	黄褐	黄褐	夕	夕	上部へラ起し。宝珠つまみ。	内墨「中」
甕	H 8	62-8	夕	褐	褐	雲母混	夕	口辺ロクロ。他欠。	
甕	H 9		夕	灰褐	灰褐	雲母混	夕	体部へラ整形。他欠。	

16号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は掘立式 建物跡T一基 の上に構築され、平面形は 不正長方形であるが、北壁 が外側に張る。	ローム層上面まで 盛土したため壁の 立ちあがりはきわ めて低く、北壁約 3.7mの北壁 東壁約36cm、西壁 が外側に張る あるが、北壁 傾している。	貼床で堅くしま り、ほぼ平らで ある。床面中央 西壁寄りに直径 8cmである。	南壁にのみ認 められ、幅約 20cm、深さ約 60cmの円形の掘り込みがあり、 一面焼け赤色を呈し、中からカ ラッケが出土した。	本跡の内外に計 8個の穴が認め られたが、住居 内P1、P2は主柱と考えられ P3、P5については明らかにし がたい。また住居外のP4、P6 ～P8も同様である。	カマドについて は後に述べることにする。 内P1、P2は主柱と考 えられ、P3、P5につ いては明らかにし がたい。また住居外 のP4、P6～P8も同 様である。	北東隅にあ る直径90cm の穴は中に 粘土が入っ ていること から貯蔵穴 と考えられ るが、詳しいことは後で述べることにしたい。

に径 1.4m の半円形状の一面焼け
た掘り込み遺構をもつ。

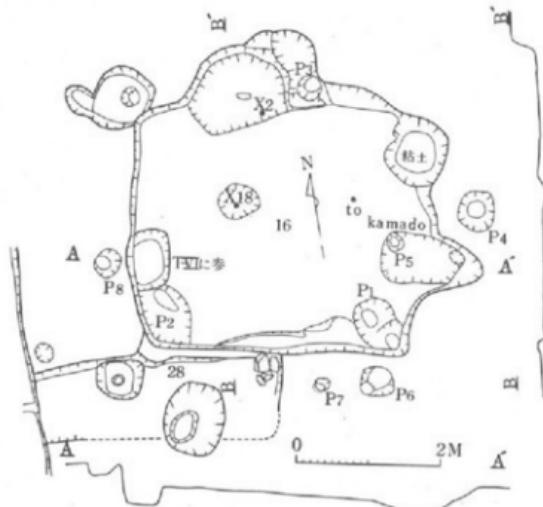


Fig. 52 第16号住居跡実測図



Fig.53 第16号住居跡土器実測図

16号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	鉢 類	底 盤	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手法上 の 特 色	
					内側	外側				
环	S	1	63-4	埋	灰褐	灰褐	石英混入	良	体部ロクロ、底部へラ起し。	
环	X	2	64-1	床	黄褐	黄褐	粗砂粒混	石英混	口辺、体部ロクロ、底部へリ起し、付高台。	
环	H	3	63-5	埋	褐	褐	石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部へラ起し、付高台。	
环	H	4		床	黄褐	黄褐	雲母石英混	々	体部ロクロ、底部へラ起し、付高台。	北側特殊遺構出土
环	X	5		埋	々	々	石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	直径約 8.9cm
蓋	S	6	63-3	々	黑灰	黑灰	々	々	口辺、体部ロクロ、上部へラ起し。	宝珠つきみ
环	X	7		淡黄	淡黄	雲母石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。		
环	X	8		床	黄褐	黄褐	石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	北側特殊遺構出土
环	X	9		埋	条褐	条褐	粗砂粒混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	
环	X	10	64-4	々	黄褐	茶褐	雲母石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	
环	H	11		々	黑	黄褐	粗砂粒混	々	付高台、他欠。	底墨説不
环	X	12		々	黑褐	黄褐	雲母混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	
环	X	13		々	茶褐	々	雲母石英混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	
环	X	14		々	々	々	々	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	
环	X	15	64-2	々	黄褐	黄褐	々	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	直径約 9.3cm
环	H	16		略褐	薄黑	々	々	々	付高台。	
环	X	17		床	黄褐	黄褐	々	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	北側特殊遺構出土
环	X	18	64-3	々	褐	茶褐	粗砂粒混	々	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	直径約 8.9cm
环	H	19		埋	黑	茶褐	石英混	々	付高台、他欠。	底墨説不
环	H	20		々	々	黑褐	雲母石英混	々	口辺、体部ロクロ、他欠。	

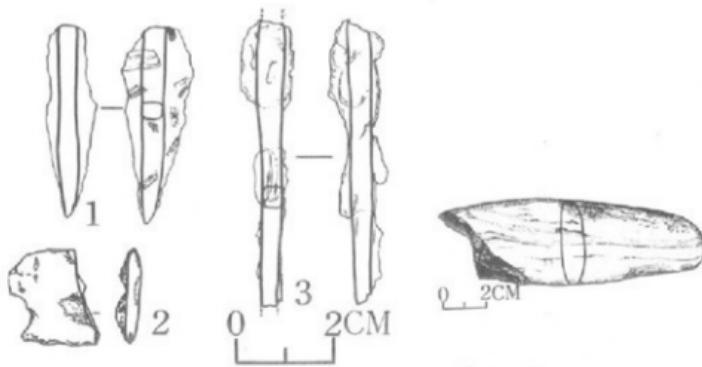


Fig. 54 第16号住居跡鉄製品実測図

Fig. 55
第16号住居跡砥石実測図

釘 (Fig. 54-1)

カマド中出土。現存長 4.5cm。断面方形 (0.5×0.4 cm) の釘で頭部に木質が銷着し、全体に錆が顯著に付着している。

刀子 (Fig. 54-2)

埋積土中出土。幅 2, 厚さ 0.4, 現存長 1.7cm の刀子片である。

釘

埋積土中出土。釘片であるが、現存長 6.3cm で断面は方形 (0.5×0.7 cm) である。頭部と先端の一部は欠失している。

砥石 (Fig. 55)

東壁中央より約 1m 内側の床上出土。片平な泥板岩の両面に研磨の跡が顯著であった。おそらく砥石のような用途をもつものであろう。

17号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡の床面に 掘立式建物跡 T-VI, 17の 柱穴が後に構 築されている。 また18号住居 跡を壊して構築している。18号住居跡である。	ローム層上面まで 除去したため壁 立ちあがりはきわ めて低く、北壁約50cm、南壁約22cm 東壁約20cm、西壁約32cmで直立せず やや外傾している。	貼床で堅いが床 面はテコボコで 立ちあがりはきわ めて低く、北壁約50cm、南壁約22cm 東壁約20cm、西壁約32cmで直立せず やや外傾している。	東壁と北壁の一 部を除いて 間溝が認めら れたが、その性 格を明らかにし 最も顯著で幅 約20cm、深さ 約10cmである	柱穴はP 1とP 2の2個認めら れたが、その性 格を明らかにし 最も顯著で幅 約20cm、深さ 約10cmである	北壁中央に黄褐 色砂質粘土で構 築されていた。 火床は長方形で よく焼けて赤色 を呈していた。また灰が広範囲に 認められたがカマド付近から多量 のカワラケの出土があり、あるいはこのカマドで 焼いたのではないかと考えている。粘土中より砂岩質製の支脚が出土した。	

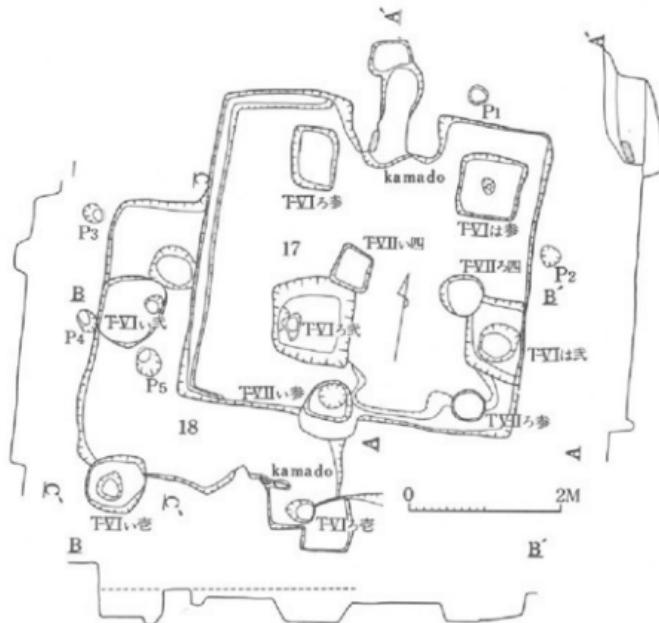


Fig. 56 第17、18号住居跡実測図

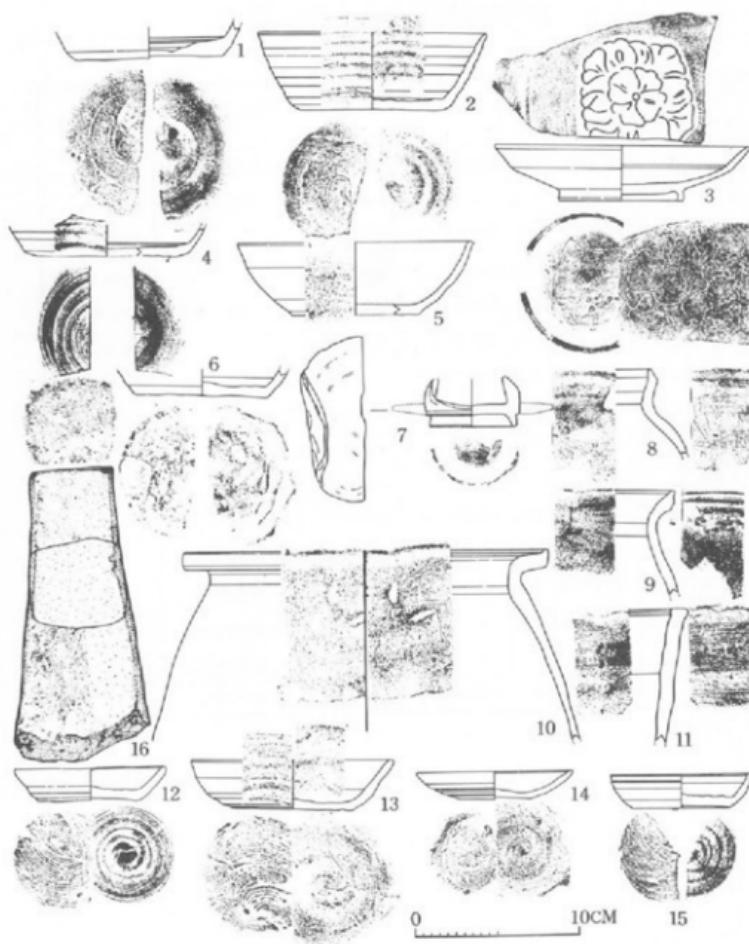


Fig. 57 第17号住居跡土器実測図

17号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	年 代	出 土 場 所	色調		治 上	混 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
杯	S	1	65-1	堺	灰	灰	粗砂粒混	良	体部ロクロ。底部ヘラ起し。
杯	S	2	64-5	タ	灰褐	灰褐	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。底ヘラ
盤	K	3	65-3	タ	黄灰	白灰	粘土繊密	タ	陰刻花文。
杯	S	4	65-2	タ	灰褐	灰褐	粗砂粒混	タ	底部ヘラ起し。他欠。
杯	H	5		タ	赤褐	雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	タケ、耳皿などと出土した。
杯	H	6		タ	黄褐	黄褐	雲母石英混	タ	体部ヘラ整形。
碗	H	7	65-5	タ	黑	淡褐	雲母混	タ	
甕	H	8	65-7	タ	黄褐	黄褐	雲母混	タ	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。
甕	H	9	65-6	タ	赤褐	赤褐	石英混	タ	口辺ロクロ、他欠。
甕	H	10	65-4	タ	タ	タ	雲母混	タ	口辺ロクロ、輪梳み。
瓶	S	11	65-8	タ	灰	暗灰色	石英混	タ	赤褐ロクロ 他欠。
杯	X	12	65-10	タ	褐	褐	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。
杯	X	13	66-1	タ	赤褐	赤褐	金雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。
杯	X	14	66-2	タ	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。
杯	X	15		タ	タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。 直径約12.4cm
支		16	65-9	力	黄赤褐	砂岩を細長い粒状に切り取り、上面に粘土附着。			

18号住居跡 (Fig. 56)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡はその大部分を17号住居跡に切られさらに掘立式建物T一間により壁を壊されている。平面形は一边3.8mの方形で北壁にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	ローム層上面まで除土したため、壁の立ちあがりはきわめて低い。遺存部より四壁の高さを割ると、北壁約30cm、南壁約22cm、東壁約22cm、西壁約35cm、で直立せず外傾している。	床はローム層で堅く平らである。	周溝は全く認められなかつた。	本跡に伴なうと思われる柱穴はP1~P3の3個認めえたが、どのよう性格の柱か明らかでない。	南壁中央より東寄りに焼石が2個と粘土が壁に沿って認められたので、石を芯とした粘土製のカマドであった	

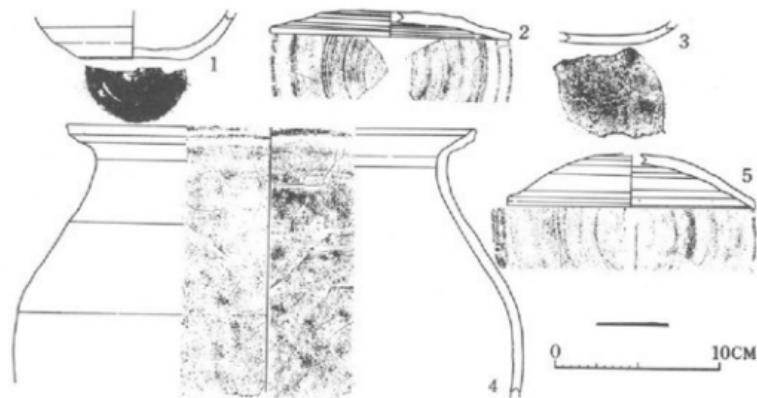


Fig. 58 第18号住居跡土器実測図

18号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	持 國 系	国 版 系	出土 場所	色 調		燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側			
环	H	1	66-9	埋	黑	淡黄	雲母混	良 口辺、体部ロクロ。他欠。	
环	S	2	66-3	夕	灰褐	灰褐	粗砂混	夕 底部ヘラ起し、再整形。	底ヘラ
环	H	3	66-4	夕	黑	黄褐	雲母混	夕 体部ロクロ。底部ヘラ起し。	体墨説不明
环	S	4	66-5	夕	茶褐	灰	粗砂粒混	不 口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し、付高台	
环	H	5	66-8	夕	黑	淡黄	夕 良	底部ヘラ起し。	底墨説不明
环	X	6	66-7	夕	黄褐	黄褐	石英混	夕 口辺、体部ロクロ。底部外切り。	直径約 9.2cm
甕	S	7	66-6	夕	灰褐	灰褐	粗砂粒混	夕 体部ロクロ。他欠。	

19号住居跡

平面形	側壁	床	周講	柱穴	カマド	備考
本跡は西壁の一部を21号住居跡に切られている。一辺4.4mの方形平面で北壁にカマドを設けた堅穴式住居跡である。	ローム上面まで残るため、壁の立ちあがりがきわめて低く、北壁約30cm、南壁約18cm、東壁約34cm、西壁約20cmで、直立せず外傾している。	貼床であり、堅くほぼ平らである。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴は計5個認められたが、これらがどんな柱の配置をとるか即断しがたい。	北壁中央に黄白色砂質粘土で構築していた。火床は方形でよく焼け、赤色を呈していた。左袖寄りに円形のくぼみが認められた。煙道は確認できなかった。	

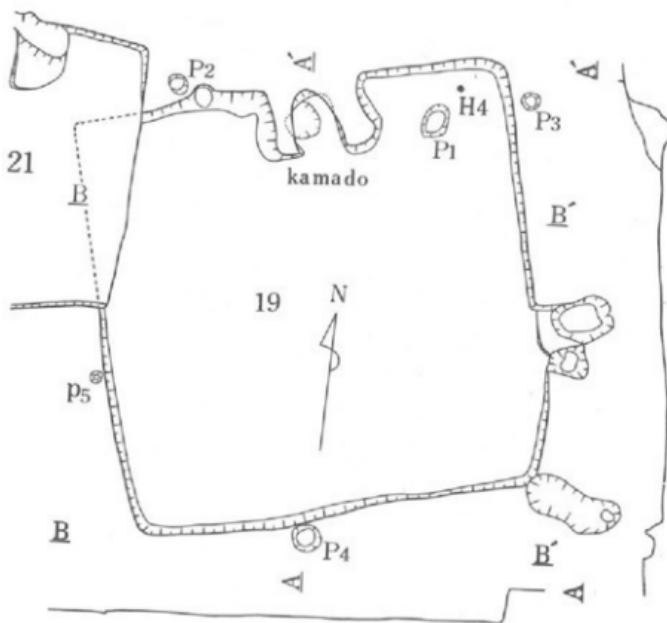


Fig.59 第19号住居跡実測図

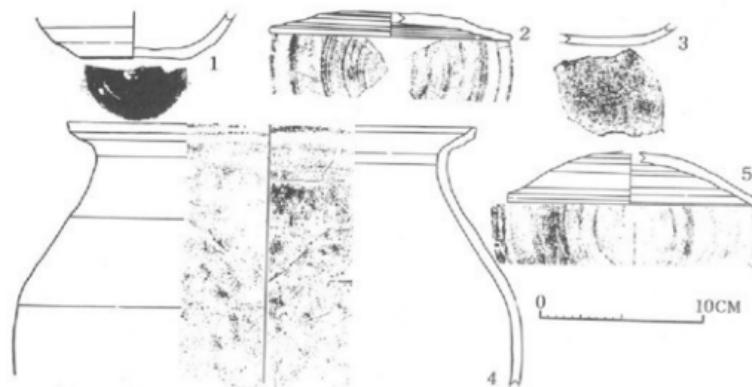


Fig. 60 第19号住居跡土器実測図

19号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	鉢 蓋	圓盤 板	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
环	H	1	67-4	埋	褐	暗褐	實印石英混	良	体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
蓋	S	2	67-1	*	灰	灰	雲母混	良	口辺、体部ロクロ。上部ヘラ起し。	つまみ欠。
环	H	3		*	褐	暗褐	雲母石英混	*	底部ヘラ整形。	
蓋	H	4	67-2	床	淡褐	淡褐	*	*	輪積み。	
蓋	S	5	67-3	埋	灰	灰	雲母混	*	口辺、体部ロクロ。上部ヘラ起し。	つまみ欠。

20号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
一边が3.7×3.4mの不整長方形平面で北壁中央にカマドを設けた堅式住居跡である。	ローム層上面まで除土したため、壁の立ちあがりが低い。北壁約46cm、南壁約24cm、東壁約42cm、西壁約28cmで内窓気味に外傾している。	床はローム層で、堅く、平らである。	北壁のカマド付近を除いた全壁に巡り幅約15~20cm、深さ約5~7cmである。	柱穴らしき穴は柱外に2個認められたが、その性格は明らかにしがたい。	掘り方によってカマドの大部分を壊され、袖の部分がわずかに遺存するにすぎないが北壁中央に黄白色砂質粘土で構築していた。火床は方形でよく焼け赤色を呈し若干中央がくぼんでいた。煙道は確認できなかつた。	

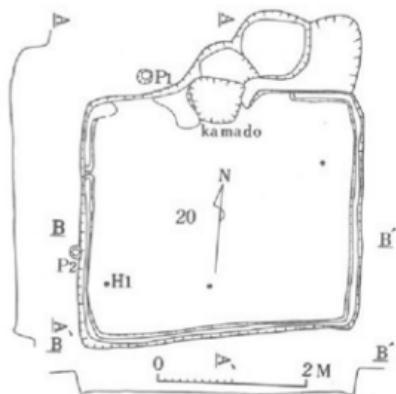


Fig. 61 第20号住居跡実測図

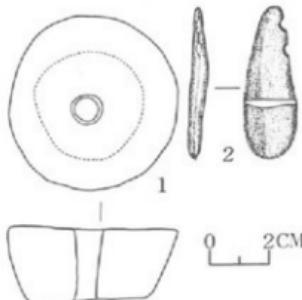


Fig. 62 第20号住居跡紡錘車及び石錘実測図

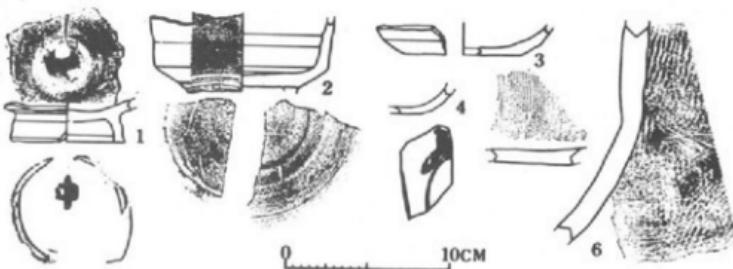


Fig. 63 第20号住居跡土器実測図

20号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	掲 番	固 版	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
坏	H	1	67-5	埋	黑	赤褐	雲母混	良	底部へラ起し、付高台。	底墨「中」
坏	S	2	67-7	タ	黄褐	灰褐	石英混	タ	体部ロタロ、底部へラ起し。付高台	
坏	H	3	67-4	タ	黑	黑褐	雲母混	タ	体部ロタロ、底部へラ起し。	
坏	H	4	67-6	タ	タ	黄褐	粗砂粒混	タ	底部へラ起し、他欠。	底墨「殿」
す		5	67-8	*					近世のものと思われる。	
要	S	6		*	灰	灰	粗砂粒混	タ	体部平行沈線文タタキ。	
鉗		68-1	*							
筋		67-9	*							

陶製纺錘車 (Fig. 62-1)

南壁中央付近の床上より出土。上面径 4.5cm, 下面径 4 ~ 4.2cm, 重さ90g, 厚さは中央部で 2.4cm の台形の断面である。中央の孔は径 0.8cm である。

石錘? (Fig. 62-2)

東壁付近の床面上より出土。これは泥板岩の自然石を利用したもので長さ22cm, 最大幅 0.6cm で、片面はいくぶんふくらみをもっている。上部の片側に巾 0.4cm 程の半円形状の切り込みが 2 カ所認められる。用途不詳のものである。

21号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は19号住居跡の西壁の一部を切って構築され、19号住居跡の床より低い。一辺が3.2×2.9mの長方形平面で北壁中央にカマドを設けた堅穴式住居跡である。	ローム層上面まで除土したため、壁の立ちあがりがきめめて低く、またローム層が傾斜しているための南壁はそれが顯著である。四壁はそれぞれ北壁約60cm、南壁約20cm、東壁約50cm、西壁約30cmで直立せずやや外傾傾斜である。	貼床で堅く、中央部が若干膨らみ気味である。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴と思われる穴は住居跡外にP11個が認められた。	kamado	北壁中央よりやや東寄りに黄白色砂質粘土で構築していた。火床は長方形でよく焼けて赤色を呈し、奥壁に向かって若干傾斜している。煙道は北西方向に曲がっている。なおカマドの前より土製支脚が出土した。

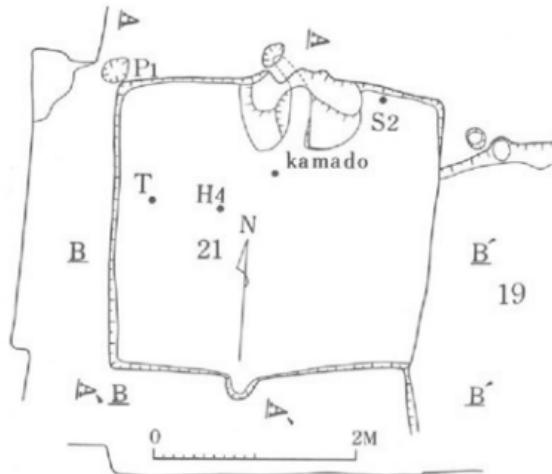


Fig. 64 第21号住居跡実測図

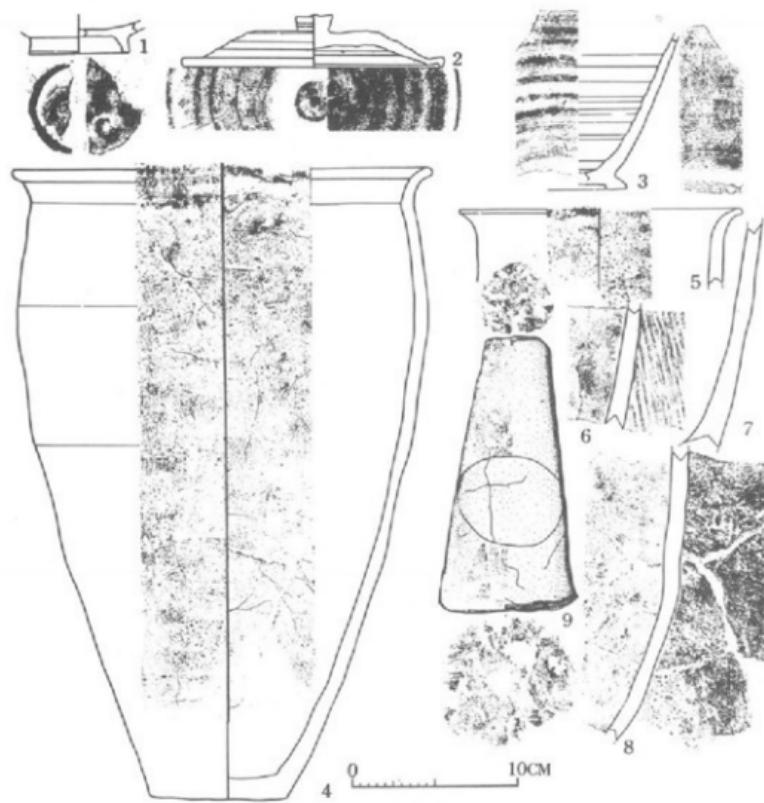
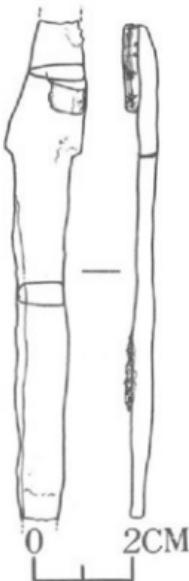


Fig. 65 第21号住居跡土器実測図

21号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	鉢 板	図版 No.	出土 場所	色 調		胎 土	焼 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
环	S	1	68-4	埋	灰	灰	粗砂粒混	良	底部のみ、他欠。付高台。	
蓋	S	2	68-2	床	黄褐	黄褐相	雲母石英混	々	口辺、体部ロクロ。上部ヘラ起し。	宝珠つまみ。
裏	S	3	68-3	埋	灰白	灰白	粗砂粒混	々	体部ロクロ、削り出し高台。	自然貼附着。
甕	H	4	0	々	淡褐	黄褐	雲母石英混	々	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。	
甕	H	5	68-9	々	黑褐	黑褐	々	不	口辺のみ、他欠。	
甕	S	6	68-6	々	灰	灰	粗砂粒混	良	体部平行沈線、タタキ。	
甕	H	7	68-8	々	茶褐	焦茶	石英混	不	体部巻き上げ。	
甕	H	8	68-5	々	々	暗褐	雲母石英混	良	体部巻き上げ。	
支		9	68-7	々	黄褐		々		粘土製。	



刀子 (Fig. 66)

西壁中央付近の床面直上より出土。現存長約10cmである。刃部と茎は間によつて区切られ茎が一段底くなつてゐる。

Fig. 66 第21号住居跡 鉄製品実測図

22号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は南壁を 23号住居跡に 北壁を掘立式 建物跡T-17 道によつて接 されている。 一辺 2.8×2 .1mの長方形をなすものと考えられ北壁中央にカマ ドを設けた堅穴式住居跡である。	ローム層上面まで 除去したため壁の 立ちあがりは低い。 壁はそれぞれ北約40cm、南約40cm、 東約34cm、西約40cmで西壁は直立し ているが、他は若干外傾している。	床はローム層で 堅く、平らである。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴らしき穴は 全く認めることが できなかつた。	北壁中央にロー ム層を外に振り 込み、小石混り	
			の黄色砂質粘土で構成している。火床は方形で中央にくぼみ、一面よく焼けて赤色を呈していた。 壁道は天井部がよく残っていた。			

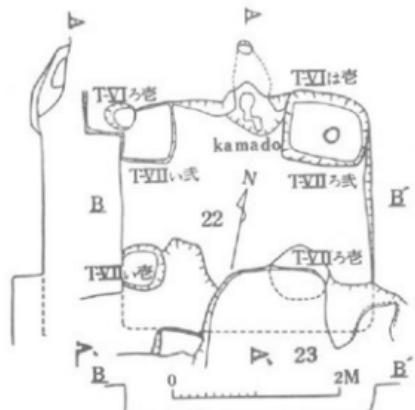


Fig. 67 第22号住居跡実測図

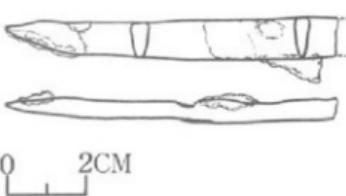


Fig. 68
第22号住居跡鉄製品実測図

刀子 (Fig. 68)

東壁床面上出土。現存長 8.1cm, 刃部と茎の一部が現存する。刃部側の間によつて刀身と茎がさかいされている。刃部の長さ 6.5cm, 厚さ 0.3 cm である。

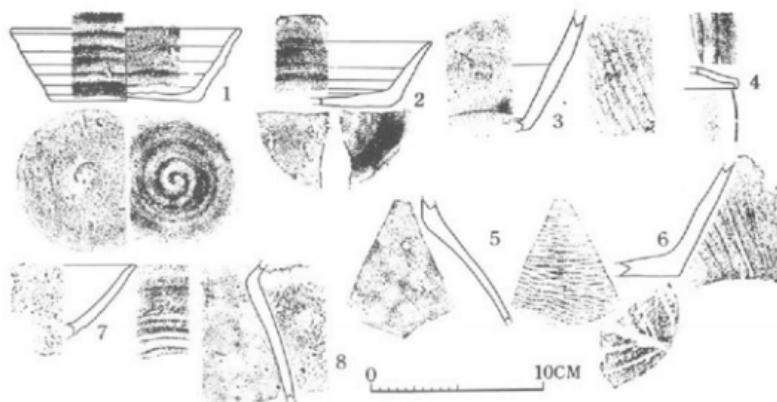


Fig. 69 第22号住居跡土器実測図

22号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	部 位	國 版	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
坏	S	1	69-1	埋	灰	灰	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
坏	S	2		ク	タ	シ	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
甕	H	3		ク	茶褐	黑褐	雲母石英混	タ		
盖	S	4		ク	灰	淡黄	石英混	タ	口辺ロクロ、他欠。	
甕	S	5	69-3	ク	暗灰	粗砂粒混	タ	平行タタキ。		
甕	H	6	69-2	ク	褐	黑褐	雲母石英混	タ	体部ヘラ削。	底木葉痕
坏	H	7		シ	黑褐	褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。他欠。	
甕	S	8	69-4	タ	灰白	黄白	石英混	タ	体部自然釉附着。	

23号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は24号住居跡の上に構築され、24号よりも床面は上にある。また掘立式建物	ローム層上面まで 除土したため壁の立ちあがりが低く 北壁約54cm、東壁約30cm、西壁約24 cmで直立している。	24号住居跡の重複部分のみ貼床 ではローム層であった。床面は堅くほぼ平らであった。	周溝は全く認められなかつた。	柱穴と思われる穴は全く認められなかつた。	北壁中央にローム壁より黄白色 砂質粘土で両袖を構築している。 火床は不整形で平らであり余りよく焼けていない。 煙道は確認できなかつた。	北東壁寄りに刀子と鉄製ノミが出

跡T一直が後に振り込まれている。一边が3.6 × 3.5 m のほぼ台形状の平面をなすものと考えられ、北壁中央にカマドを設けた堅穴式住居跡である。

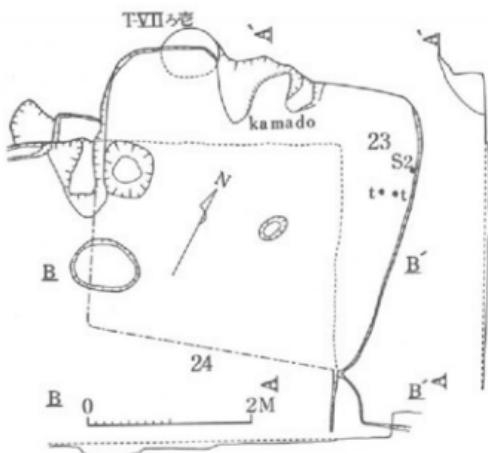


Fig. 70 第23号住居跡実測図

ノミ (Fig. 72-1)

東壁床面直上より出土。茎の先端を一部欠くのみでほぼ完形。現存長19.8cm、身は長さ約11cm断面は長方形で幅約1.1cm厚さ0.9cm、先端に幅約1.4cmの刃がある。身と茎は左右に2cm程度の弧状にふくらんだ笠によつてさかいされ、茎は長さ7cmで先端が細くなっている。

刀子 (Fig. 72-2)

東壁北寄り床面直上より出土。刃部先端を若干欠くのみでほぼ完形。現存長15.8cm、刃部長10.3cm、茎長5.5cm、刃と茎は間によつて区切られている。

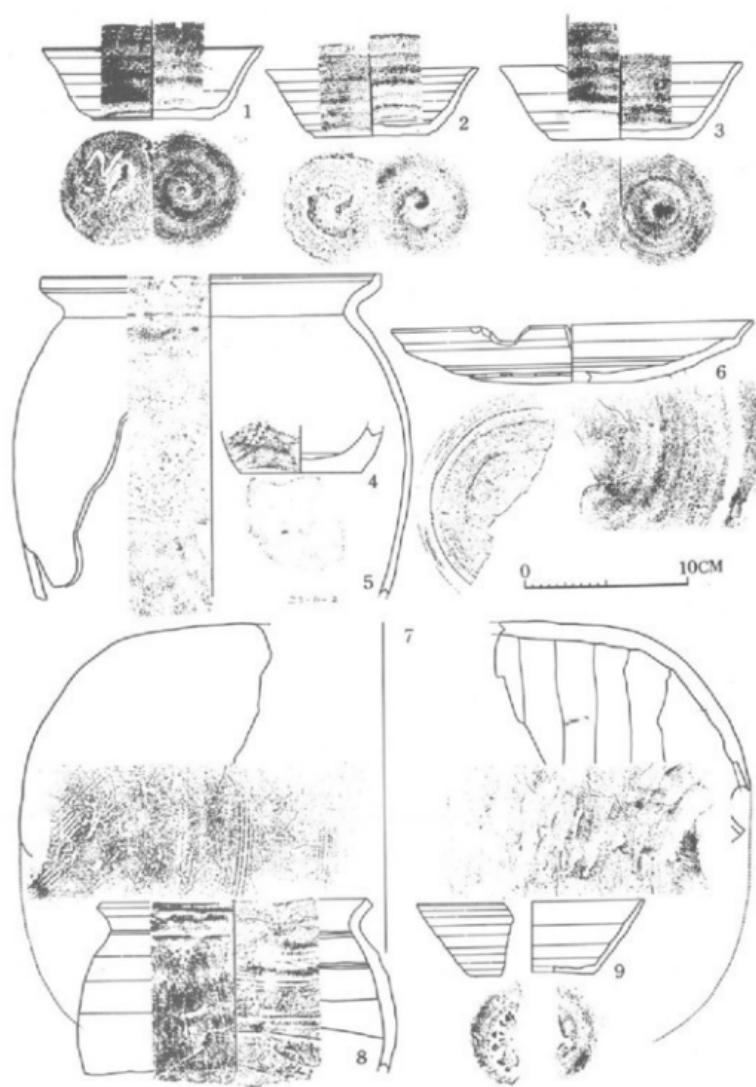


Fig. 71 第23号住居跡土器実測図

23号住居跡出土土器一覧表

器 形 形 別	種 類 名	図版 番	出土 場所	色 調		胎 土	焼 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
环	S	1	69—6	埋	灰	灰	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。
环	S	2	69—5	床	◆	◆	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。
环	S	3	71—2	埋	黄褐	黄褐	粗砂粒混	不	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。再整形
鉢	J	4		◆	◆	◆	雲母石英混	良	
甕	H	5	70—1	◆	褐	褐	雲母混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形。
盤	S	6	71—3	◆	灰褐	灰褐	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し、付高台
横	S	7		◆	淡褐	淡褐	雲母混	タ	巻き上げ。
甕	H	8	71—4	◆	黄褐	黄褐	石英混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形。
环	S	9	71—1	◆	褐	褐	◆	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。

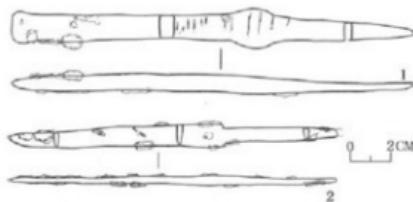


Fig. 72 第23号住居跡鉄製品実測図

24号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡の北壁側は23号住居跡が、南壁側は25号住居跡が構築され、さらに床面に掘り方4個が掘り込まれている。平面は一辺4.6×5.2mの長方形で北壁中央にカマドを設けた堅穴式の住居跡である。	ローム層上面まで熱土したため壁の立ちあがりが低い。	床はローム層そのもので堅く平らである。	北壁西寄りにのみ認められ、約20cm深さ約8cmである。	柱穴は住居内にP1～P4の4個が認められた。	カマドの右袖を23号住居跡によって壊されているが、これは床中央に柱4本を配置する一般的な住居跡である。	

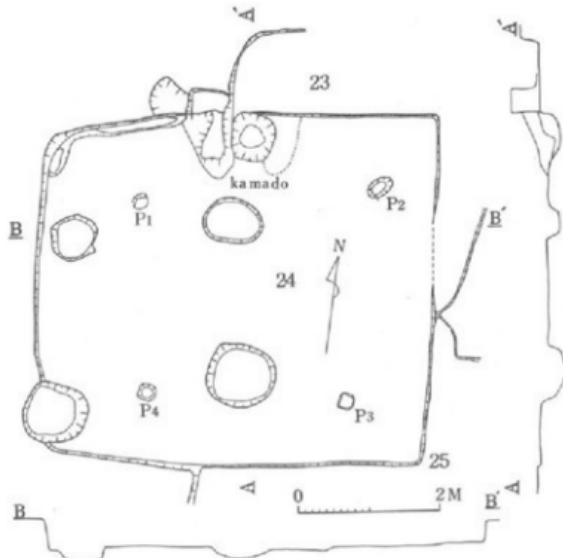


Fig. 73 第24号住居跡実測図

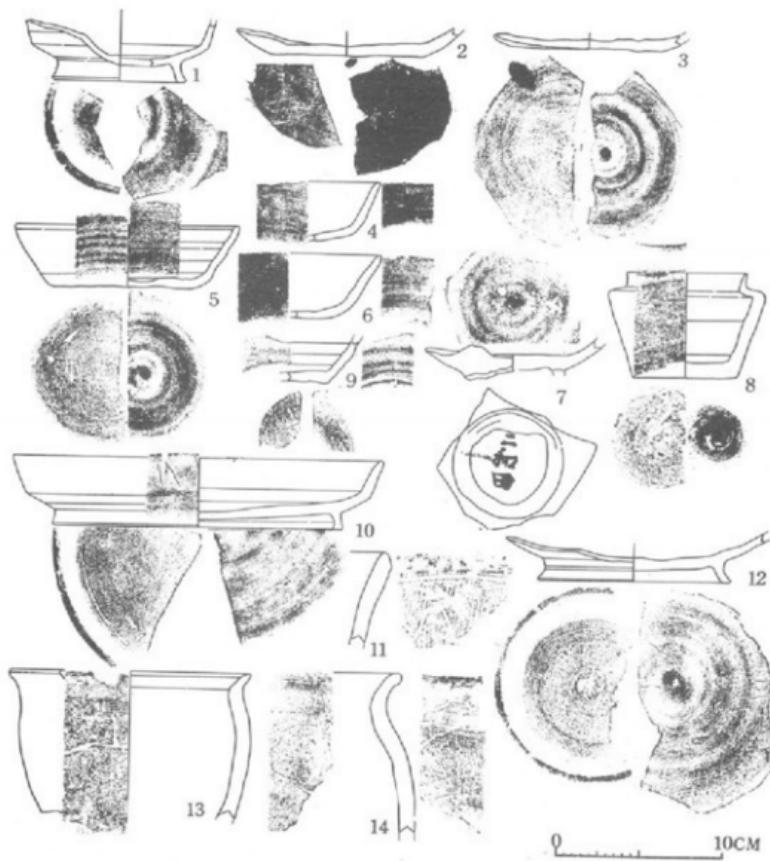


Fig. 74 第24号住居跡土器実測図

24号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	捕 獲 年 月	國 板	出土 場所	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
坏	S	1	72-3	埋	灰褐	褐	粗砂粒混	良	体部ロクロ。底部付高台。	
坏	H	2		+	赤褐	タ	タ	タ	底部ヘラ起し、再整形。他欠。	
坏	S	3		+	白灰	青灰	タ	タ	底部ヘラ起し、他欠。	
坏	S	4		+	タ	白灰	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
坏	S	5	72-1	+	青灰	青灰	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底辺ヘラ起し。	
坏	S	6		+	黯灰	油灰	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底部ヘラ起し。	
坏	II	7	72-4	+	黑	赤褐	タ	タ	底付高台	底墨「三和田」
盖	S	8	72-5	+	灰	黑灰	石英混	タ	口辺。体部、底部別個接合。	底ヘラ
坏	S	9	71-5	+	褐	褐	粗砂粒混	タ	体部ロクロ。底辺ヘラ起し。	底ヘラ
蟹	S	10	73-1	+	灰	灰	タ	タ	口辺。体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台	
J	11			+	淡青褐	淡灰褐	タ	タ	擦糸文。口唇下3~5cmに波状沈線。	
盖	S	12	72-2	+	灰	灰	タ	タ	体部ロクロ。底辺ヘラ起し。	底ヘラ
便	H	13	72-7	+	黑褐	赤褐	タ	タ	口辺墨ロクロ。体部ヘラ整形。	
要	H	14	72-6	+	淡褐	褐	タ	タ	口辺墨ロクロ。体部ヘラ整形。	

25号住居跡

平面形	側壁	床	周囲	柱穴	カマド	備考
本跡は24号住 居跡の上に構 築され、後に 掘り込まれた 円形の土盛が 床面にある。 3.3 × 4 m の 長方形平面で 東壁にカマド を設けた竪穴式住居跡である。	ローム層上面まで 除土したためわ めて壁の立ちあが りが低く、北壁約 15cm、南壁約10cm 東壁約6 cm、西壁 約20cmで、直立せざやや内寄り気味に 外傾する。	24号住居跡との 重複部分のみ貼 て、他はロー ム層そのもので あった。床面は 堅く平らである。	周溝は全く認め られなかつた。 に全く認めることが できなかつたが、カマド附近の穴につい ては後に掘られたもの である。	柱穴らしき穴は カマド附近を除 いて、住居内外 に全く認めることができなかつたが、カマド附近の穴について は後に掘られたもの である。	壁の立ち上がり がわずかのため カマドの遺存状 態が悪いが、北 壁中央に黄白色 砂質粘土で構築 していた。火床 もその範囲が不 明瞭で煙道も同様に明らかでない。	

石製鋤車 (Fig. 76)

本跡廃棄後につくられた長径1.5 × 短径1.2 mの不正梢円形土括埋積土中より出土。断面は台形で上面は別離し、下面径2.5 cm、中央の孔は径0.7 cm。泥板岩の磨製品である。

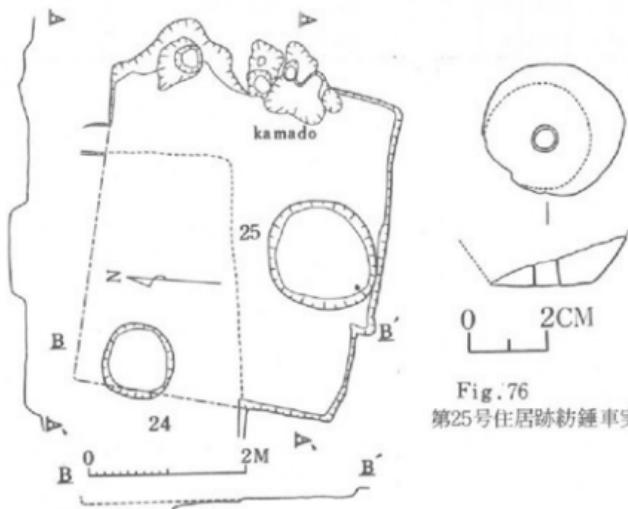


Fig. 75 第25号住居跡実測図

Fig. 76
第25号住居跡鋤車実測図

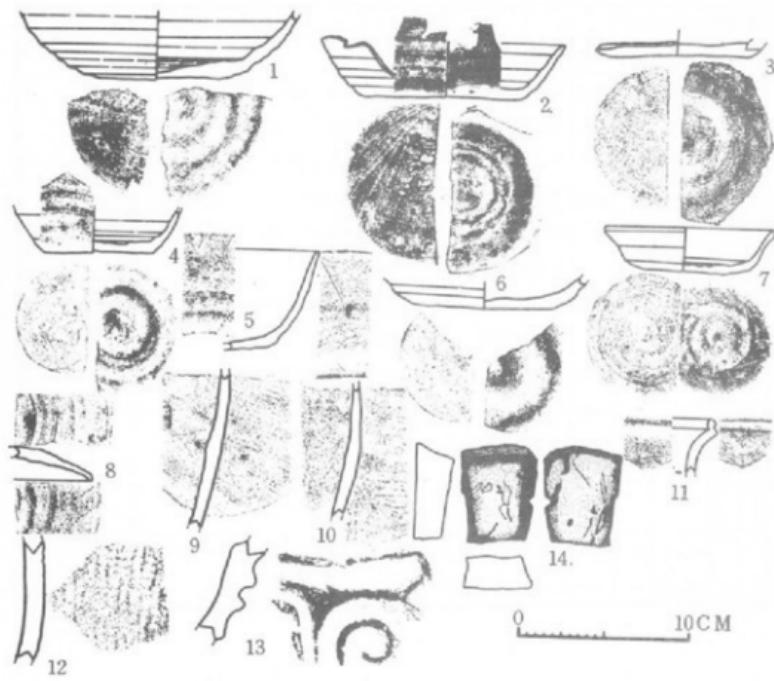


Fig. 77 第25号住居跡土器実測図

25号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	母國	國版	出土 場所	色調		胎 土	燒 成	手法上の特色	備考	
					内側	外側					
壺	H	1	73-5	埋	赤褐色	赤褐色	粗砂粒胎	良	体部へラ型形。底部へラ起し。		
壺	S	2	73-3	タ	青灰	青灰	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。再整形。		
壺	S	3		タ	タ	タ	タ	タ	底部へラ起し。再整形。他欠。		
壺	S	4	73-4	タ	灰褐	灰褐	墨粉混	タ	体部ロクロ。底部へラ起し。再整形。		
壺	H	5	73-7	タ	黑	灰褐	青丹石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。		
壺	H	6	73-2	タ	タ	淡褐	粗砂粒胎	タ	底部へラ起し。他欠。		
壺	X	7	73-6	タ	淡褐	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部へラ起し。	直径約9.6 cm.	
蓋	S	8		タ	灰	灰	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。上部へラ起し。		
甕	S	9	73-8	タ	黑褐	黑褐	粗砂粒混	タ	体部のみ。平行沈線タタキ。		
甕	H	10		タ	暗褐	暗褐	タ	タ	口辺ロクロ。		
甕	H	11		タ	黑褐	灰褐	タ	タ	体部へラ型形。巻上げ。		
鉢	J	12		タ	赤褐	赤褐	墨粉混	タ			
鉢	J	13		タ	黑灰	淡褐	粗砂粒胎	タ			
砧			Perr	73-9	埋	遺存長約5.5 cm. 厚み2.2 cm. 片面にはひらを結びつけるためのくぼみがある。					
石				14	73-10	タ	切り込みのような研磨痕がある。				

26号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡はその大部分が調査区外にあるため全容を明らかにしえないが、調査範囲では東壁 3.4m、南壁 4.5m である。	ローム層上面まで 跡土したため壁の立ちあがりがきわめて低く、南壁約40cm 東壁約24cmで 立ちあがりは外傾している。	ローム層で堅く ほぼ平らである。	東壁及び南壁 下の一部に認められ、幅約 15cm、深さ8cmである。	柱穴は調査でき た範囲では住居内に認められず、 住居跡外のP 1 も本跡に伴なう ものかは明らか でない。		調査区外にある ものと考えられる。

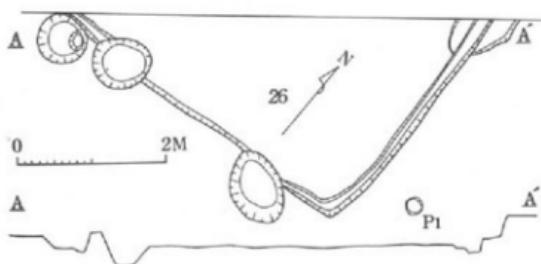


Fig. 78 第26号住居跡実測図

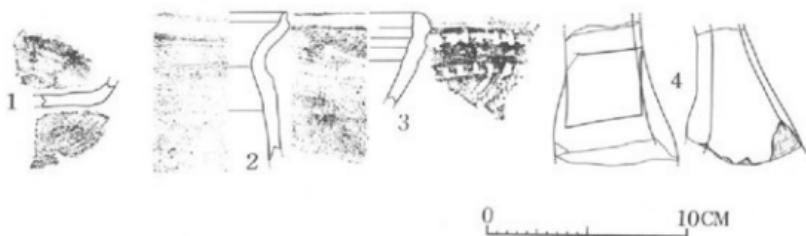


Fig. 79 第26号住居跡土器実測図

26号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	排 出 所	出上 場所	色調		胎 土	燒 成	手法上 の 特 色	備 考
				内側	外側				
坏	J	1	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒混	良	底部へシ起し、他欠。	
甕	H	2	74-1	+	黄淡	黄淡	云母石英混	+	口辺ロクロ、巻き上げ。
鉢	J	3	74-2	+	淡褐	黄褐	+	+	
石		4	74-3	埋	遺存最大長約7.5cm、両側面が磨かれている。				

27号住居跡

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は14号住居跡T-Vに北壁を壊され、さらに掘立式建物に直立せざ外傾するものと思われる。	側壁上部はローム層上面まで除土したため、床面がローム層に浅く掘られたため、壁の基礎が悪く、凹凸がかなりある。	床はローム層を浅く掘こんでいるため、遺存状態が悪く、底は低く、立ちあがりがきわめて低く、遺存している北壁と南壁ではそれぞれ約6cmと約2cmほどで直立せず外傾するものと思われる。	周溝は全く認められなかつた。	住居跡に伴なうと思われる柱穴らしき穴はP1のみで、他の後で掘り込まれたものであろう。	カマドは確認できなかつた。	

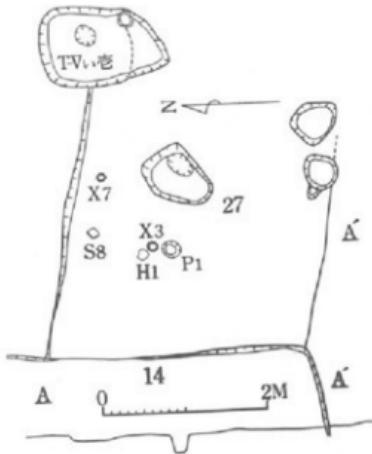


Fig.80 第27号住居跡実測図

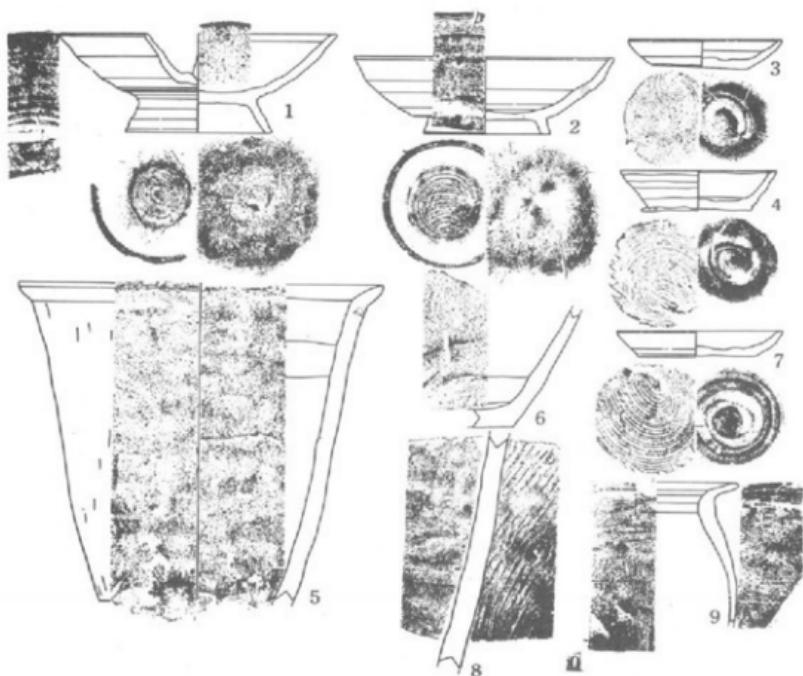


Fig. 81 第27号住居跡土器実測図

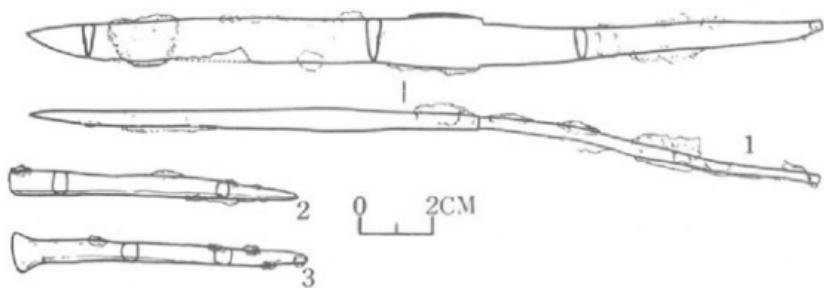


Fig. 82 D-27土鉄製品実測図

27号住居跡出土土器一覧表

器 形 別	種 類	地 点	國版	出土 場所	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
碗	H	1	74-5	床	暗褐色	淡褐色	石英混	良	口辺、体部ロクロ。底部付高台。	
坏	H	2	74-4	埋	黑	褐	+	+	口辺、体部ロクロ。底部糸切り、付高台。	
坏	X	3	75-4	床	褐	+	雲母石英混	+	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	直徑約8.8 cm
坏	X	4	75-5	埋	赤褐色	淡褐色	雲母混	+	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	直徑約9.3 cm
钵	H	5	75-1	床	暗褐色	暗褐色	石英混	+	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。巻き上げ。	
甕	H	6		埋	茶褐色	+	雲母石英混	+	体部ヘラ整形。底部木集底。	
坏	X	7	75-3	床	褐	褐	+	+	口辺、体部ロクロ、底部糸切り。	直徑約9.6 cm
甕	S	8	74-6	埋	暗灰	灰	石英混	+		
甕	H	9	75-2	+	暗褐色	暗褐色	雲母石英混	+	口辺ロクロ。	

28号・29号・30号・31号住居跡・D-27土塗

28号住居跡 本跡は、16号住居跡の南壁に黄白色砂質粘土が認められたが、一面流けて赤色を呈していたのでカーボドとして間違いなく、床と思われる堅い面も部分的にみられたので住居跡と断定したが、詳細なことは明らかに出きなかつた。

29号住居跡 本跡は、Eトレンチをコンボで掘った際に確認されたものであり、日数の都合により調査できなかつたものである。一边約4m、壁高は約50cmを測り、床はローム層そのもので堅くしまっており平らであった。周溝は南壁に認められ幅約15cm、深さ約10cmを測る。

出土遺物は甕が横倒しの状態で発見された。(Fig. 82 国版70-2)

30号住居跡 本跡はAトレンチの前111付近に確認されたもので、一边約3mほどの住居跡である。壁高は約34cmで外傾している。他は明らかでない。

出土遺物は、須恵器破片が若干出土している。

31号住居跡 本跡はCトレンチ内に確認されたもので、一边約4.2mほどの住居跡である。壁高は約40cmで外傾していることと、周溝が東西壁に認められる他は明らかでない。

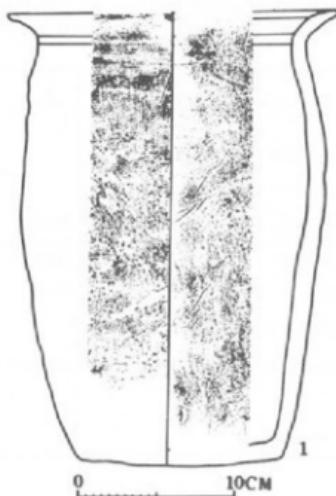


Fig. 83 第29号住居跡土器実測図

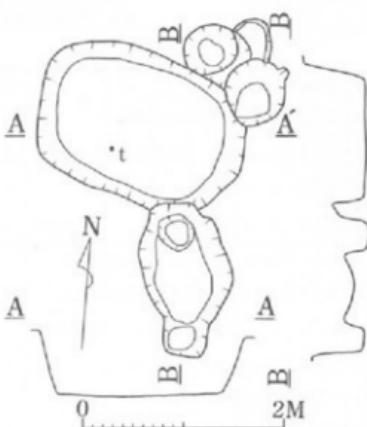


Fig. 84 D-27土塗実測図

D-27土塗 挖立式建物跡T-III・IVの西側、C-6グリットにある。 2.1×1.4 m程の隅丸長方形の東西に長い土塗である。土塗壁は東壁約65、西壁約55、南壁は約60、北壁約60cmを測り、底面はほぼ平らで、壁は外傾して立ち上がっている。南・北壁の相互の東隅には後に掘られた穴がある。

遺物は刀子が南壁中央より約40cm内部の底上約45cmの黒色埋積土中より出土した。他に土器類須恵器、灰釉陶器の破片の出土があったが、底上に接するものはなくいずれも黒色埋積土中であり、したがって、本土塗の属する時期を決定する積極的な遺物はなかったが、掘立式建物跡の掘方埋積土などのあり方に類するもので、埋積土中の遺物類等を考慮すると、この土塗の時期を一応平安時代に属するものと考えられよう。

刀子 (Fig. 82-1)

D-1 南壁中央より約40cm内部の底上約45cmの埋積土中出土。現存長—22.3cm、茎の先端を若干欠失するのみではほぼ完形。刃部長12.7cm、茎部長9.6cmである。茎は刀身より一段低く間に上つて区切られている。

釘 (Fig. 82-2)

埋積土中出土。現存長約8cm、断面長方形で 0.4×0.6 cmである。

16号住居跡について

16号住居跡は他の住居跡と異なった点が多くみられた。その一つに円形造構（仮称）がある。この円形造構は、北壁中央よりやや西寄りのところから外に、 $1.1 \times 1.4\text{m}$ 程の半円状の掘りこみがある、火を受けたため造構全面がやや堅く、淡い赤色を呈していた。中からは約15cmほどの石と高台付の塊が伏さつた状態で出土した。

また、床面中央よりやや西寄りに深約58cm、深さ約10cm程の穴が認められ、これも一面に焼け淡い赤色を呈している。中からはカワラケが出土した。

つぎに貯蔵穴がみられる。最大径約 $90 \times 85\text{cm}$ 、深さ約54cmの不正円形で、北東隅にあり、底面に黄白色砂質粘土が20cm程堆積していた。この粘土は11、12号住居跡などのカマドに使用されている粘土と同質でさらにカマドは他の住居跡に比較して火灰及び灰は非常によく焼けてかたく、赤色になっていた。袖の部分は現存していなかったが、現存する奥壁の粘土にスサを混ぜたもので仕上げてあつたので、袖の部分もおそらくスサ混りの粘土で構築したものと推察した。

最後に南壁中央より幅約1.1 m の堅い面が住居跡にはほぼ平行して東西にのびていた。この造構は、初め本跡の南北隅にカマドの遺存する28号住居跡の床面の一端であると考えられたのであるが、調査が進むにつれてこの遺構は28号住居跡のカマドを切っていること、本跡との切り合い関係が認められないことなどから、本跡に伴う造構と考えてよいと思う。

以上が16号住居跡について説明の不足を補ったものであるが、円形造構などについてはこれらが火災にあって焼けたものでないことは述べるまでもない。

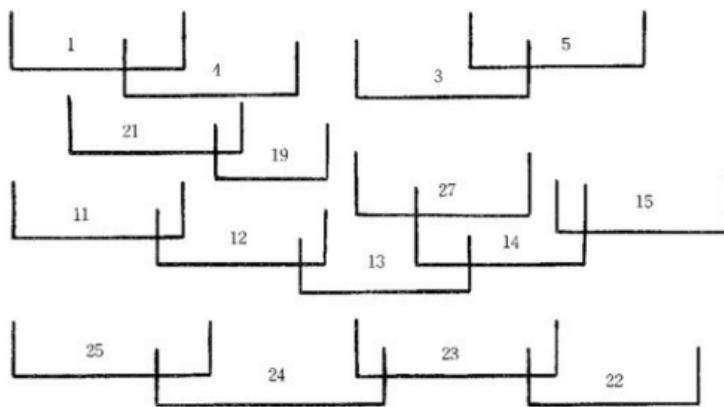
住居跡並びに掘立式建物跡の新旧関係

住居跡の新旧関係については、住居跡そのものが切り合ひ（破壊）関係によつて明らかなるのが比較的多かった。また、掘立式建物跡の場合にも新旧関係を理解し得るものがあった。その関係はつぎの如くであった。

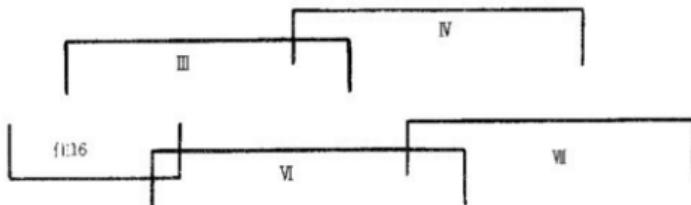
〔例〕住居跡——19号跡を21号跡が切つてゐるので、19号がふるく、21号が新らしい。

〔例〕掘立式——Ⅶ号跡がふるく、Ⅷ号跡が新らしい。そして、Ⅷ号跡のうちに6号住居跡が焼てられた。

住居跡新旧関係図



掘立式建物跡新旧関係図



掘立式建物跡

本遺跡では、堅穴式住居跡とともに多数の柱穴が検出された。それらの中で建物跡としてまとまるものは7棟であった。他にも不充分ではあるが建物跡として柱穴がまとまるものがあり、調査区域を拡大することによりさらに多くの建物跡が認められるものと考えられる。建物跡の新旧関係については前に述べたので省くが、方向性については、Vは東西棟、I・II・IV・VIは南北棟、III・VIIは南北よりやや西に寄っている。

本遺跡の掘立柱の造構は、堅穴式住居跡内にその柱穴が遺存していることから堅穴式住居跡よりも後に構築されたものと考えられる。しかし、各住居跡出土の墨書き器が、14・20号住居跡を除きすべて埋積土中の出土であり、かつ、それらの出土位置が建物跡内もしくはその附近に含まれるという傾向がみだされると共に、二・三の住居跡との共存も考えられる。また灰陶陶器の破片がD-109より出土したが、D-109は掘立式建物跡としてまとまるものと考えられ、その柱穴の一つであろう。

施 用 行 程	棟 間	堅 穴 の 保 持 さ (-cm)							
		い ろ は				に			
		東 北 西 南	東 北 東 西	東 北 東 南	東 北 東 西	東 北 東 南	東 北 東 西	東 北 東 南	東 北 東 西
I 3 棟	約5.6 m (約18.3尺)	2 間 (約9.3尺)	約4 m (約12.8尺)	71. 56. 29. 21. 横 横 横 横	29. 58. 横 一 横 一	31. 31. 39. 57. 横 一 横 一			
II 3 棟	約5.84m (約19.6尺)	2 間 (約11尺)	約0.3 m (約1.8尺)	50. 17. 43. 55. — — — —	30. 17. — — — —	43. 15. 20. 25. — — 横 —			
III 3 棟	約6.2 m (約20.4尺)	2 間 (約15.8尺)	約4.8 m (約15.8尺)	47. 42. 51. 24. — — — —	20. 57. — — — —	24. 18. 55. 33. — 横 横 横			
IV 3 棟	約6.3 m (約21.5尺)	2 間 (約18.3尺)	約5.54m (約18.3尺)	70. 64. 68. 69. — 横 横 横	54. 74. — — — —	51. 64. 71. 76. — 横 横 横			
V 3 棟	約6.4 m (約21.2尺)	2 間 (約16.5尺)	約5 m (約16.5尺)	29. 41. 37. 51. 横 — — —	48. 42. — — — —	60. 48. 56. 65. — 横 横 横			
VI 3 棟	約6.5 m (約22.9尺)	3 間 (約24.1尺)	約7.3 m (約24.1尺)	48. 74. 65. 65. 横 横 横 横	60. 60. 15. 54. 横 横 横 横	51. 56. 29. 63. 横 横 横 横	40. 12. 13. 31. — 横 — 横		
VII 3 棟	約4.8 m (約15.8尺)	2 間 (約11.8尺)	約3.6 m (約11.8尺)	40. 25. 28. 10. — — 横 —	37. 51. 11. 23. — — — —	21. 38. 31. 35. — — — —			

※横—横と認められるものがある。

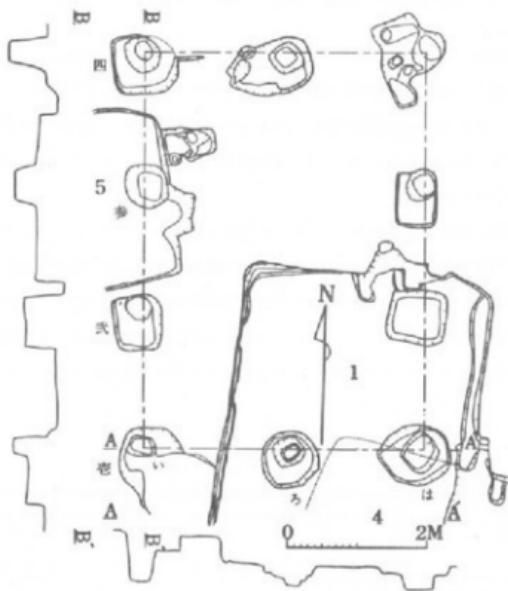


Fig. 85 T-I 実測図

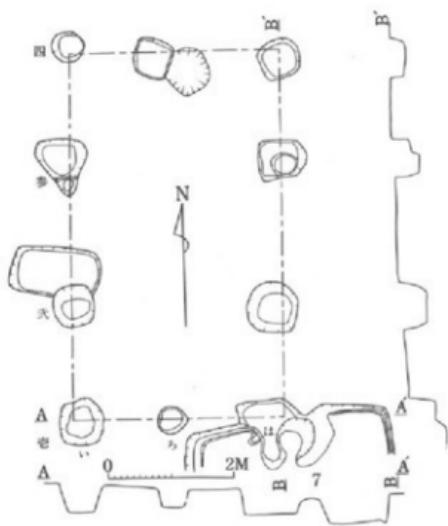


Fig. 86 T-II 実測図

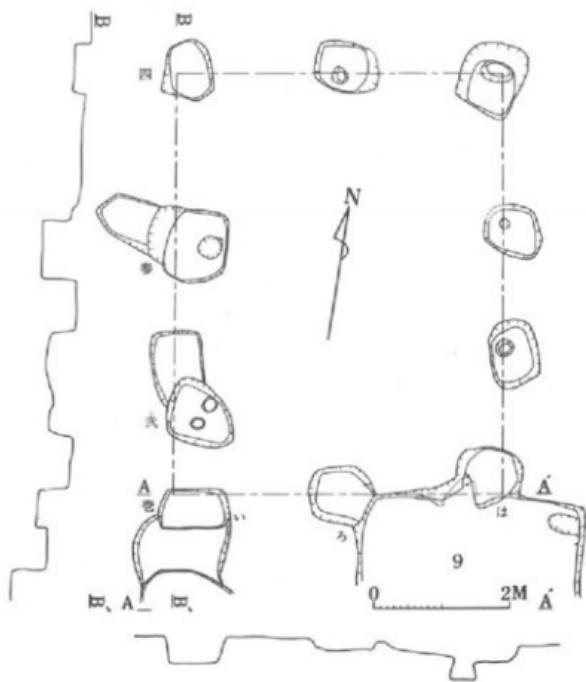


Fig. 87 T-III 実測図

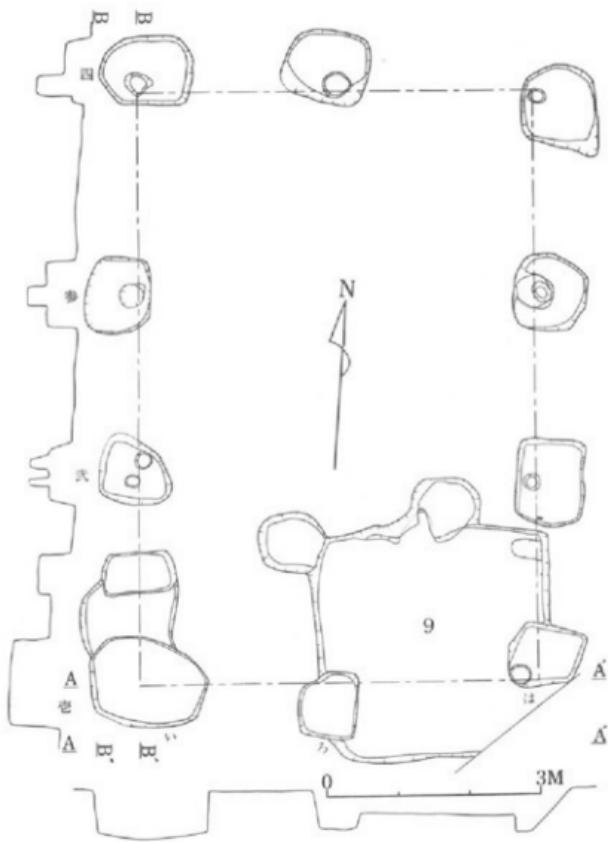


Fig. 88 T-IV 実測図

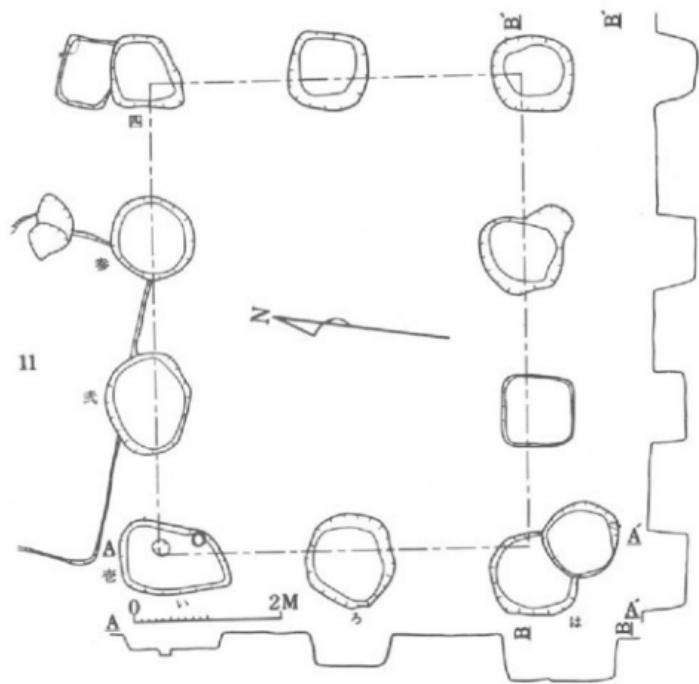


Fig. 89 T-V 実測図

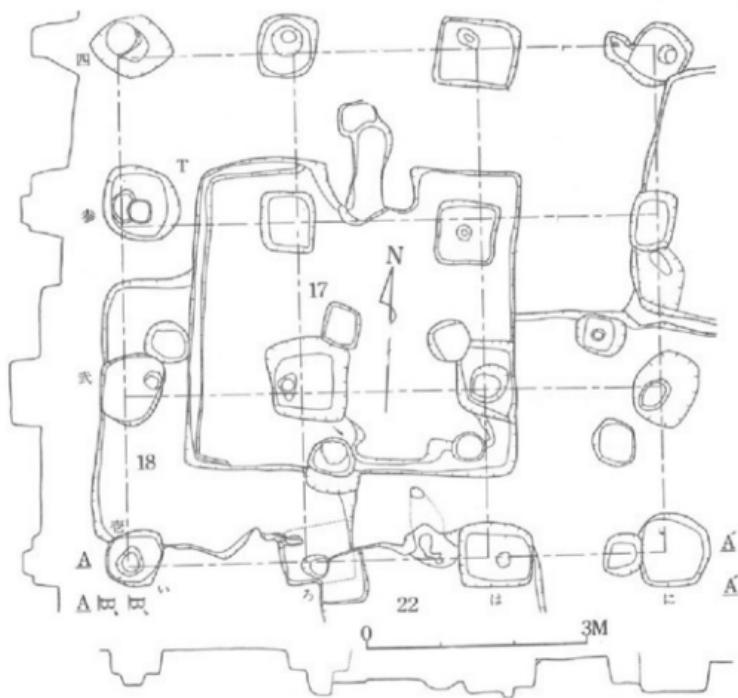


Fig. 90 T-VI 実測図

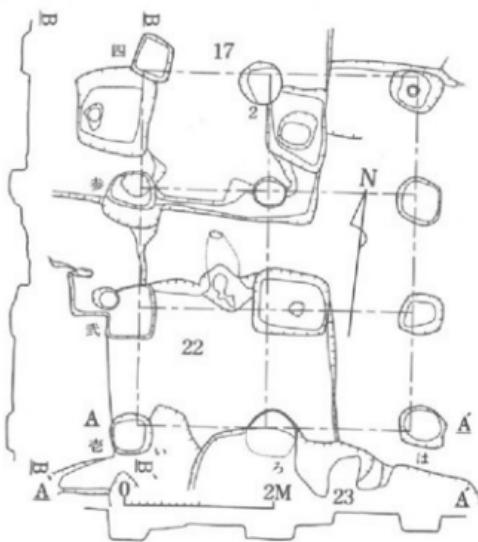


Fig. 91 T-VII 実測図

掘立式建物跡出土鉄製品

釘 (Fig. 92-1)

T-V 挖方一～三の南東約70cmのローム層上面より出土。現存長8cm, 断面は方形である。腐蝕がはなはだしく頭部は欠失。

鎌 (Fig. 92-2)

T-IV 挖方一～三の底面上約50cmの黒色埋積土中より出土。現存長13cm, 幅4cm, 厚さ0.2～0.3cmである。柄の着装部は欠失。身

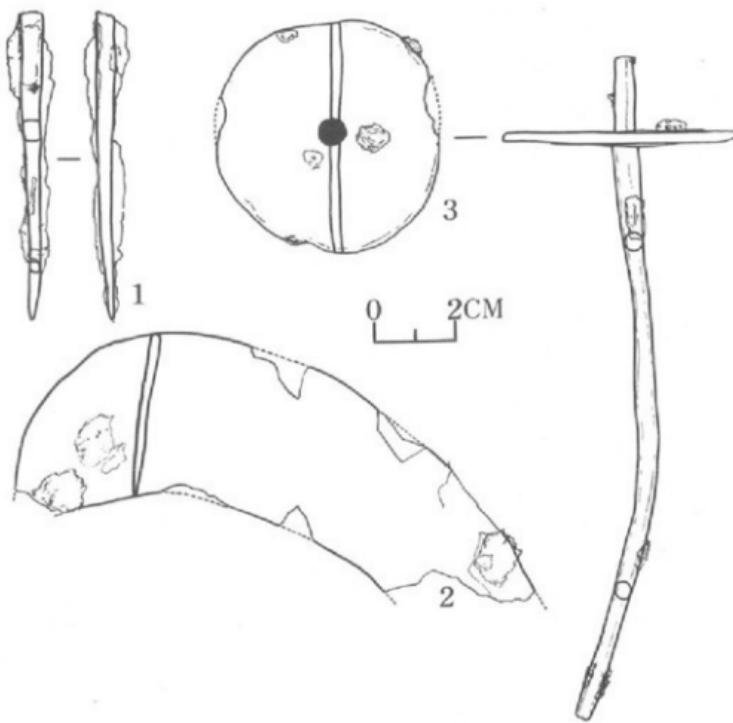


Fig. 92 挖立式建物跡鉄製品実測図

の先端柄の方へ幅がせばまる。

鉄製糸錘車 (Fig. 92-3)

T一具の掘方い…参より東方約50cmローム層上約15cmの黒色土中より出土。現存長16.4cmで一方の軸は大半が欠失し、軸は径0.5 cmの円形である。現存する長い方の軸は14cm程度である。円盤（車）は若干の腐蝕が見られるが、厚さ0.2 ~0.3 cm、径5.6 cmであった。



Fig. 93 グリット内遺物実測図(1)

グリット内出土遺物一覧表(縄文)

器 種	種 類	出 所	出土 位 置	色 調		施 工 方 法	形 状	種 類	出 所	色 調		施 工 方 法
				内 部	外 側					内 部	外 側	
器 種	種 類	出 所	出土 位 置	色 調	施 工 方 法	形 状	種 類	出 所	色 調	施 工 方 法		
J	玉											
25	J	玉1		011-1	赤褐色	磨光	玉器多面切	玉	玉	玉器	抛光	
26	J	玉2	75-11	*	淡褐色	磨	*	*	*	*	*	
27	J	玉3	*	*	灰褐色	磨	金冠山玉器	*	*	*	*	
28	J	玉4	27-8	*	褐	磨	石英、金冠山玉器	*	*	*	*	
29	J	玉5	27-5	*	黄褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
30	J	玉6	*	*	黑褐色	磨	黑木原研磨	*	*	*	*	
31	J	玉7	75-7	*	褐	磨	新潟多面切玉	*	*	*	*	
32	J	玉8	*	*	黄褐色	磨光	*	*	*	*	*	
33	J	玉9	*	*	淡褐色	磨光	石英和田玉研磨	*	*	*	*	
34	J	玉10	76-12	石	灰褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
35	J	玉11	011-1	*	黄褐色	磨光	金冠山玉器	*	*	*	*	
36	J	玉12	011-1	*	淡褐色	磨光	石英金冠山玉器	*	*	*	*	
37	J	玉13	27-16	玉	白	磨光	金冠山玉器	*	*	*	*	
38	J	玉14	26-10	*	*	*	*	*	*	*	*	
39	J	玉15	*	*	淡褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
40	J	玉16	76-15	*	黑褐色	磨光	石英金冠山玉器	*	*	*	*	
41	J	玉17	72-5	*	*	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
42	J	玉18	80-8	*	褐	磨光	玉器	*	*	*	*	
43	J	玉19	011-1	*	褐	磨光	*	*	*	*	*	
44	J	玉20	*	*	灰褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
45	J	玉21	76-4	*	赤褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
46	J	玉22	76-6	*	黄褐色	磨光	*	*	*	*	*	
47	J	玉23	75-3	*	*	赤褐色	*	*	*	*	*	
48	J	玉24	27-4	*	赤褐色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
49	J	玉25	27-15	011-1	赤褐色	磨光	金冠山玉器	*	*	*	*	
50	J	玉26	26-9	*	黄褐色	磨光	金冠山玉器	*	*	*	*	
51	J	玉27	26-12	011-1	米黄色	磨光	新潟多面切玉	*	*	*	*	
52	J	玉28	*	*	*	*	石英金冠山玉器	*	*	*	*	
53	J	玉29	*	*	*	*	石英金冠山玉器	*	*	*	*	

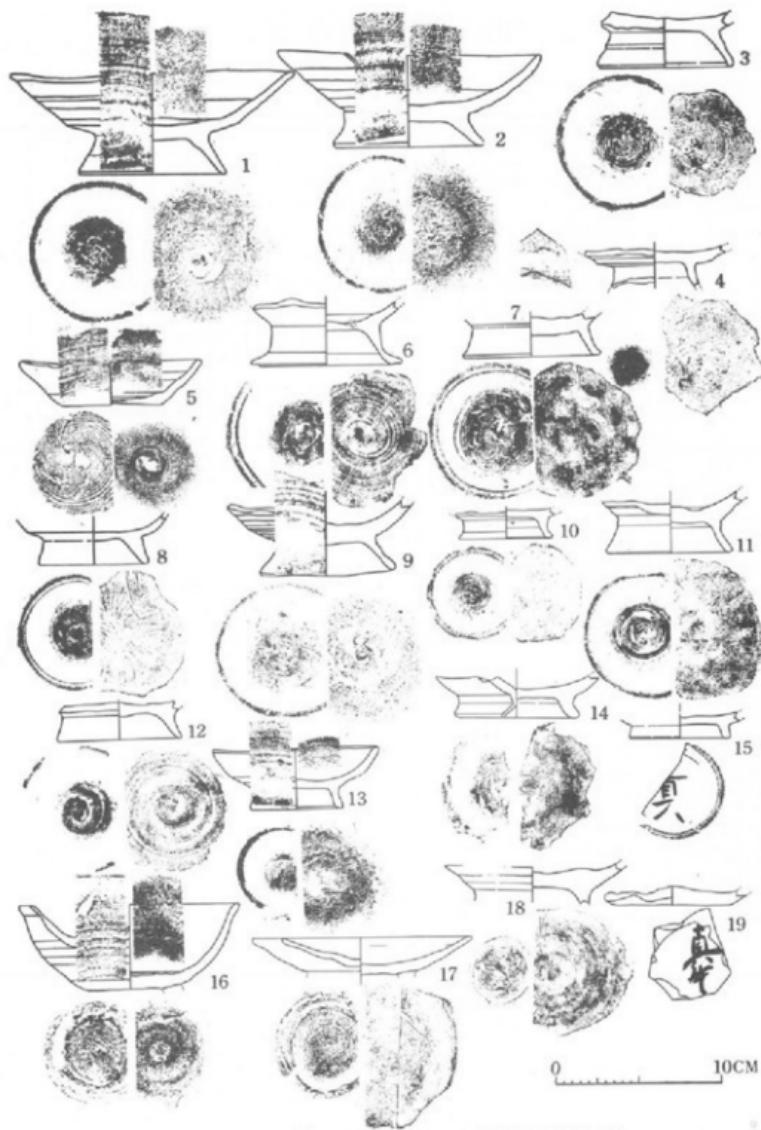


Fig. 94 グリット内遺物実測図(2)

グリット内出土土器一覧表(平安)

器形	種別	攝目	國版	出土 位置	色調		胎土	燒成	手法上の特色	備考
					内側	外側				
碗	H	鉢1	78-2	6 D	黄褐色	黄褐色	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部糸切り？付高台。	
碗	H	鉢2	80-1	9 E	褐	褐	粗砂粒雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。付高台。	
环	H	鉢3		8 E	黄白	黄褐色	*	タ	底部のみ、付高台。	
环	H	鉢4		8 F	赤褐色	黑褐色	雲母石英混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢5	81-9	D-27	黄褐色	黄褐色	雲母粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	
环	H	鉢6		D-19	淡黄	褐	石英雲母混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢7		9 F	黑	淡褐色	粗砂粗混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢8		*	黄褐色	黄褐色	砂粒混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢9	78-4	D-26	淡褐	淡褐	石英混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢10		6 B	黑	黄褐色	石英雲母混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢11		8 E	黄褐色	*	粗砂粒混	タ	雲母のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢12		D-26	淡褐	淡褐	*	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢13	78-3	7 H	黑	黄褐色	砂粒雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。付高台。	
环	H	鉢14		9 F	*	淡褐	粗砂粒混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
环	H	鉢15		E	*	暗褐	雲母石英混	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	眞墨書「真」
环	H	鉢16	78-6	B V	*	黄褐色	砂粒雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台	
环	H	鉢17		9 A	*	*	石英雲母混	タ	口辺、底部ヘラ起し。	
环	H	鉢18		D-13	*	*	*	タ	体辺ロクロ、底部ヘラ起し。	
环	H	鉢19		Cトレ	*	*	粗砂粒混	タ	底部のみ、ヘラ起し。	眞墨書「真……」

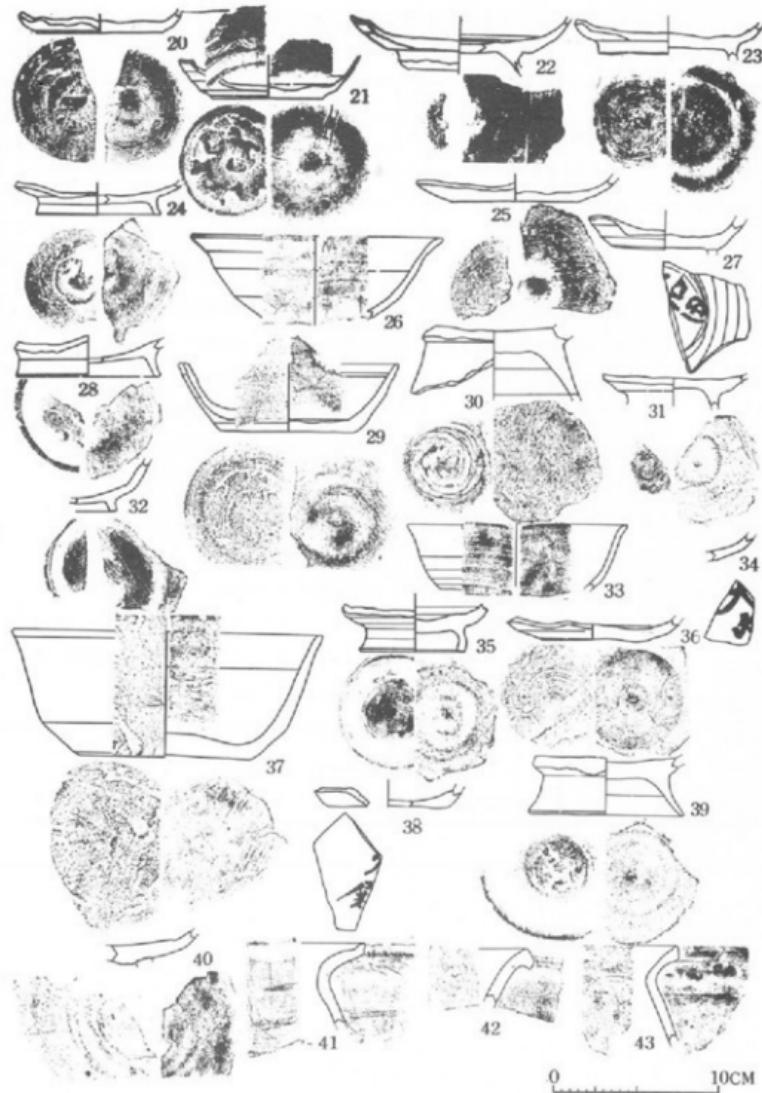


Fig. 95 グリット内遺物実測図(3)

形 状 部 位	種 類 名	固 定 方 式	直 上 部 位	色 調		地 土	整 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内 側	外 側				
坏 H A20		ろ 四	赤褐色	黄	褐	粗砂粒混	良	底部のみ、ヘラ起し。	T-N
坏 H A21		7 A	褐	茶褐色	暗褐色	粗砂粒混	+	体部ロクロ、底部へタ起し。	
坏 E A22		B V	濃茶	青褐色	石英	石英鈍角混	+	体部ロクロ、底然へタ起し。	
坏 H A23		9 E	黑	深褐色	*	*	+	底部のみ、ヘラ起し。付高台。	
坏 H A24		6 B	瓦褐色	灰褐色	暗褐色	粗砂粒混	+	底所のみ、ヘラ起し。付高台。	
坏 H A25		B 黑	黑	*	*	沙粒變珊瑚	+	体部ロクロ、底然へタ起し。	
坏 H A26		3 B	沃褐色	沃褐色	粗砂粒混	粗砂粒混	+	口沿、体部ロクロ。艳火。	
坏 H A27	79-7	9 D	黑	赤褐色	*	*	+	体部ロクロ、底部へタ起し。付高台。	共通書「…和田」
坏 H A28		B II	*	黃褐色	*	*	+	底然のみ、ヘタ起し。付高台。	
坏 H A29		*	黑褐色	茶褐色	石英	石英鈍角混	+	体部ロクロ、底然へタ起し。	
坏 H A30	81-10	B III	褐	褐	褐	半球小量混	+	高台のみ。	
坏 H A31		B II	瓦褐色	灰褐色	沙粒變珊瑚	粗砂粒混	+	体部ロクロ、底然へタ起し。付高台。	
坏 H A32		B I	黑	*	*	碧砂小量混	+	体部ロクロ、底然へタ起し。付高台。	
坏 H A33		D-27	黃褐色	*	*	粗砂粒混	+	口沿、体部ロクロ。底然へタ起し。付高台。	体部「……水蜜」
坏 H A34		S E	黑	*	*	*	+	底然のみ、ロクロ。	
坏 H A35		7 C	*	*	*	*	+	底然ロクロ、底部へタ起し。付高台内面へタ變形。	
坏 H A36		*	淡褐色	火燒	粗砂粒混	粗砂粒混	+	底然余切り。	
坏 H A37		9 D	瓦褐色	小點	粗砂小量混	粗砂粒混	+	口沿、体部ロクロ。底然へタ起し。	共通書「…火燒」？
坏 H A38	78-7	D-35	黑	黃褐色	粗砂粒混	粗砂粒混	+	体部ロクロ、底然へタ起し。	
坏 H A39		D-19	黃褐色	*	*	*	+	體然のみ、ヘタ起し。付高台。	
坏 H A40		B-48	黑	赤褐色	赤褐色	赤褐色	+	体部ロクロ、底然へタ起し。付高台。	高白玻璃質使用
坏 H A41		B I	瓦褐色	灰褐色	碧砂小量混	+	口沿のみ、ロクロ。		
坏 S A42		B-38	黑瓦	溫火	沙粒變	沙粒變	+	口沿のみ、ロクロ。	
坏 H A43		I B	淡褐色	淡褐色	粗砂粒混	粗砂粒混	+	口沿のみ、ロクロ。	自然和諧着

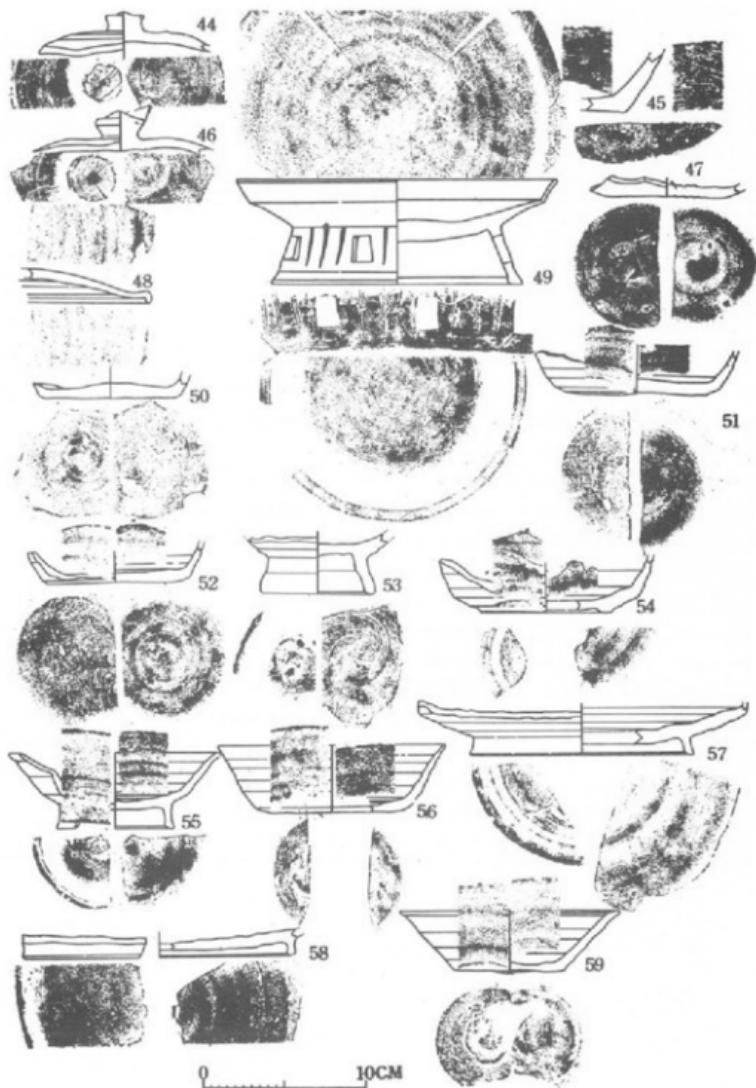


Fig. 96 グリット内遺物実測図(4)

名 称 形 状	標 本 番 号	部 位	出 土 位 置	色 調		施 工	施 成	手 法 上 の 特 色	備 考
				内 部	外 側				
盤	H 系41	81-6	D 19	灰 色	灰 色	粗砂粒混	鉛	上部へラ起し、宝珠つまみ。	
電	H 系45		9	E	*	茶褐色	*	体、底面へラ整形。	
蓋	H 系46	81-4	12 四	*	灰褐色	粗砂粒混	*	上部へラ起し、宝珠つまみ。	T一Ⅲ
坪	H 系47	81-7	1 B	*	*	*	*	底部のみ、ヘラ起し。轟敷丹。	虎筋へラ記号
蓋	H 系48		6	B	*	*	*	口沿、体面ロクロ、上部へケ起し。	
盤	H 系49	79-4	d 1	灰	灰	*	*	体面ロクロ。付高台。	高台に通じあり
坪	H 系50		6	A	淡灰	*	*	延室のみ、ヘラ起し。轟敷形。	
坪	H 系51	81-5	B I	灰白	灰白	石英・雲母混	鉛	体面ロクロ。底部へラ起し。	自然剥離
坪	S 系52	81-11	6	G	*	*	*	体面ロクロ。底面へラ起し。両整形。	
坪	H 系53		9	E	焦茶	深褐色	*	口沿、体面ロクロ。底部へラ起し。	
坪	S 系54		4	B	灰褐色	灰褐色	*	体面ロクロ。底部へラ起し。付高台。	高台被削後使用
坪	S 系55	79-1	12 四	灰白	淡白	云母型母粒	*	口沿、体面ロクロ。底部へラ起し。付高台。	T一Ⅲ、底基へラ記号
坪	S 系56		B N	*	*	*	*	口沿、体面ロクロ。底部へラ起し。付高台。	
盤	S 系57		6	A	灰褐色	灰褐色	鉛砂粒混	体面ロクロ。底面へラ起し。付高台。	体面自然剥離着
蓋	S 系58		B N	*	*	*	*	底面のみ、ヘラ起し。付高台	
坪	S 系59	81-8	5	B	*	*	*	口沿。体面ロクロ。底部へラ起し。	



Fig. 97 グリット内遺物実測図(5)

器形 形 別	種 類	捕 國	國 版	出土 位置	色調		胎 上	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
蓋	H	系60	ろ 四	墨 黄褐	垩砂粒混	良	口辺ロクロ。底部ヘラ起し。			T-N
甕	H	系61	7 A	淡褐 淡褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ。体部ヘラ整形。巻き上げ。			
甕	H	系62	29-6	タ 褐	褐	タ	体部、底部ヘラ整形。巻き上げ。			
壺	H	系63	6 E	赤褐	赤褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ、他欠。		
甕	H	系64	2 D	タ	タ	石英・雲母混	タ	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。		
壺	H	系65	78-5	D-27	黄褐 黄褐	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部ヘラ起し。付高台。		
甕	H	系66	D-104	褐	淡褐	タ	タ	口辺ロクロ、巻き上げ。		
甕	H	系67	3 B	暗褐	暗褐	タ	タ	口辺のみ、ロクロ。		
环	H	系68		D-53	黑	灰褐	タ	底部のみ、ヘラ起し。付高台。		
甕	H	系69		3 B	赤褐	赤褐	タ	口辺ロクロ、体部ヘラ整形。		
环	H	系70		タ	暗褐	暗褐	粗砂粒混	タ	口辺ロクロ、他欠。	
环	X	系71		6 D	淡朱	淡黄	石英・雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	
环	X	系72		9 E	茶褐	茶褐	粗砂粒混	タ	体部ロクロ、底部糸切り。	
环	X	系73		B IV	黑	赤褐	粗砂粒雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	
环	X	系74		9 E	赤褐	タ	粗砂粒混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	
环	X	系75		タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。		
环	X	系76		タ	タ	タ	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。		
环	X	系77		タ	淡褐	淡褐	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。		
环	X	系78		8 E	赤褐	赤褐	石英雲母混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	
环	H	系79	80-6	6 D	茶褐	黄褐	石英混	タ	口辺、体部ロクロ。底部糸切り。	直徑約8.9 cm
环	K	系80	80-5	D-27	黄褐	タ	粗砂多量混	タ	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ整形。	
蓋	S	系81	81-3	6 B	灰褐	灰褐	タ	タ	上部ヘラ起し。宝珠つまみ。	

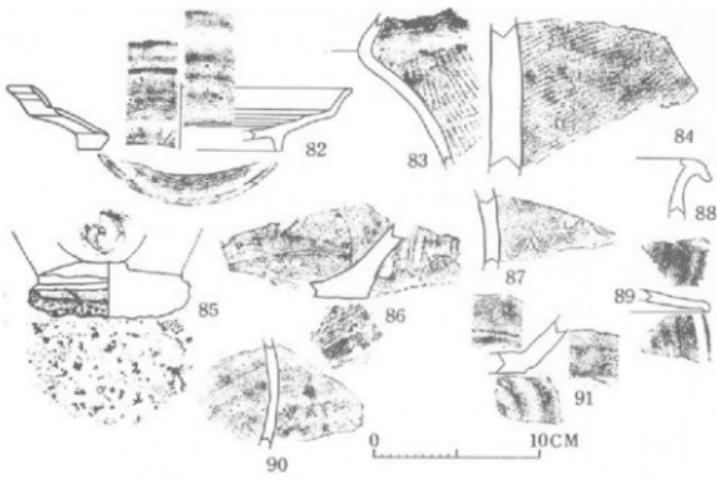


Fig. 98 グリット内遺物実測図(6)

グリット内出土遺物一覧表

器 形 別	種 類	捕獲 年	実版 名	出 土 位 置	色 調		胎 土	燒 成	手 法 上 の 特 色	備 考
					内側	外側				
盤	S	昭82	83-2	6 B	灰褐色	灰褐色	粗砂粒混	良	口辺、体部ロクロ。底部ヘラ起し。付高台。	外自然軸附着
甕	S	昭83	79-5	8 B	褐	黑灰	石英雲母混	少	口辺ロクロ。体部平行沈線タタキ。	
甕	S	昭84		D-19	单灰	茶褐色	粗砂粒混	少	体部のみ、平行沈線タタキ。	
盆	S	昭85	79-3	B IV	々	暗灰	々	少	底部のみ、ロクロ。	自然軸附着
甕	S	昭86		い 武	赤褐色	赤褐色	々	少	底部のみ、ヘラ整形	T-I
甕	S	昭87		B トレ	灰褐色	黑	々	少	口辺のみ、ロクロ。櫛指き波状文。	
甕	S	昭88		D-109	淡黄	赤褐色	々	少	口辺のみ、ロクロ。	自然軸附着
甕	S	昭89		B IV	灰褐色	灰褐色	々	少	口辺、体部ロクロ。	
甕	S	昭90		い 参	灰	黑	々	少	体部のみ、ロクロ。	T-II, 自然軸附着
甕	S	昭91		8 B	々	暗灰	々	少	底面のみ、ヘラ整形。	内外自然軸附着



Fig.99 グリット内遺物実測図(7)

1 釘

4—C出土。現存長11.5cm, 断面は腐蝕によつてやや丸味をおびている。 $(1.0 \times 1.0 \text{ cm})$ 。両端は欠けている。

2 不明鉄製品

5—B出土。現存長5.5 cm, 幅約2.3 cm, 厚さ2 mm程度の鉄板を管状に曲げたものである。両端が欠失しているため種別年代は不明。

3 カスガイ

4—C出土。断面方形で、片方が欠けている。

4 不明鉄製品

D—122出土。現存長2.8 cm, 断面方形 $(0.4 \times 0.5 \text{ cm})$ 。釘または鎌の一部であろうか。

5 不明鉄製品

D—29出土。円板の一部と思われる。厚さは1~1.2 cm, 円板の弧の一部が現存し, それを底辺とした三角形状で, 弧の部分は断面にみるとく, 斜めに断ち落されている。種別・年代は不詳。

その他の遺物

その他の遺物としては陶磁器があげられる。1・2・3・4・5・6は灰釉陶器。9・12は綠釉, 7・10・11は青磁, 14は瀬戸系天目, 16は美濃系の陶器である。年代については8・3が室町時代頃, 16が江戸時代初期のものでその他については明らかでない。なおこの陶磁器については東京国立博物館陶磁室長林屋晴三氏の御教示によるものである。

墨書土器一覧表

遺構 No.	種類 No.	出版年	出土位置	墨書所在位置	墨書	備考
1 H 9	44-1	北壁中央附近(窓穴外)のローム層上面よりS-1とともに出土したが、獨立式建物跡T-1内に属するとも考えられる。	底部(高台)外	「中」		
1 H 3	44-3	埋積土中	底部外	「中」		
1 H 18		埋積土中	腹部外	「中」		
1 S 1	45-3	9に同じ	底部(高台)外	「中」		
1 S 2	45-4	埋積土中	底部(高台)外	「中」		
1 S 7	45-2	埋積土中	腹部内・外	内底は「中」 □、外底 は「中」		
4 H 15	49-3	埋積土中	腹部外	「中」	口辺より底部方向	
4 S 2	48-3	埋積土中	底部(高台)外	不明		
6 S 6	50-4	埋積土中	腹部	「三和田」	腹部は口辺に平行	
			底部外	「三和田」		
6 H 23		埋積土中	腹部外(窓台)	不明		
9 S 3	57-3	埋積土中	底部外	「尺頭」		
12 II 8	60-9	埋積土中	腹部外	「中」	口辺より底部方向	
14 H 9	61-5	埋積土中	腹部外	「中火穀」		
14 H 1	61-3	南西隅の床面上出土	腹部外	「中火穀」	口辺と平行	
14 II 2	61-4	埋積土中	腹部外	不明		
15 S 7	62-5	埋積土中	腹部内	「中」		
16 H 19		埋積土中	腹部外(窓台)	不明		
16 H 11		埋積土中	底部(高台)外	不明		
18 H 3	66-4	埋積土中	腹部外(高台)	不明	口辺に平行	
18 H 5		埋積土中	底部(高台)外	不明		
20 II 1	67-5	埋積土中	底部(高台)外	「中」		
20 H 4		埋積土中	腹部外	「中」	(中火穀)	
24 H 7	72-4	埋積土中	底部(高台)外	「三和田」	「三」の上部が一部	

遺 稿	種 別	西 暦	西 暦	出 土 位 置	黒 字 所在位置	墨 書	備 考
D-35	H	38	82-7	埋積二中	底部外	「二天開」	欠けて「二」のみ元 る
9-D	H	27	83-7	埋積土中	底部(底台)外	「三重圓」	「中火鍋」
4-E	H	15		埋積土中	底盤(高台)外	「丸」	
9-E	H	34		埋積土中	腹部外	「一五圓」	(中火鍋)口辺に平行
4-D	H	19		埋積土中	腹部外	「丸」	

調査日誌

うら山古墳

7月13日 水曜日 晴

午前半、大門、左、長橋、松井。今井はニニチャブ・ライ・エルフにて宿泊である美誠興登間行司年賀修所に到着。正午に近藤、大島、北原、木野、真玉、松井、宮下、本田、川松、高橋、鈴島、衛門、沼、山崎、秀地到着。早速、都材を降し設営を行ひ夕刻、火上封着。

7月14日 水曜日 晴

発掘調査に先立ち測量の為に、レベルポイントの移動を行ふ。同時に塗丘の基図を始める。

7月15日 木曜日 晴/雨

草刈と併行して、塗丘測量に入る。(縮尺100分1、25cmセンター)

7月16日 金曜日 曇

草刈を日没にて完了する。(これにより、圓墳を伴う前方後円墳ではないかといつて疑がもたられた。)

7月17日 土曜日 曇/晴

塗丘撮影を行ふ。午後より鎮魂祭を行う。

7月18日 日曜日 曇/雨

前方後円墳と仮定し、後円部北側(第1トレンチ)、後円部東側(第2トレンチ)、前方部東側(第3トレンチ)に剖面壁認のトレンチを設定。
午後より雨が降り出し、当来を中断する。

石井台集落跡

7月14日 水曜日 晴

本日より作業開始。中央に幅1mのBトレンチ範囲を設定。除土作業に取りかかる。同時に、地形測量に入る。同夜笠間三上便による歓迎会、並びに激励会が行われた。

7月15日 木曜日 晴/雨

地形測量終了。Bトレンチ(範囲I~範囲V)を設定。除土作業に取りかかる。

市教育長小室氏、他数名来訪。

7月16日 金曜日 曇

Bトレンチ範囲I~範囲V(範囲IVを除く)のヨコ・ノ横様式認。

県文化財保護指導員萩原氏来訪。夕方国士館人学生有吉乳香。

7月17日 土曜日 曇/晴

Bトレンチ範囲I、範囲IIIのセクション実測に入る。Bトレンチ範囲IVに平行してa・b・c・d(Bトレンチ) e・f・g の各トレンチを設定。除土作業に入る。

県教委社会教育主事西宮氏来訪。夜、皆で「美濃の古墳群」についての講義があった。

7月18日 日曜日 晴

c・d・e・f・トレンチ除土作業終了。B(d)トレンチ範囲II、範囲Vのセクション実測終了。

7月19日 月曜日 晴／雨

各トレンチの掘り下げを行う。自然堆積土の状態を知るため第2、第3トレンチをさらに更に延長する。周囲を各トレンチにて確認する。
周囲内埋積土中より寄生式土器片数点出土。

7月19日 月曜日 晴／雨

B (d) トレンチ AIV セクション実測終了。午後よりベルトコンベア入る。

市教委島田氏来訪。千葉大学生細谷到着。発掘に参加。

7月20日 火曜日 晴

A、C トレンチをユンボで掘る。B トレンチ AII 2 ~ AII 15 まで全面発掘に取りかかる。

7月20日 火曜日 晴

第3トレンチより南側に第4トレンチ、前方部南側に第5トレンチを設定し廻査の追求を行う。
墳丘測量終了。

7月21日 水曜日 晴

D、E トレンチをユンボで掘る。全面発掘継続、1、4号住居跡確認。

7月21日 水曜日 晴

第2、第3トレンチ延長部分の掘り下げを続行。
さらに東側くびれ部付近に第6トレンチを設定。

7月22日 木曜日 曇~雨

地形測量本日で終了。3、5号住居跡確認。Eトレンチにて28号住居跡確認。写真撮影を行う。

7月22日 木曜日 曇~雨

各トレンチの掘り下げ。前方部東側コーナー付近に第7トレンチを設定。

7月23日 金曜日 曇

A トレンチセクションの実測に取りかかる。
大門、有吉、宮下、高橋、松井、山崎、本日休養。

7月23日 金曜日 曇

東側くびれ部付近(第3トレンチと第4トレンチの間)の周囲内土砂の除去。一方、第2、第3トレンチの掘り下げを継続。

7月24日 土曜日 晴~曇

3、5号住居跡の調査に取りかかる。A トレンチセクション実測終了。

教育長小室氏来訪。大島、北原、真玉、本田、今川、堀、細谷、本日休養。

7月24日 土曜日 晴~曇

東側くびれ部付近周辺の掘り下げ継続。

7月25日 日曜日 晴

各所の掘り下げを継続し、また、第1トレンチと第2トレンチとの間に第8トレンチを設定。写真撮影用のやぐらを古墳の東に設定。



7月26日 月曜日 雨

(7月14日地形測量撮影)

晴間をみながら各所の掘り下げを行うが、午後より雨が激しくなり作業を中止する。

7月27日 水曜日 晴

東側くびれ部付近より第2トレンチにかけての周溝内埋土の除去を行う。第4トレンチ土層の実測を行う。



(7月15日墳丘測量撮影)

7月28日 水曜日 晴

各所の掘り下げを続行。

7月29日 水曜日 晴

各所の掘り下げ続行。後円部西方に第11、第12トレンチを設定。周溝を確認する。

7月30日 金曜日 晴

各所の掘り下げ続行。東側くびれ部付近の周溝内埋積土を完全に取りのぞく。第5トレンチに向い掘り進む。第1トレンチ土層実測。

7月31日 土曜日 晴

周溝内埋積土の除去と併行して古墳付近の地形測量に入る。

8月1日 日曜日 晴

周溝の掘り下げ、地形測量の継続。

7月25日 日曜日 晴

7、8号住居跡確認。

國士館大学生新井到着、免職参加。

7月26日 月曜日 雨

6、9、10号住居跡確認。

7月27日 火曜日 晴

11、12号住居跡確認。Eトレンチセクション実測

終了。

文化財調査委員能島氏、笠間中学校郷土史研究会生徒7名を引率し来訪。

7月28日 水曜日 晴

1、4、6、7、10号住居跡の調査に取りかかる。本日より笠間中学校郷土史研究会生徒発掘参加。國士館大学生本田麗急病のため帰郷。

7月29日 木曜日 晴

8号住居跡の調査に取りかかる。Dトレンチのセクション実測。

國士館大学生新井夕方帰郷。

7月30日 金曜日 晴

掘立式建物跡H-5を確認。

市文化財調査委員小室氏来訪。

7月31日 土曜日 晴

1、3、5、6、7、10号住居跡完掘。清掃の後1、3、5号住居跡の写真撮影を行う。



(8月1日現地説明会撮影)

8月2日 月曜日 晴

休日。宿舎にて出土遺物の整理。

8月3日 火曜日 晴

墳丘東側周縁の掘り下げ継続。前方部西側周縁塗

認のため第13、第14トレンチを設定。

8月4日 水曜日 曇/雨

本日より後円部墳頂に、主軸にそい十字形に跡を残し、掘り下げに入る。



(7月17日鎮魂祭撮影)

8月5日 木曜日 曇~雨

石井台遺跡にて全員練土作業を行う。

8月6日 金曜日 晴

墳丘上の土砂の移動作業を行う。各トレンチ、東側周縁の掘り下げ継続。東側周縁は本日で掘り終える。地形測量を一時中止する。

8月7日 土曜日 晴

後円部、北側周縁の掘り下げ統行。東側周縁の写真撮影。

8月8日 日曜日 曇/雨

前方部南側周縁、後円部の掘り下げ統行。

8月1日 日曜日 晴

6、7、10号住居跡写真撮影、1、3、5、6号住居跡、掘立式建物跡H-1、H-2の実測に取りかかる。

午後4時より現地説明会を行う。

8月2日 月曜日 晴

休み

市文化財調査委員小林氏、土浦二高郷土史クラブ生徒4名来訪。

8月3日 火曜日 晴

1、3、5、6号住居跡、掘立式建物跡H-1、H-2の実測終了。4、9号住居跡の調査継続。

8月4日 水曜日 曇/雨

4、8号住居跡完掘。清掃の後写真撮影を行う。

11号住居跡に取りかかる。

いばらぎ新聞社笠間支局長荒川氏来訪。

8月5日 木曜日 曇~雨

古墳班の協力を得て造構の検出を行う。13~25号住居跡を確認。16・19・20・21・22号住居跡の調査に取りかかる。18号住居跡北西より鉄製紡錘車出土。

8月6日 金曜日 晴

昨日の調査継続。

8月7日 土曜日 晴

9・19・20・21号住居跡完掘、20・21号住居跡の写真撮影を行う。



(8月5日発掘作業撮影)

8月9日 月曜日 晴

後円部の掘り下げを続行しているが、主体部は確認されず。

8月10日 大曜日 晴

後円部掘り下げ続行。部分的に地山まで掘り下げたが主体部は検出されず。前方型を東西に切断。

8月11日 水曜日 晴

西側周溝・北側周溝の掘り下げ続行。前方部においては底土を行わず、地山を削平して整かれている事が判明する。

8月12日 木曜日 晴/曇

各所の上層実測に入る。後円部の堀り下げを続行

8月13日 金曜日 晴

後円部の掘り下げを終了する。主体部は確認されず、すでに盗掘されたのではないかと考えられる。上層実測の継続、地形測量を再開する。

8月14日 土曜日 晴

各所の上層実測の継続。西側くびれ部付近に第16トレンチを設定する。

8月15日 日曜日 晴

西側くびれ部付近の周溝を確認。土層実測をやめて終える。

8月16日 月曜日 晴

地形測量を完了する。

宿舎撤収。

8月8日 月曜日 曇/西

9、19号住居跡の写真撮影を行う。2号住居跡、獨立式建物跡H-3、H-4を確認。16号住居跡完掘。

8月9日 月曜日 晴

17・18・26号住居跡完掘。23・24号住居跡に取りかかる。17号住居跡より瓦輪陶器出土。

茨城県立緑岡高校教諭矢口氏、仙山内各小学校の諸教諭17名来訪。

8月10日 火曜日 晴

2分併用的に取りかかる。獨立式建物跡H-6を確認。午後よりH-1、2、3、4、5、16号住居跡の写真撮影を行う。23号より鉄製ノブ出土。

8月11日 水曜日 晴

2、22号住居跡完掘・獨立式建物跡H-7を確認。昼休み時間を利用して市文化財調査委員小林氏の案内で、市立美術館を見学。

8月12日 木曜日 曙/曇

23・24・25号住居跡完掘。27号住居跡確認。17・22・23・21・25号住居跡写真撮影を行う。

8月13日 金曜日 晴

調査終了区の水系張りを行い実測に取りかかる。

8月14日 土曜日 晴

11、12、13、14、15、27号住居跡の写真撮影。いばらき新聞記者来訪。

8月15日 日曜日 晴



平面図の実測すべて終了。断面図の実測に取りかかる。午後より器材撤収。

NHK、朝日新聞、読売新聞記者來訪。県教委文化財主事西宮氏來訪。

8月16日 月曜日 晴

断面図実測終了。午後より宿舎の収集作業を行う
略報完成。

同夜、笠間市主催による慰労会が行われる。

8月17日 火曜日 晴

午前中収集作業を行い、大川、大門、森、水野

長瀬はライトエルフ・ニニキャブにて、近藤、青木
北原、真玉、高橋、村松、祐島、今川、堀、山崎は
電車にて千葉県銚子町龍角寺に向う。松井、菊地、細
谷は福岡。

有吉、大島、宮下は現地に残留し、午後より実測
図の点検を行うと同時に、掘立式建物跡H-7の調
査を行う。

8月18日 水曜日 曇

昨日の作業继续。掘立式建物跡H-7の写真撮影
を行う。調査すべて終了。

Fig. 100 墨書土器出土一覧図

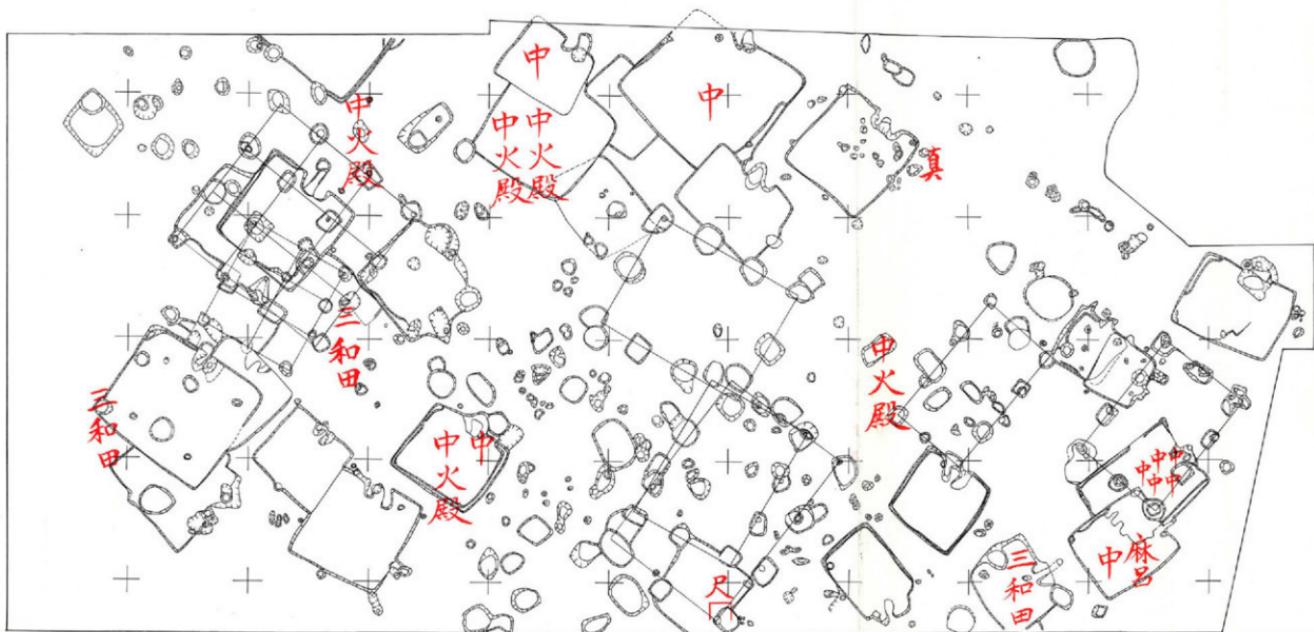


図 版



土器（土師器）

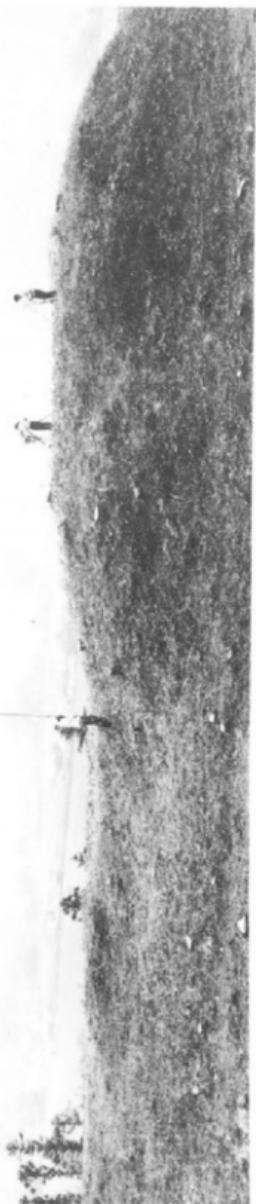
第一図版 うら山古墳・石井台集落跡空中写真



第2図版

(上) 発掘前のうら山古墳

(下) 発掘中のうら山古墳



第3図版 うら山古墳の空中写真（発掘終了後）



上 墳丘全景（西側より写す）

下 墳丘全景（東南方向より写す）

(上) うら山古墳全景 (下) 前方部から後円丘を見る



上 後門部東側周辺（南方向より写す）

下 東側周辺（くびれ部）（東より写す）

第5図版

(上) 後円部東側の周溝



(下) くびれ部東側周溝



上 東側周辺（北より写す）

下 東側周辺（北方より写す）

(上) 東側周溝



(下) 東側周溝



上 後円部東側周溝断面（南より写す）

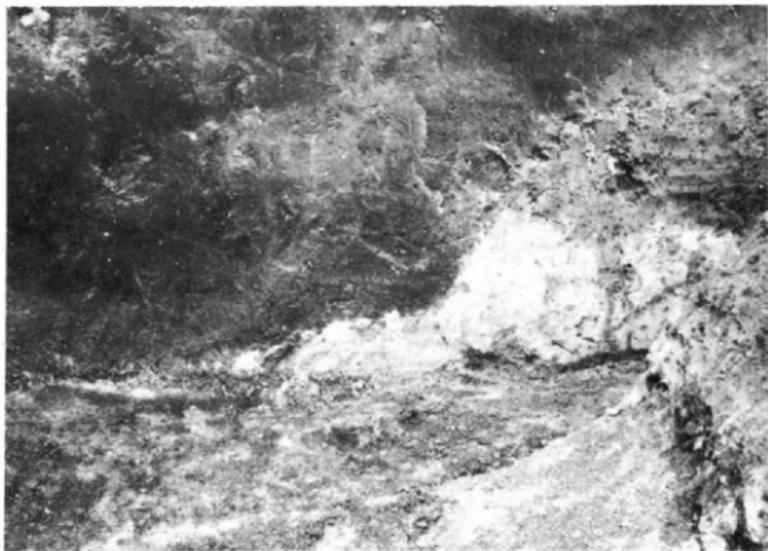
下 後円部東側周溝断面近えい

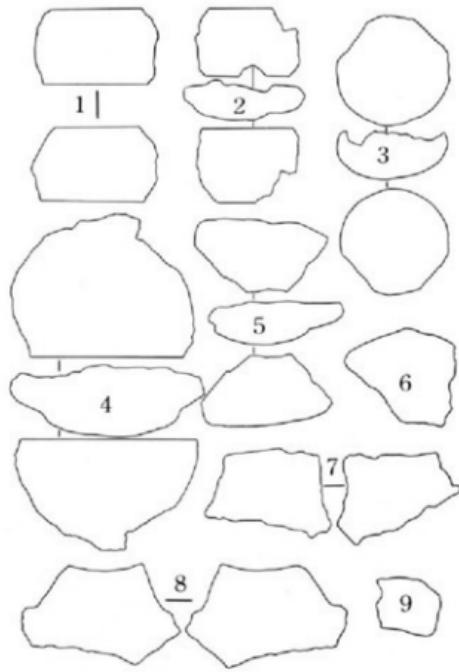


(上) 後円部東側の周溝断面

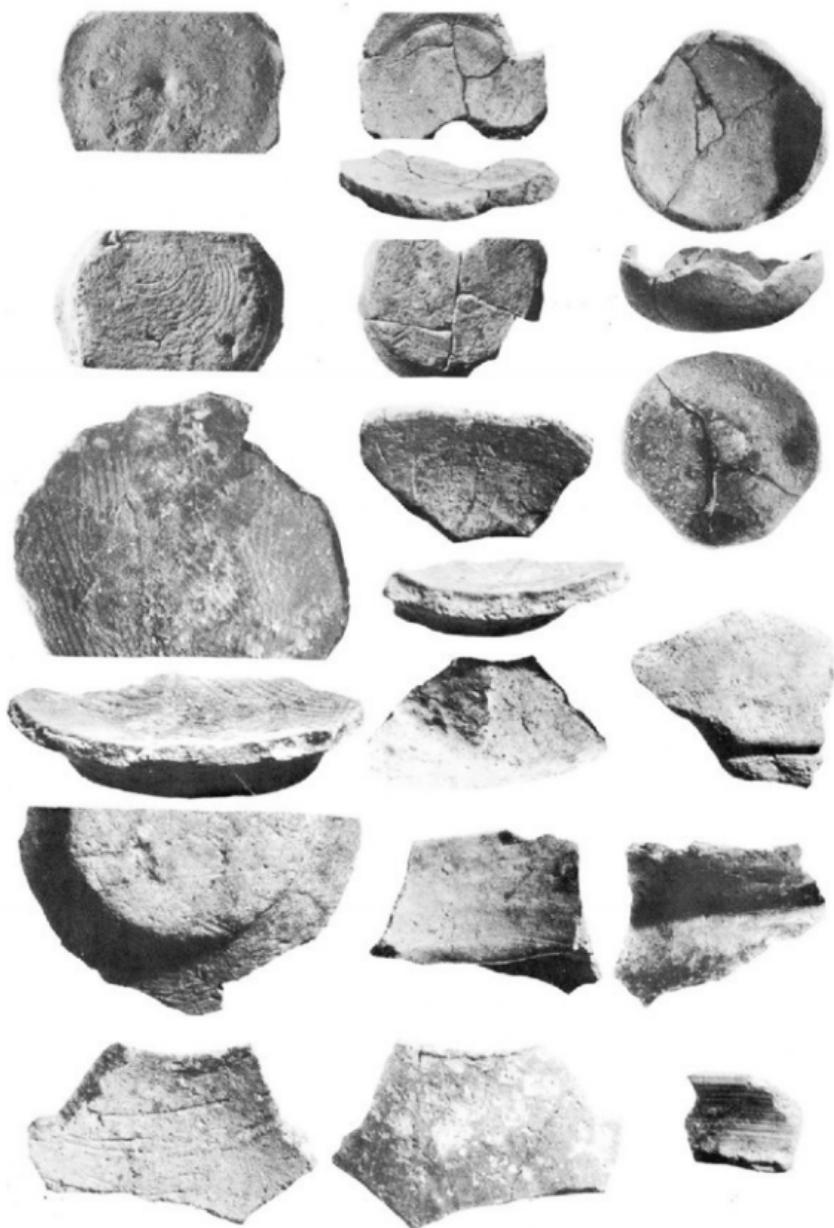


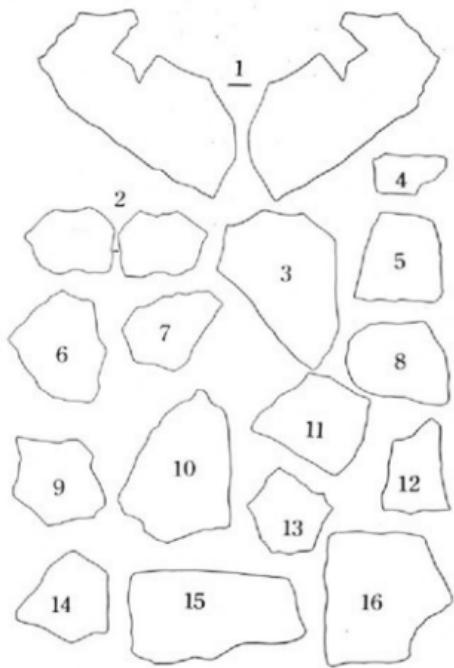
(下) 同上右側部分拡大



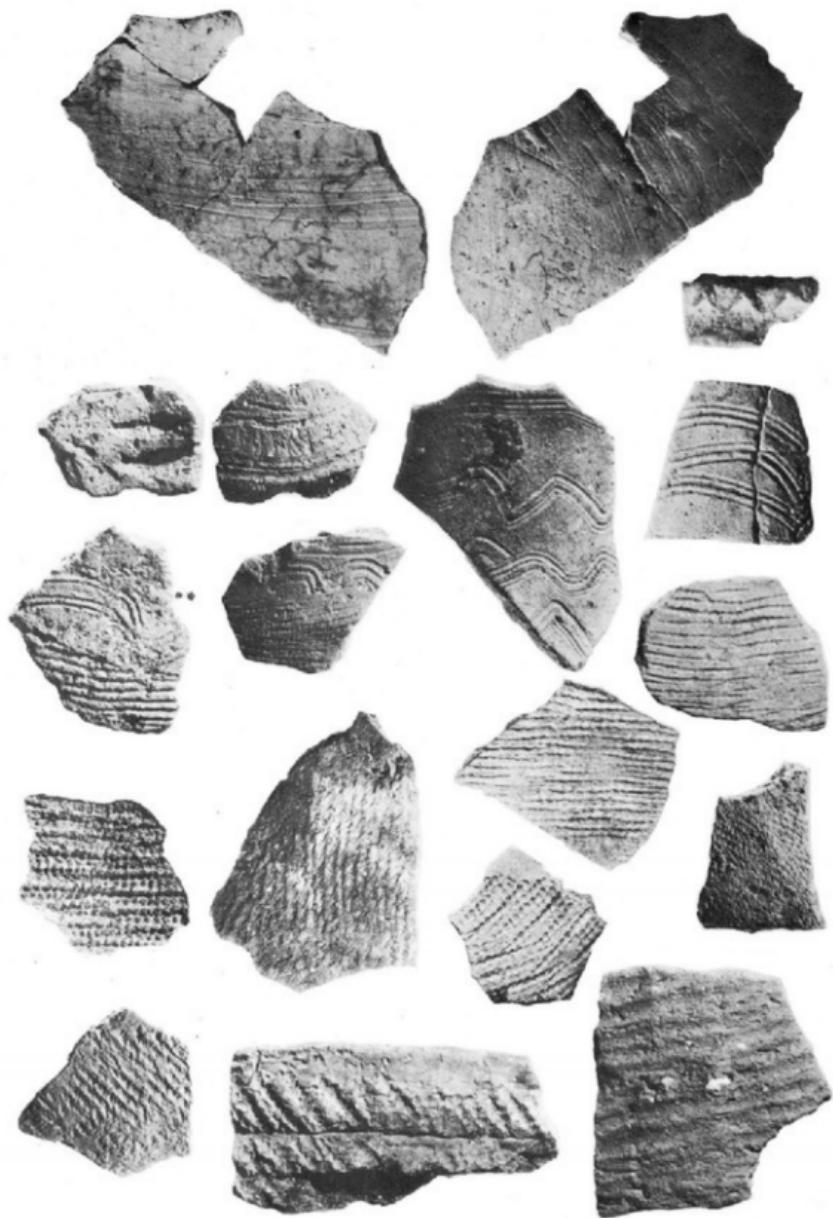


第8図版 うら山古墳封土中の土器片





第9図版 うら山古墳封土中の土器片

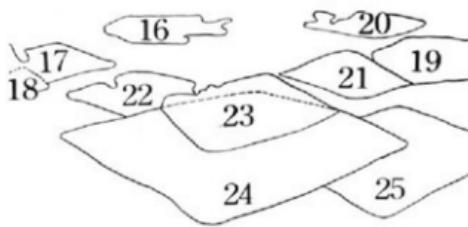


第10図版 石井台集落跡空中写真



上 遺構全景（東方よりみる）

下 南西方向よりみる



(上) 石井台集落跡全景

(下) 同上

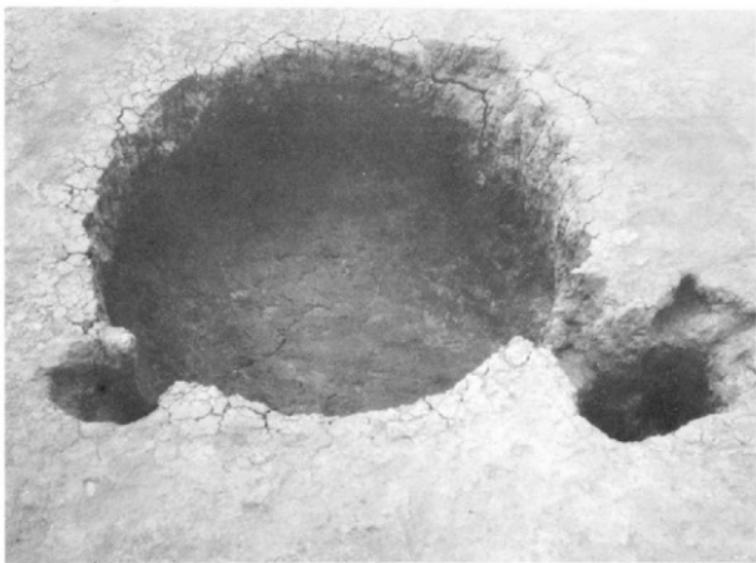


上 繩文期土塙（北方よりみる）

下 1号住居跡（南方よりみる）

(上) 植文期土塙

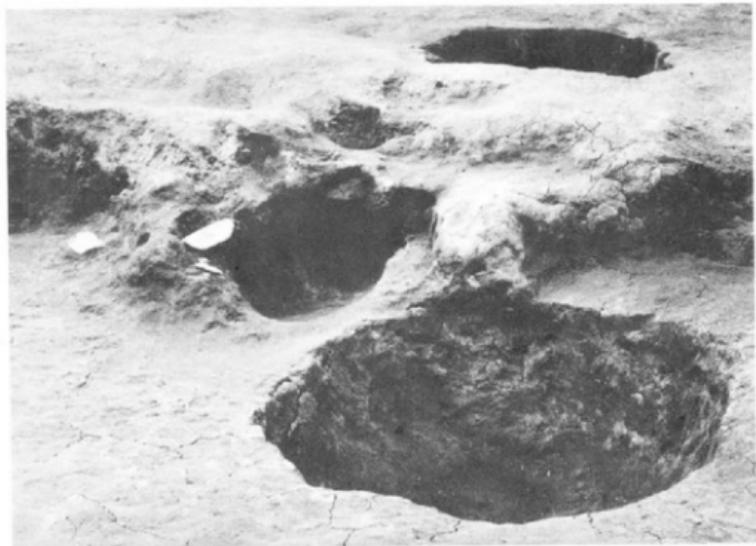
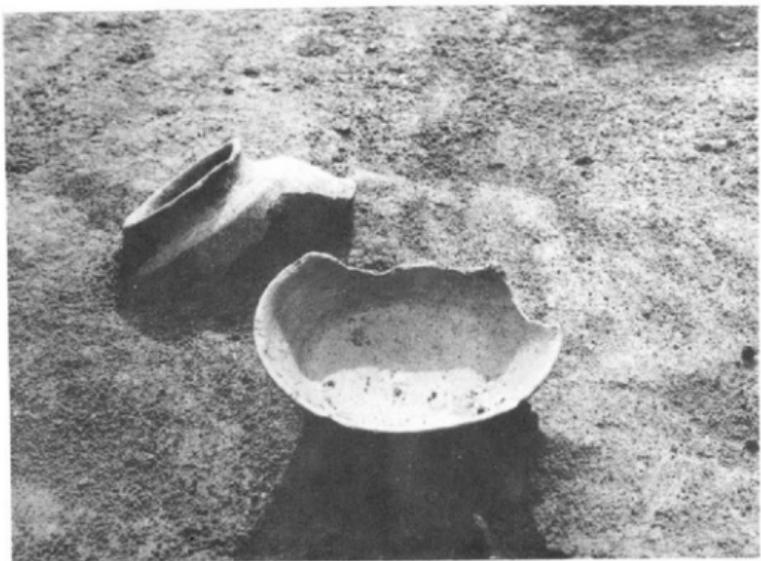
(下) 1号跡



上 1号住居跡外北東壁上ローム上面出土の土器での
「中」墨書き器出土状況
下 1号カマド

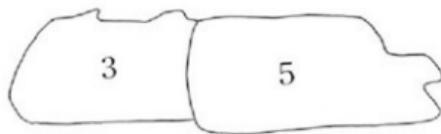
(上) 一号跡外北東のローム上面遺存の土器

(下) 一号跡カマド



上 2号住居跡（南方よりみる）

下 3、5号住居跡（南方よりみる）

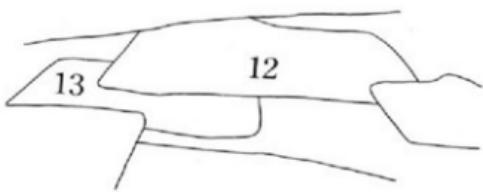


(上) 2号跡

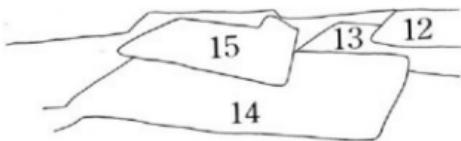
(下) 3・5号跡



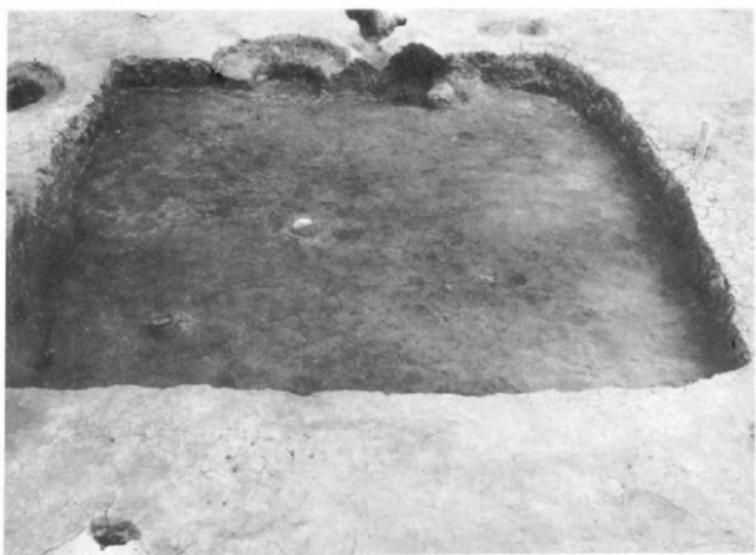
上 4号住居跡（南方よりみる）



下 4号住居跡内遺物出土状況



(上) 4号跡 (下) 4号跡内の遺物出土状態



上 6号住居跡（南西方向よりみる）

下 6号住居跡カマド

(上) 6号跡

(下) 6号跡カマド

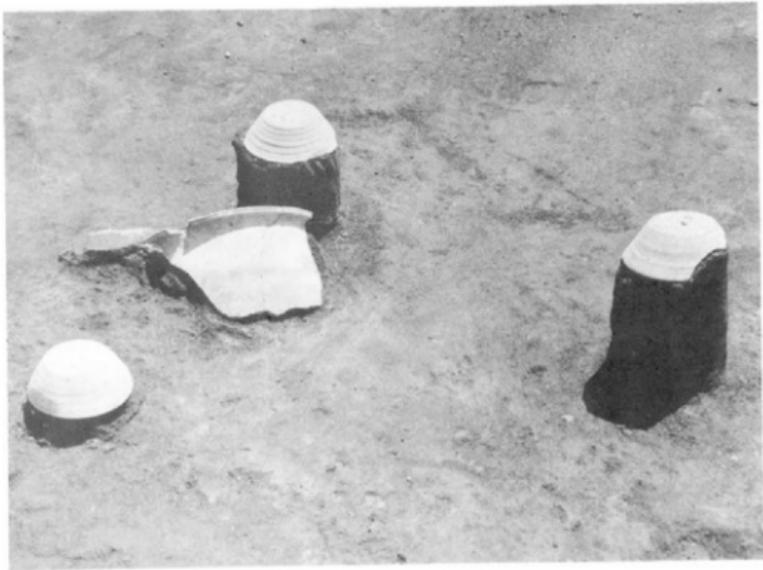


上 7号住居跡（南方より）

下 7号住居跡 遺物出土状態（北西方向よりみる）

(上) 7号跡

(下) 7号跡の遺物出土状態



上 8号住居跡 西方より

下 8号カマド

(上) 8号跡

(下) 8号跡カマド



上 9号住居跡を壊している、高床式建物跡
T-IVのNO9掘り方（ローム層上面）より出土
下 9号住居跡（南方より）

(上) 鉄製鎌

(下) 9号跡



上 10号住居跡（南方よりみる）

下 11号住居跡（南方よりみる）

(上)

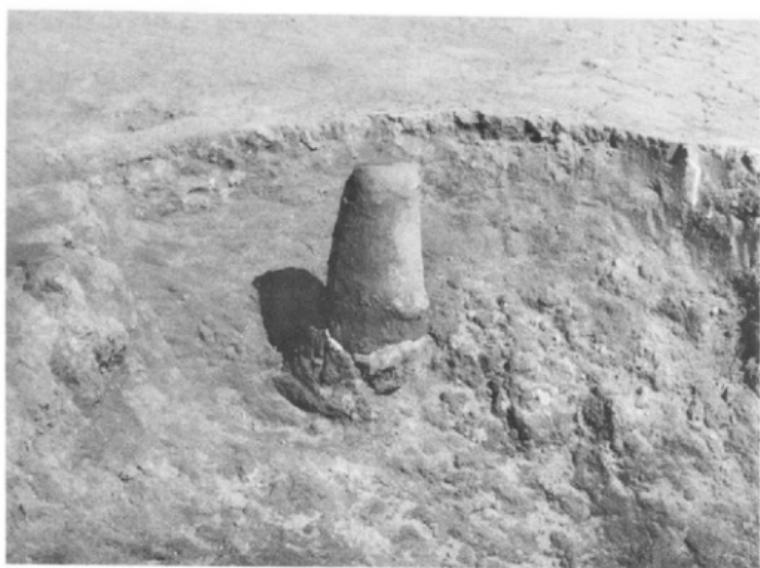
10号跡

(下) 11号跡



上 11号住居跡 東壁カマド内における支脚
下 11号カマド

(上) II号跡東壁のカマド内に遺る土製支脚



(下) II号北壁のカマド



上 12-13住居跡（南方よりみる）

下 14-15号住居跡（南東方向よりみる）

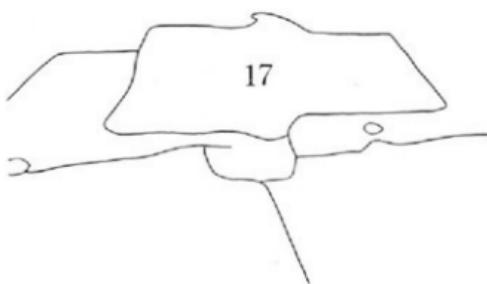
(上) 12・13号跡

(下) 13・14・15号跡



上 16号住居跡（西方よりみる）

下 17号住居跡（南方よりみる）

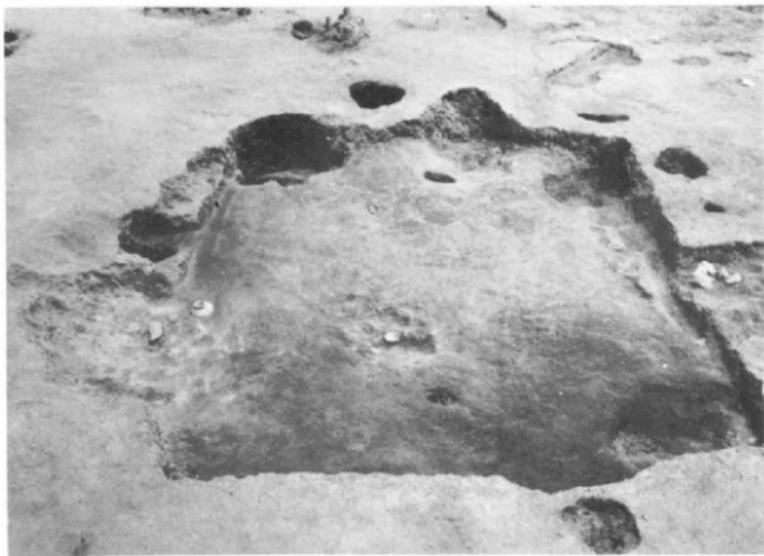


(上)

16号跡

(下)

17号跡



上 17号カマド

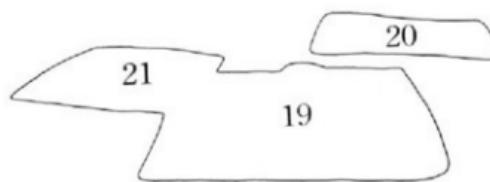
下 掘立式建物跡T-VIの掘方NO5の東方約50cm
ローム土上約15cmの黒色中より出土

(上) 17号跡カマド

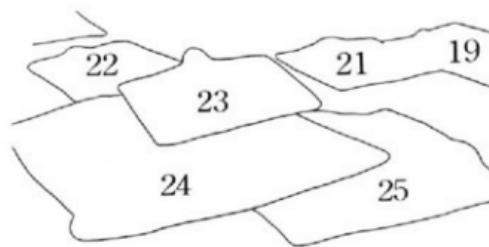
(下) 鉄製紡錘車



上 19・20・21号住居跡（南方よりみる）



下 21・22・23・24・25号住居跡
(南西方向よりみる)



(上)

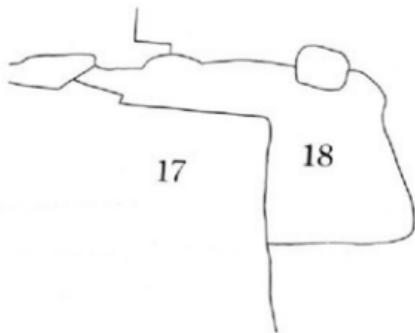
19 ·
20 ·
21号跡

(下)

21 ·
22 ·
23 ·
24 ·
25号跡



上 18号住居跡（北方よりみる）



下 19号住居跡（南方よりみる）

(上) 18号跡

(下) 19号跡



上 20号住居跡（南方よりみる）

下 21号住居跡

(上)

20号跡

(下)

21号跡



上 紡錘車 (20号住居跡内)

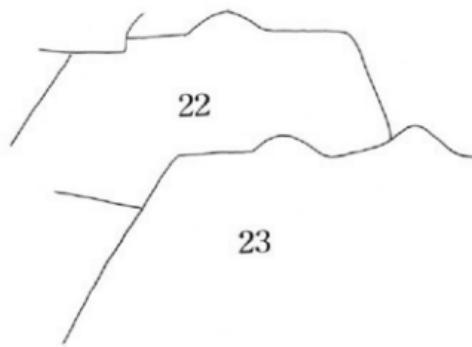
下 21号カマF

(上) 紡錘車

(下) 21号跡カマド



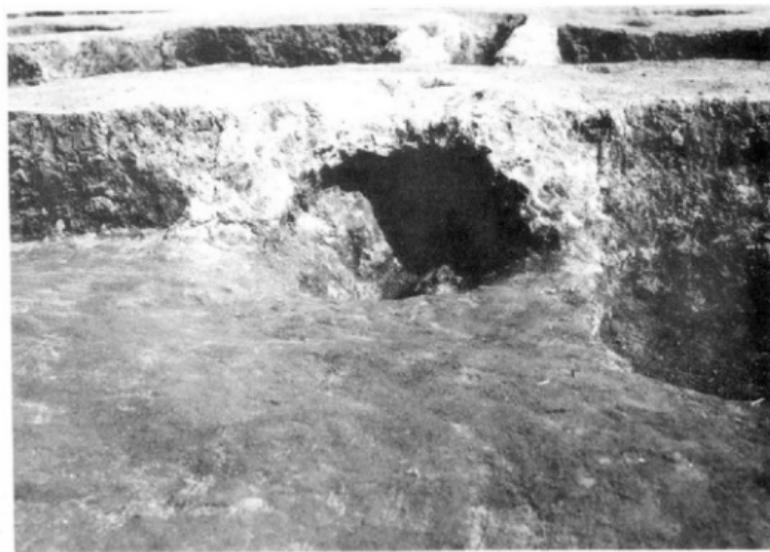
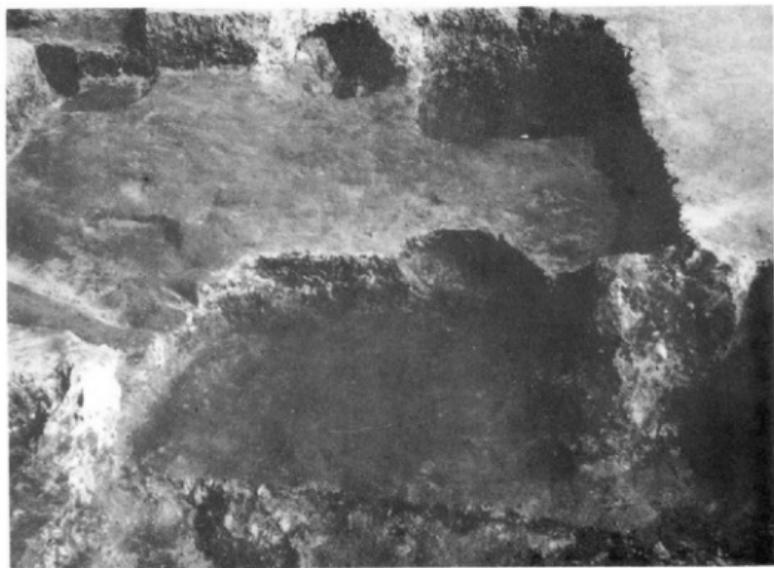
上 22号住居跡（南方よりみる）



下 22号跡カマド

(上) 22号跡

(下) 22号跡カマド



上 23号住居跡（南方よりみる）

下 23号住居跡における遺物出土状況

(上) 23号跡

(下) 23号跡内の遺物出土状態



上 24号住居跡（南方よりみる）
下 24号カマド

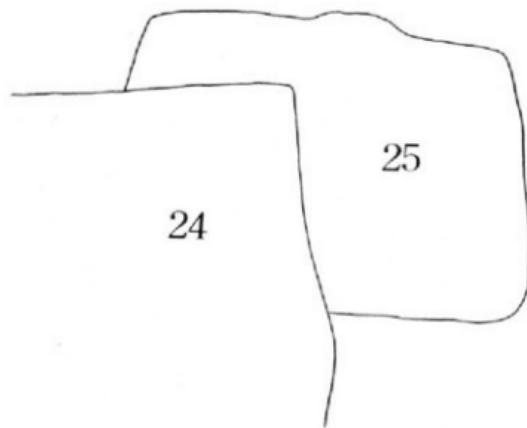
第31図版

(上) 24号跡

(下) 24号跡カマド

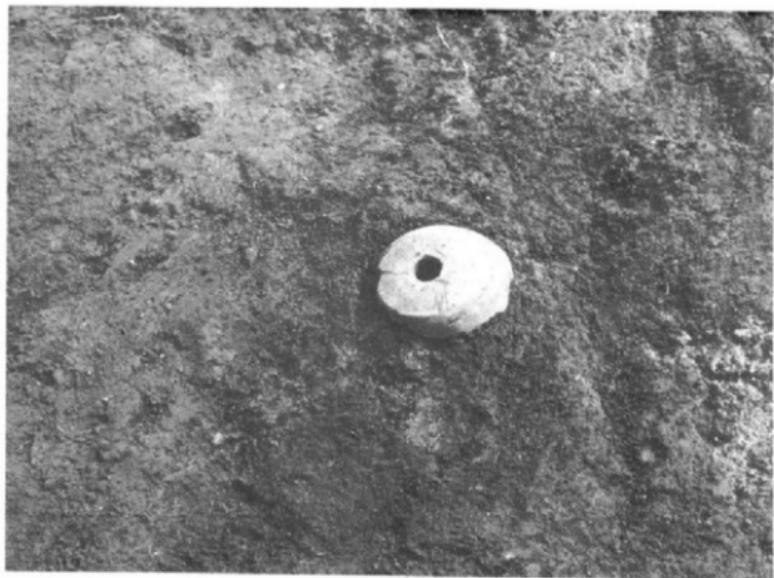


上 25号住居跡 (西方よりみる)



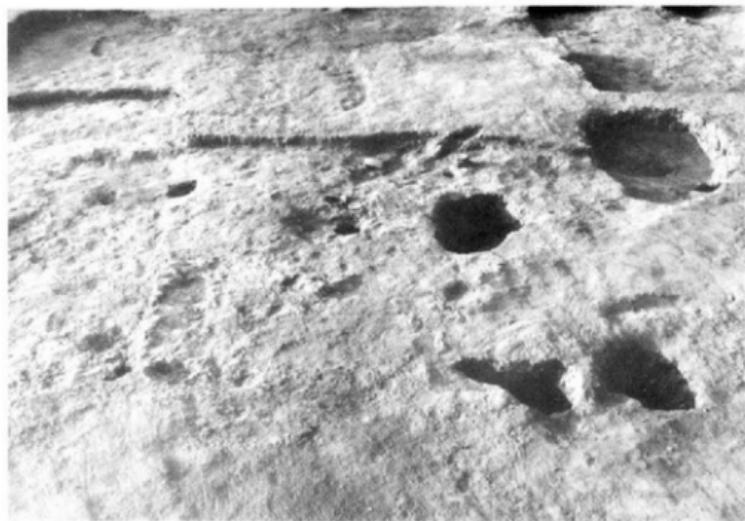
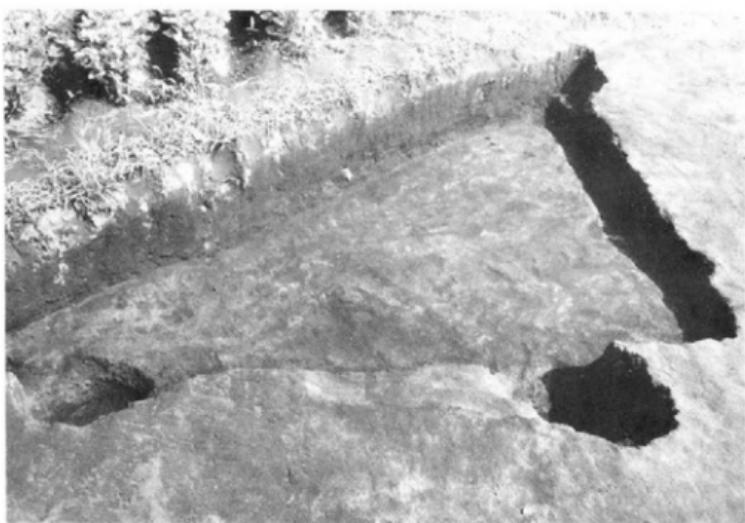
下 25号紡錘車 (25号住居跡内円形土坑)

(上) 25号跡 (下) 紡錘車



上 26号住居跡 (南方よりみる)

下 27号住居跡 (南方よりみる)



上 堀立式建物跡 T-I (北方よりみる)
下 堀立式建物跡 T-I (北西方向よりみる)

(上) 挖立式建物跡 T—I

(下) 挖立式建物跡 T—I

T—I



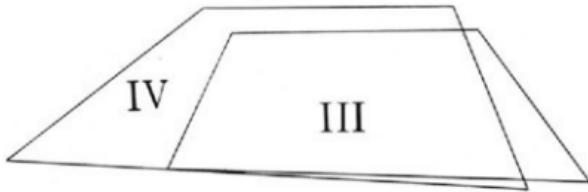
上 堀立式建物跡 T-II (北西方向よりみる)
下 堀立式建物跡 T-II (北方よりみる)

(上) 挖立式建物跡 T—IⅡ

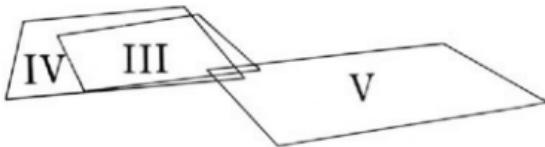
(下) 挖立式建物跡 T—IⅡ



上 堀立式建物跡 T-III・IV (北方よりみる)



下 堀立式建物跡 T-III・IV・V (北よりみる)

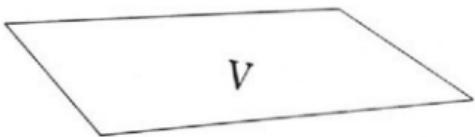


(上) 挖立式建物跡 T—I・III・IV

(下) 挖立式建物跡 T—I・III・V



上 堀立式建物跡 T-V (北東方向よりみる)



下 高床式建物跡 T-VI (東方よりみる)

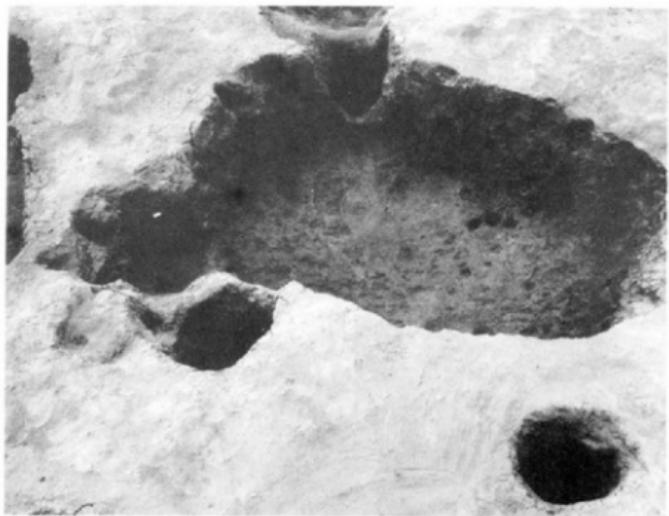
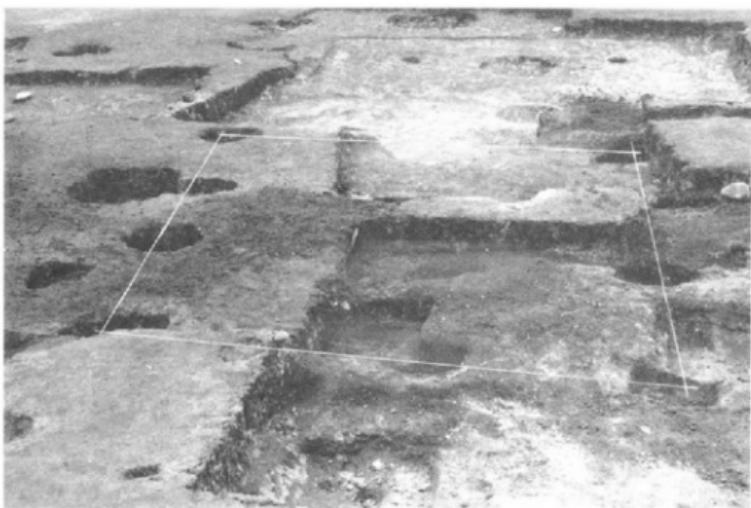
(上) 挖立式建物跡 T—I—V (下) 挖立式建物跡 T—I—VI

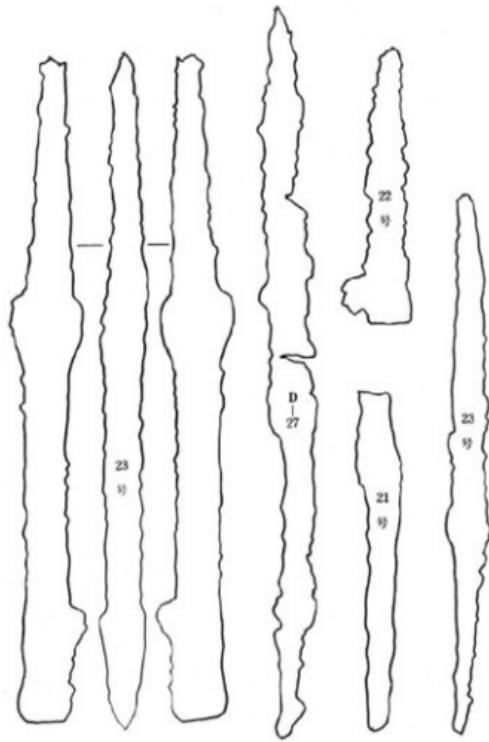


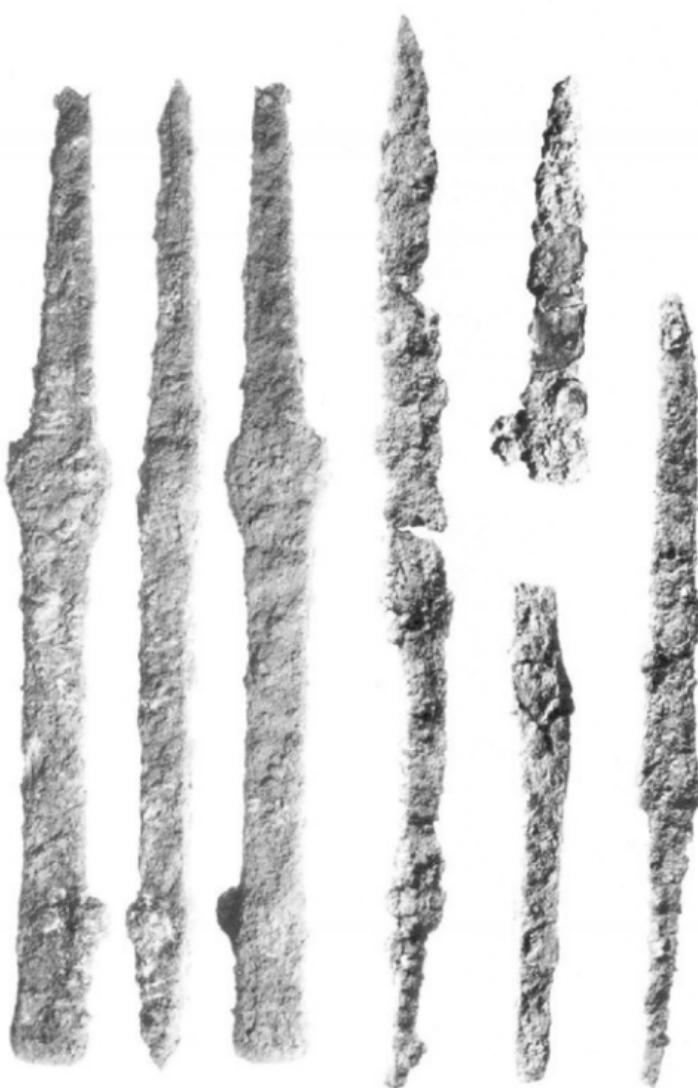
上 堀立式建物跡 T-VII (北方よりみる)

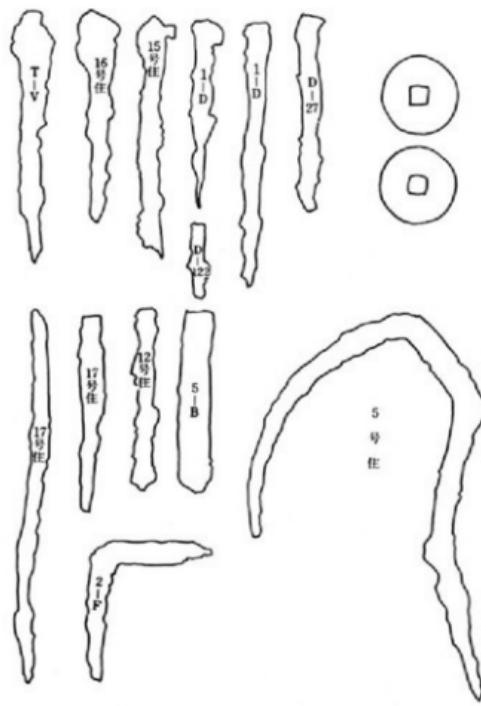
下 平安期土塙 D-I (北側よりみる)

(上) 堀立式建物跡 T—I—VII (下) 平安期土塙 D—I—27



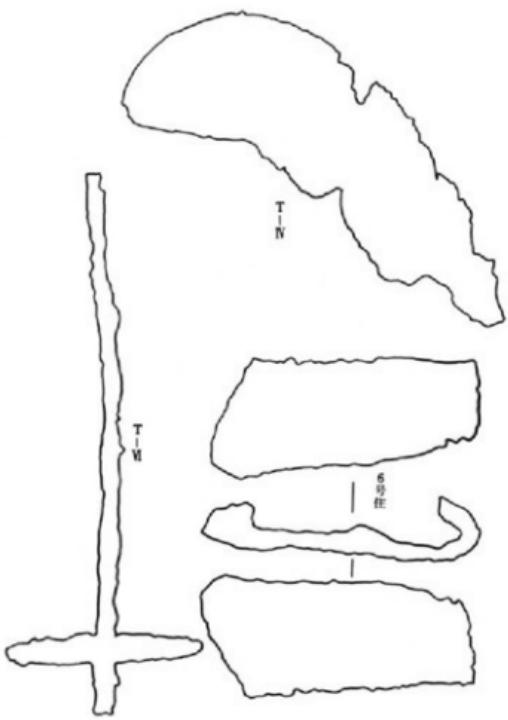




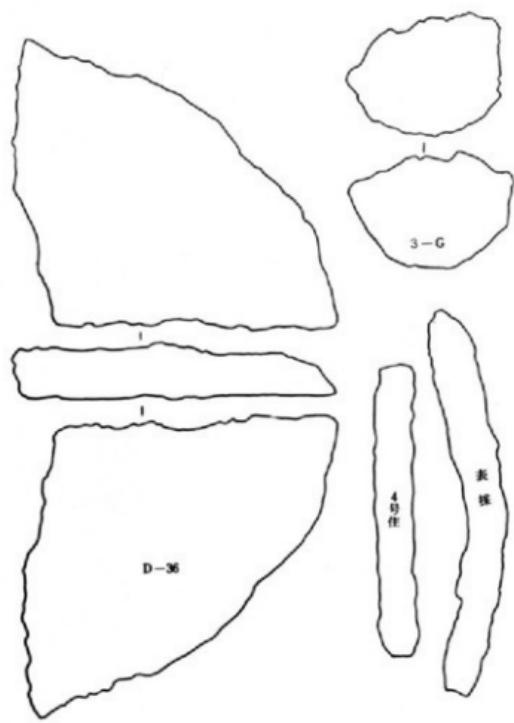


第40図版 釘・カスガイ・明鏡

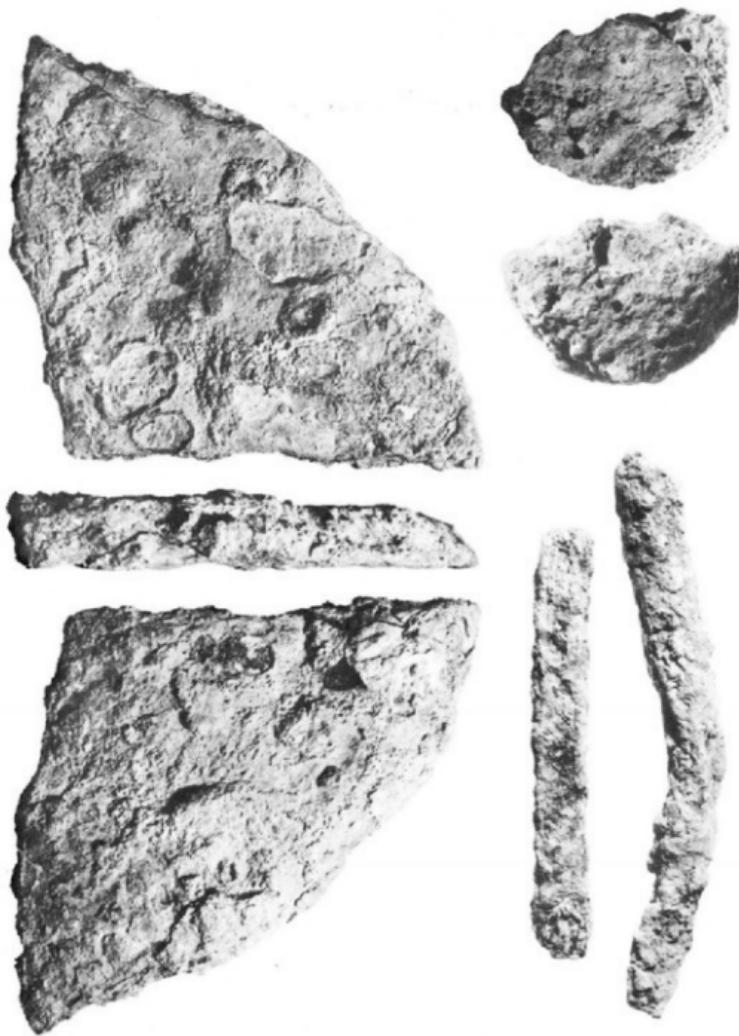


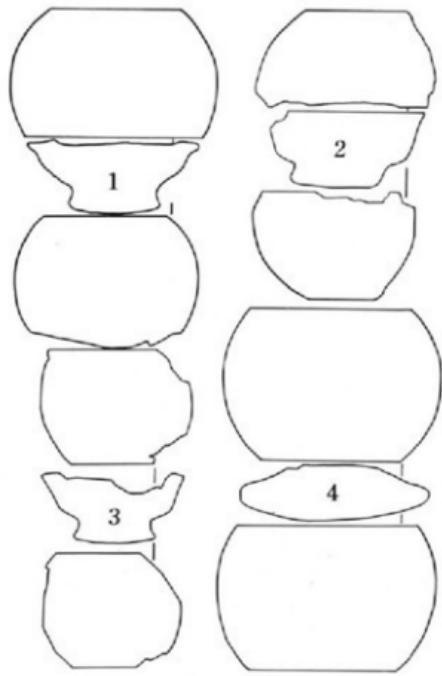




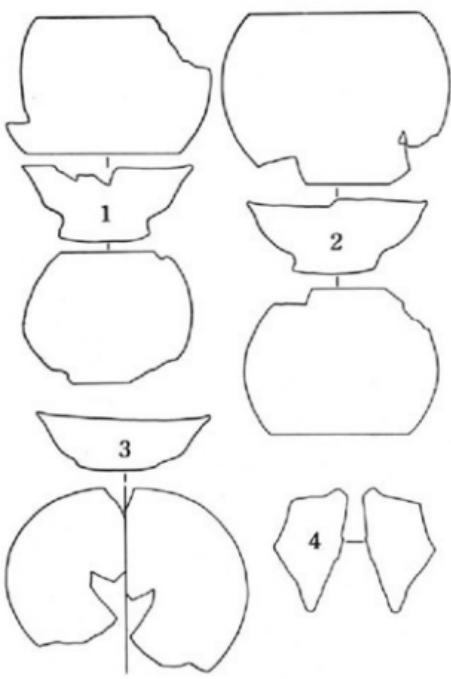


第42図版 不明鉄製品

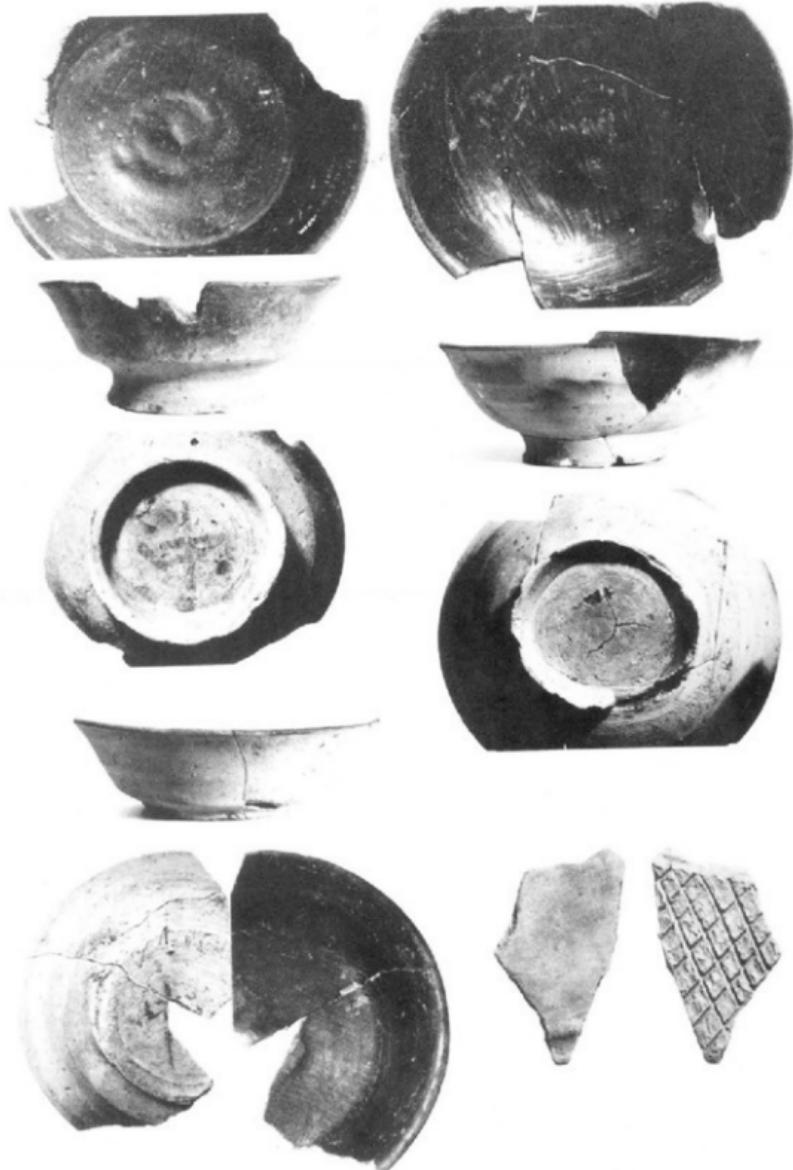


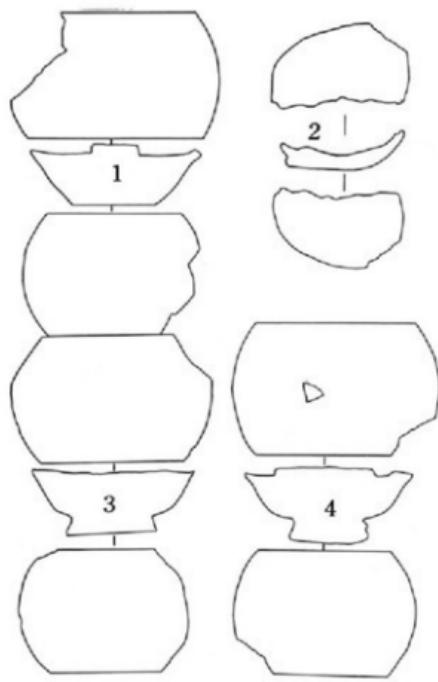


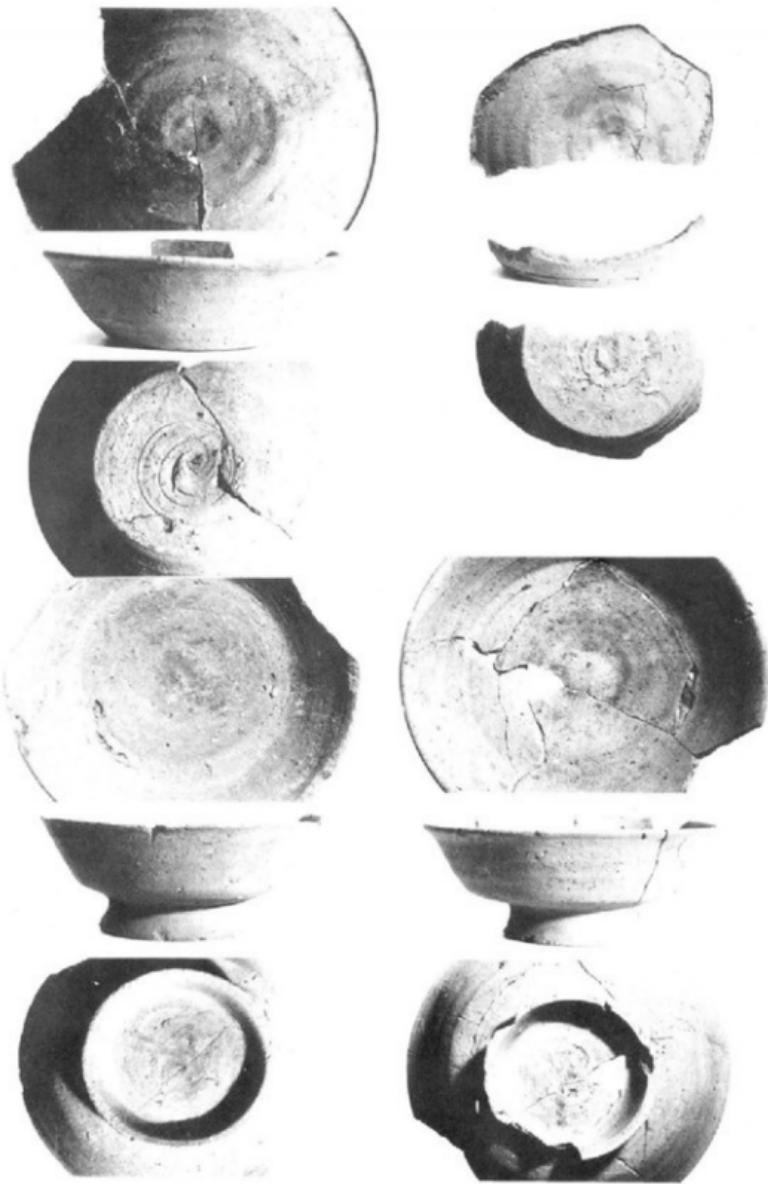


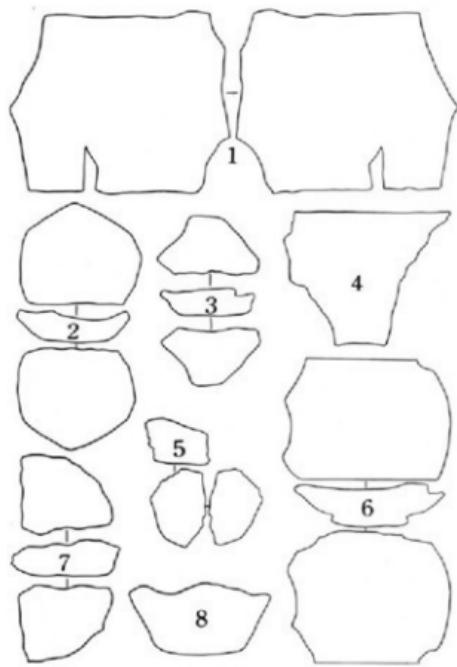


第44圖版 土器類

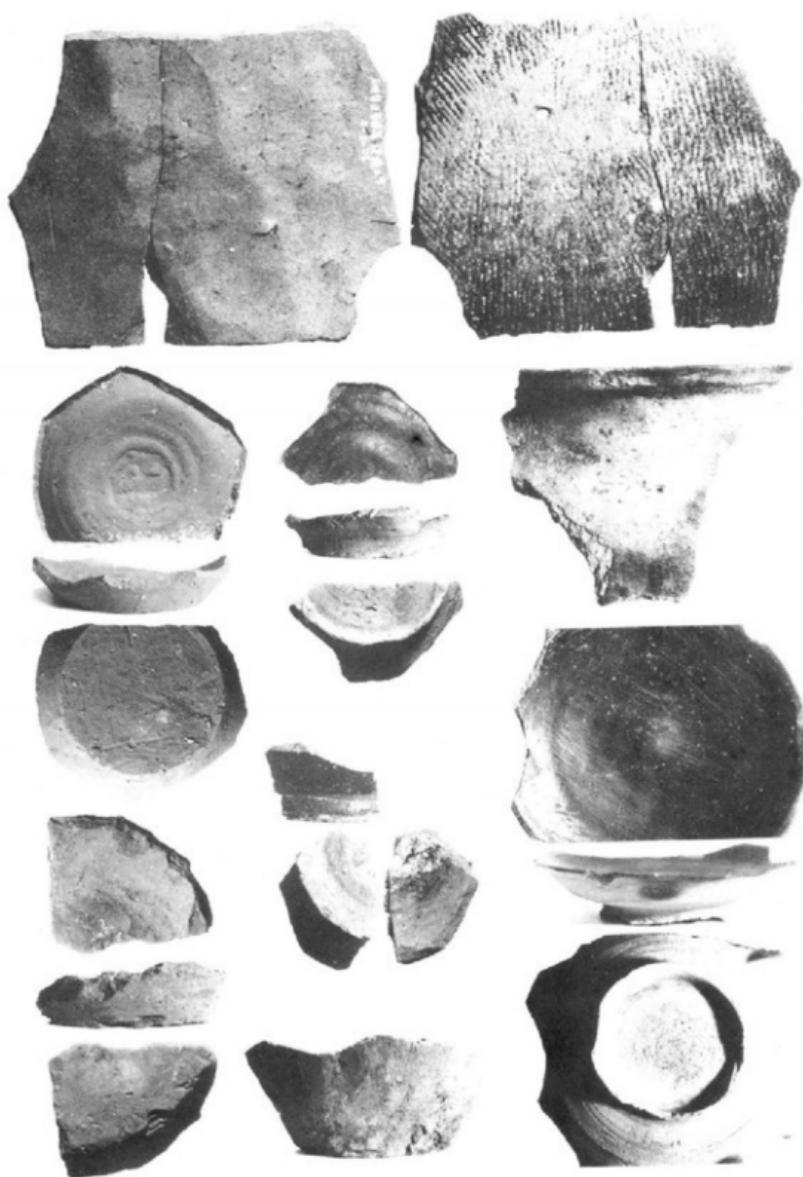


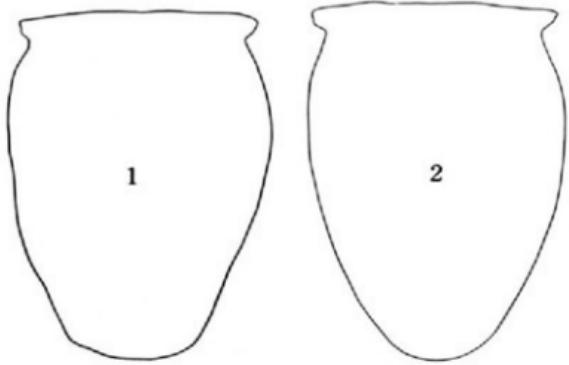


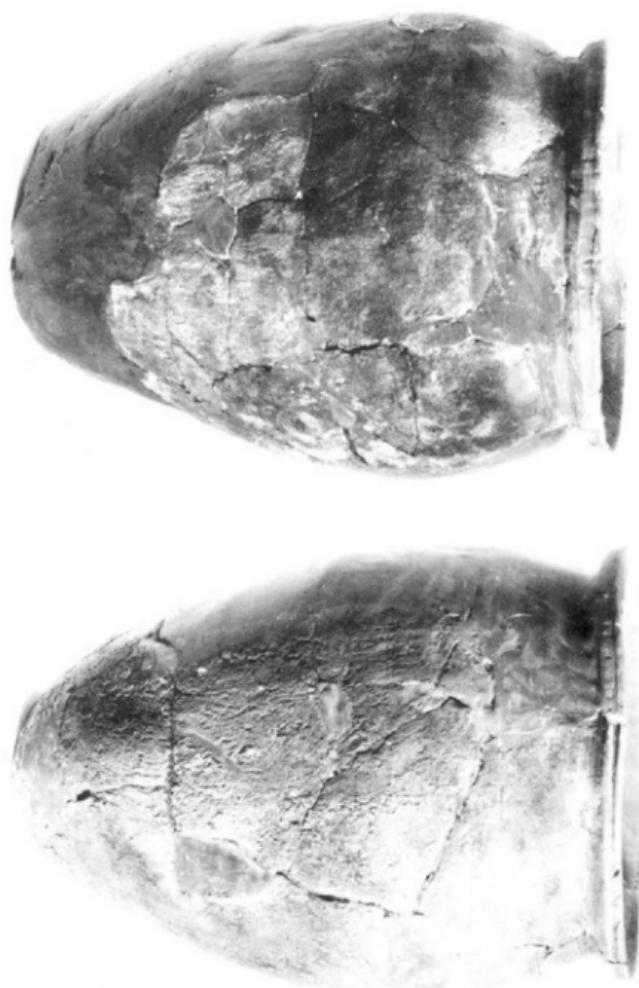


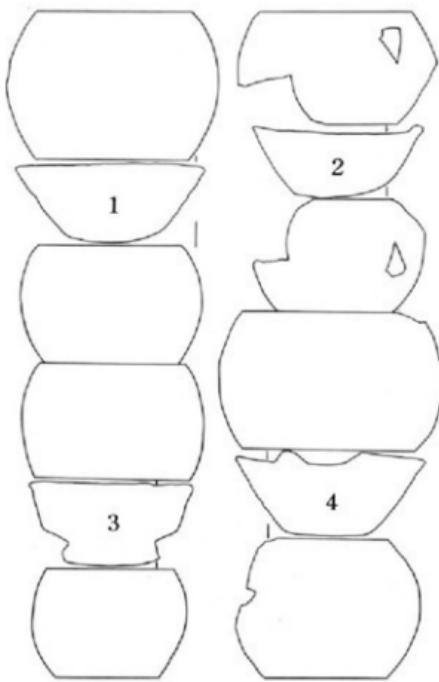


第46図版 土器類

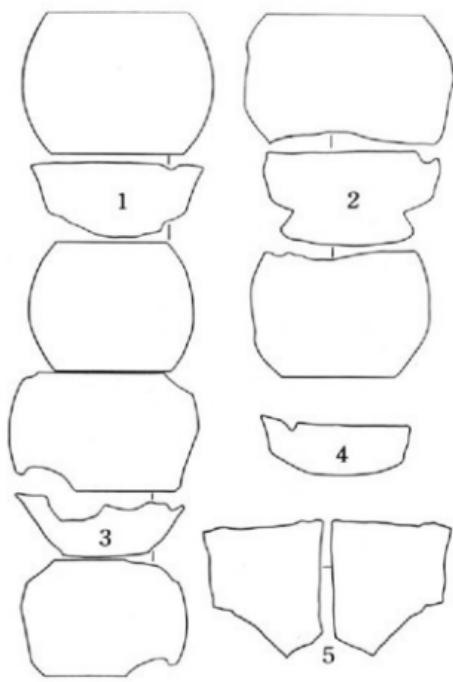




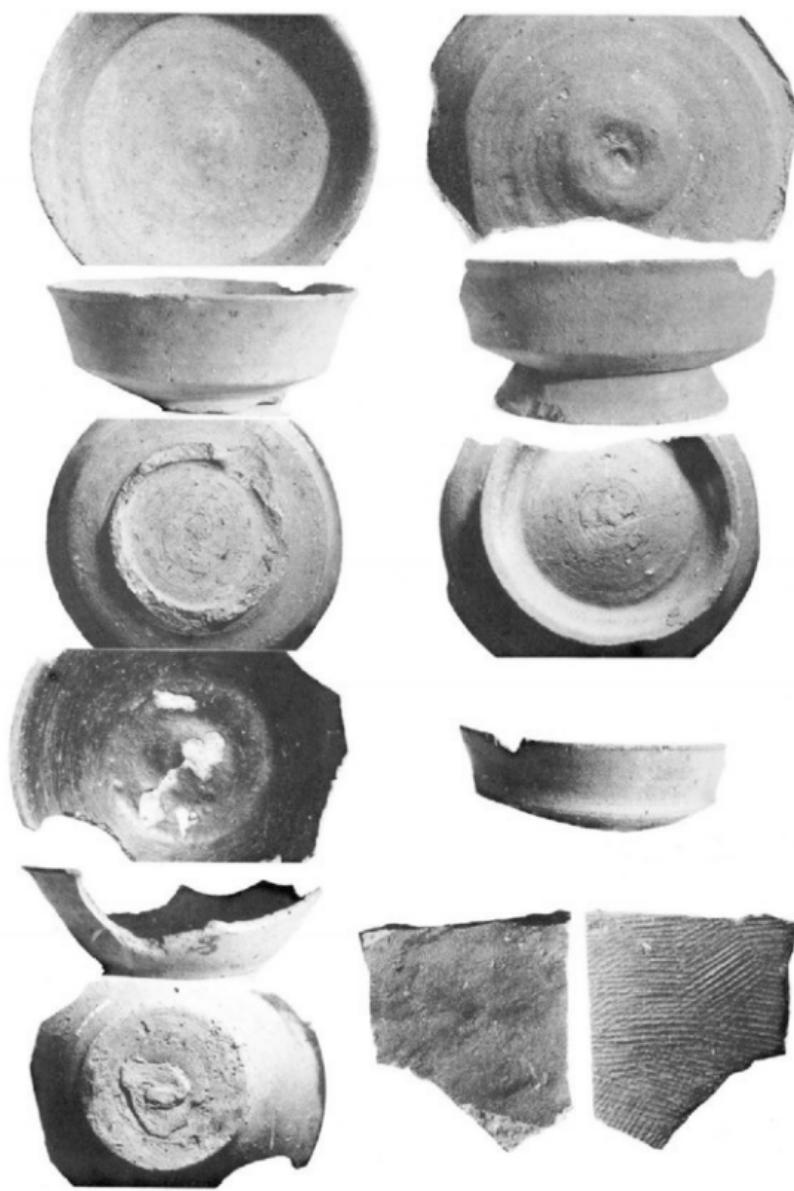


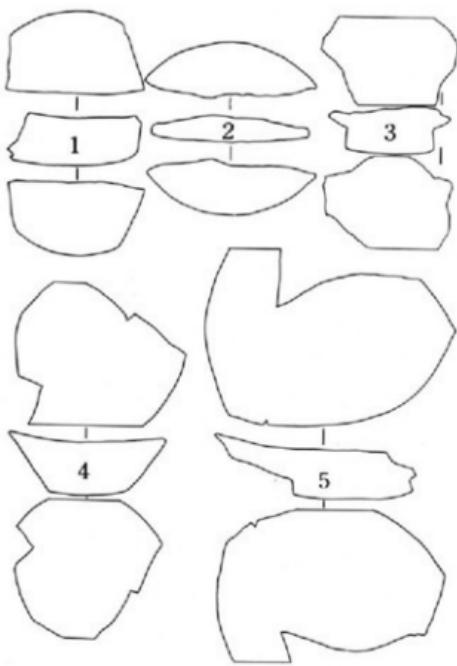




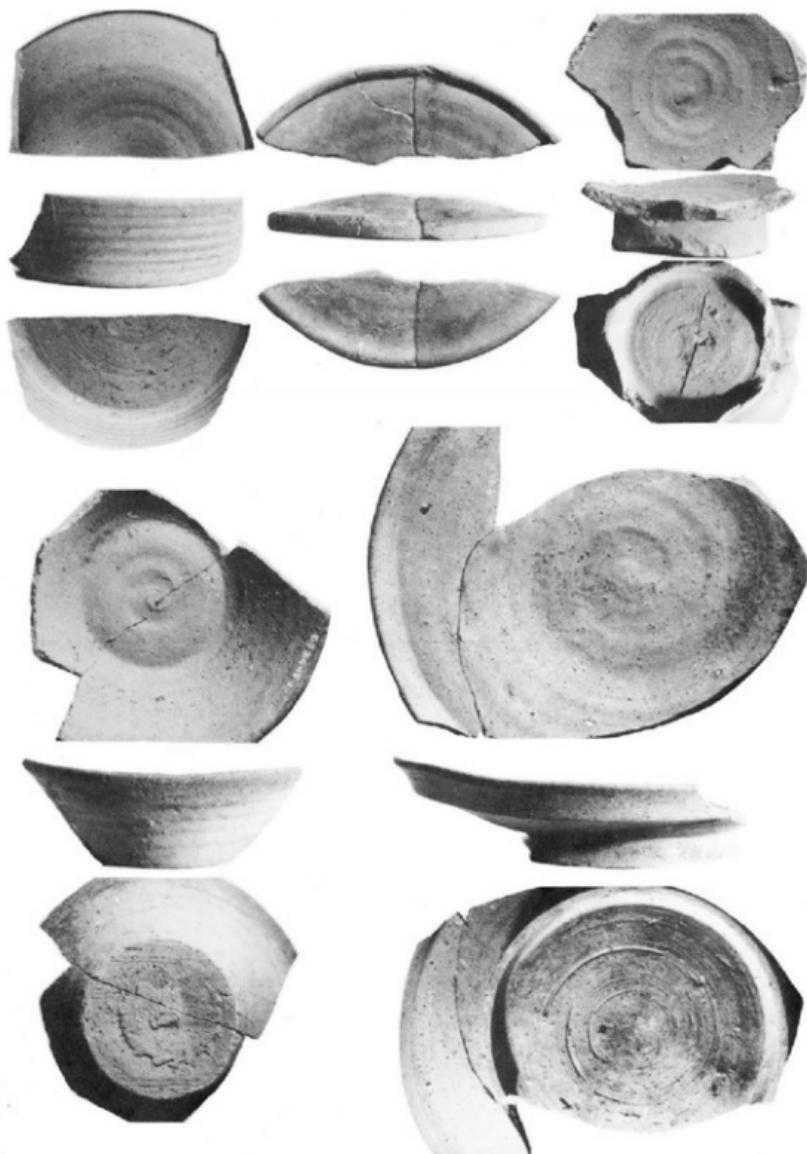


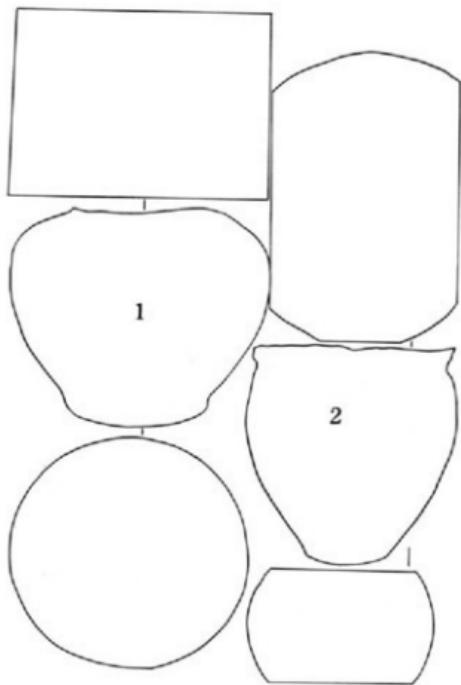
第49圖版 土器類



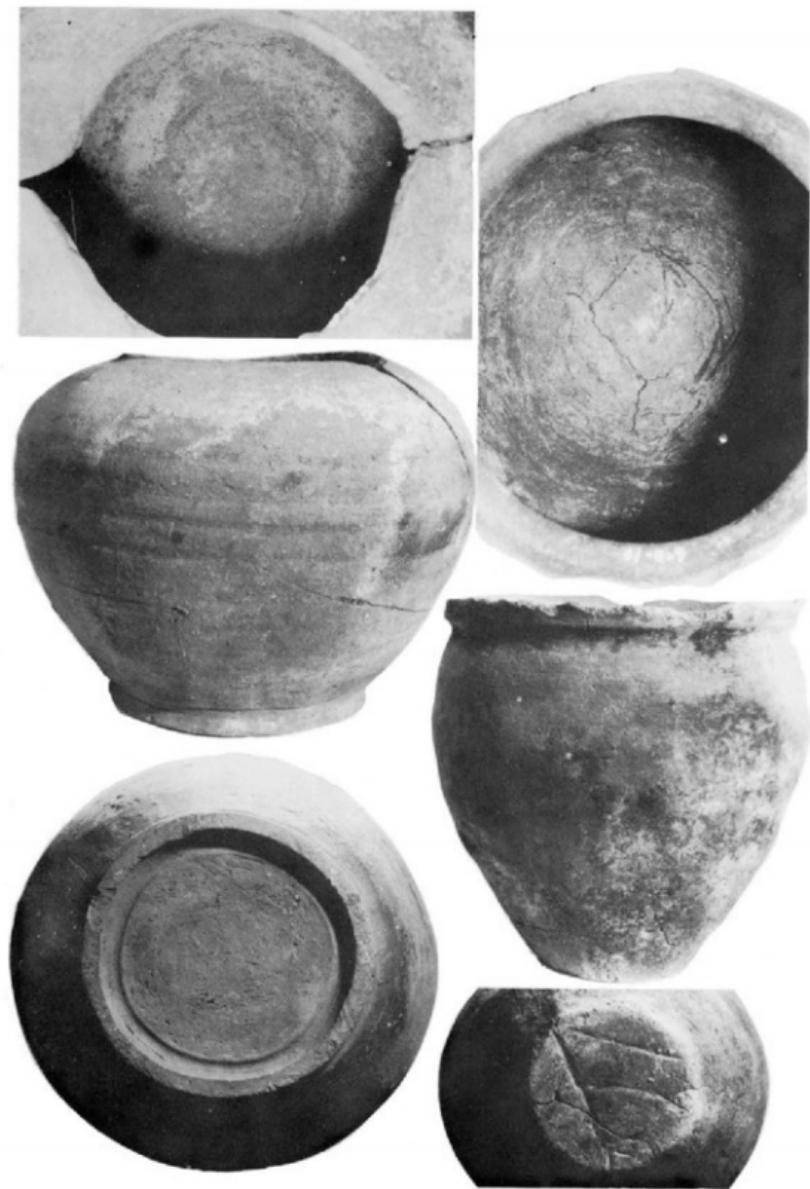


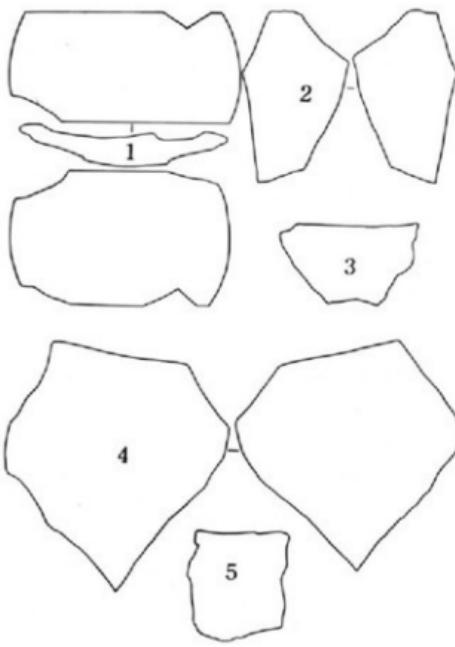
第50図版 土器類



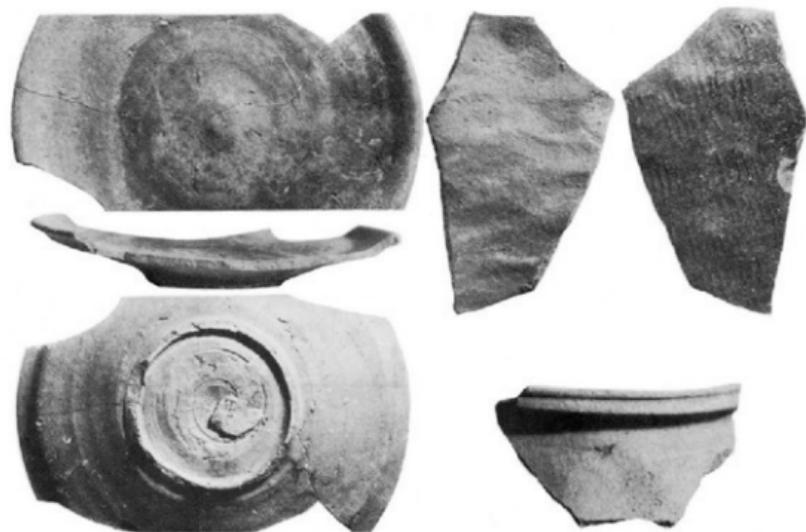


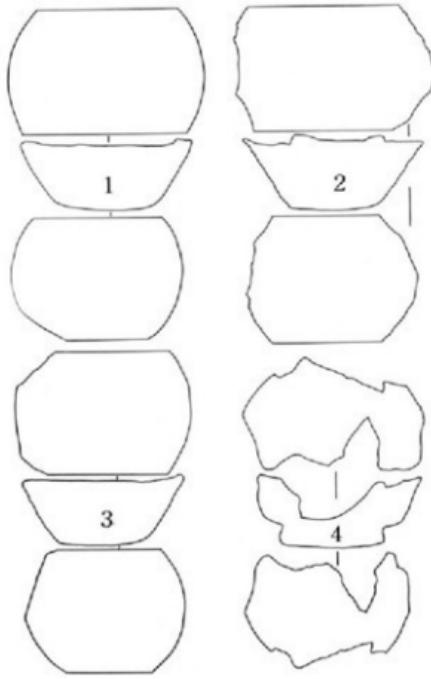
第51図版 土器類





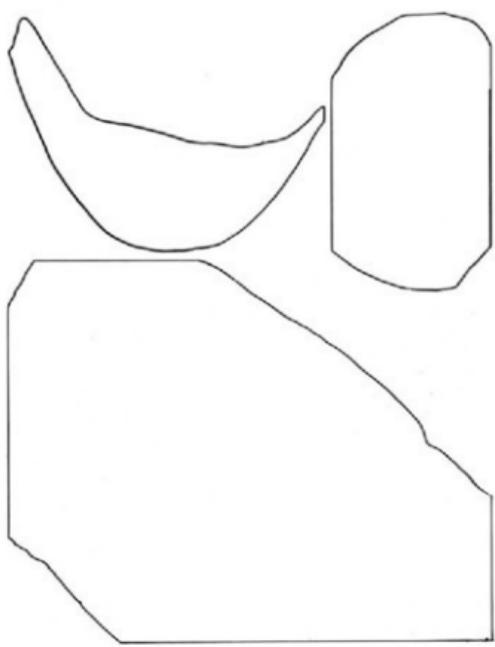
第52圖版 土器類





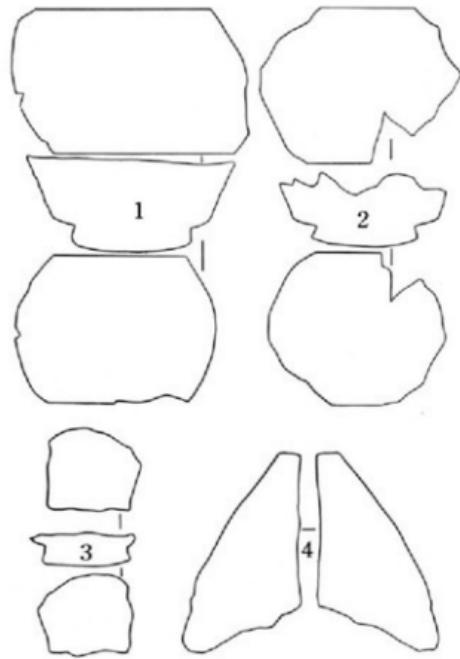
第53図版 土器類



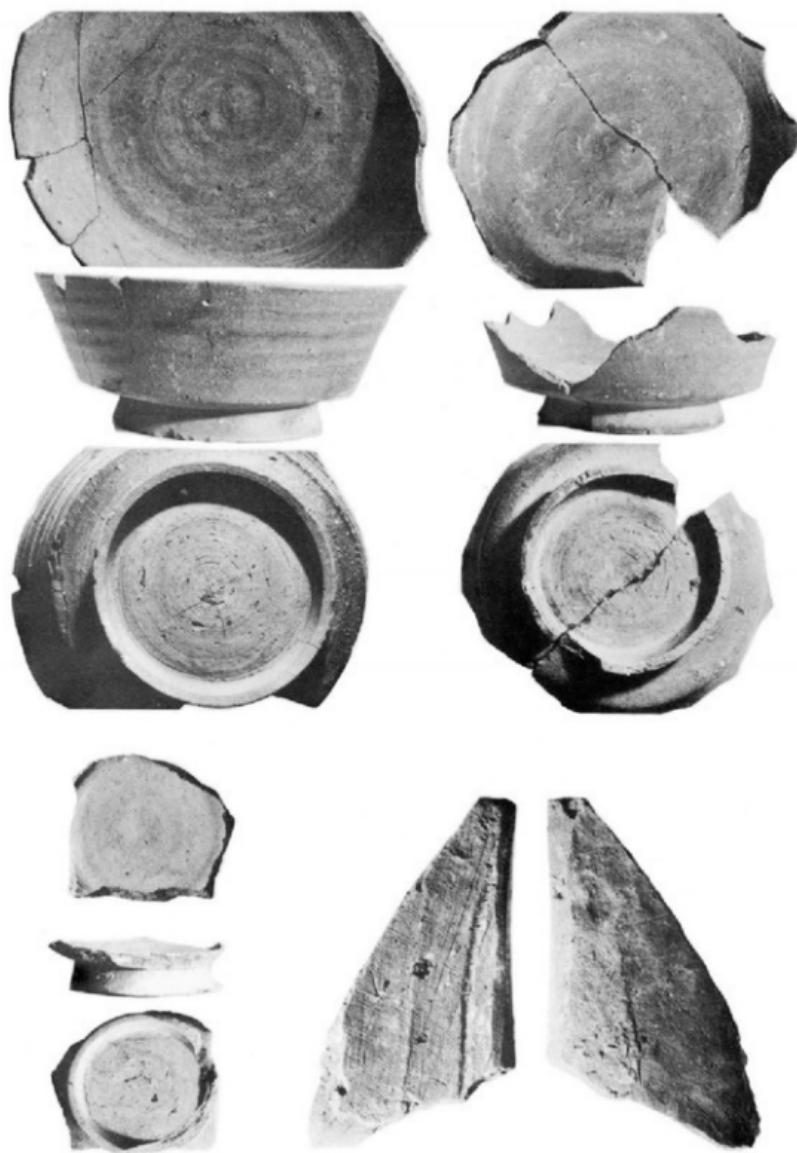


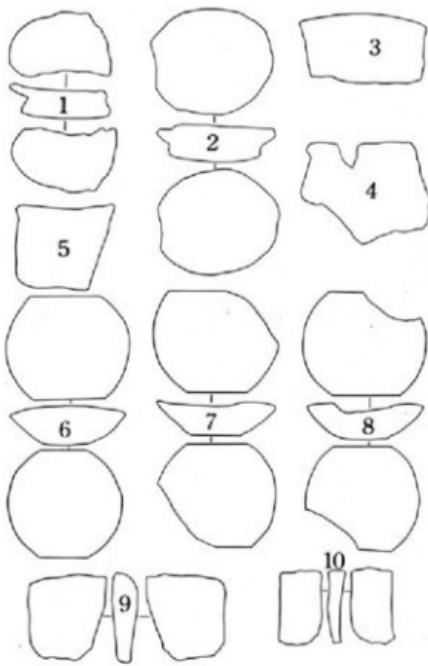
第54圖版 土器類



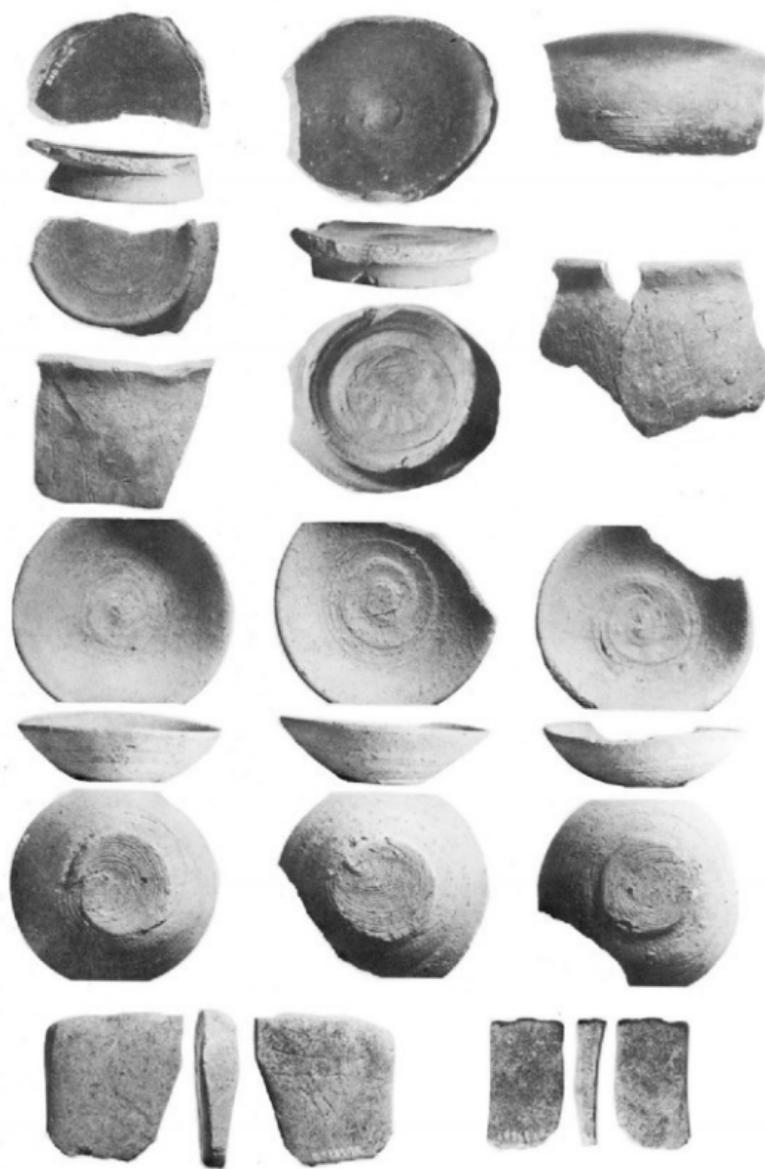


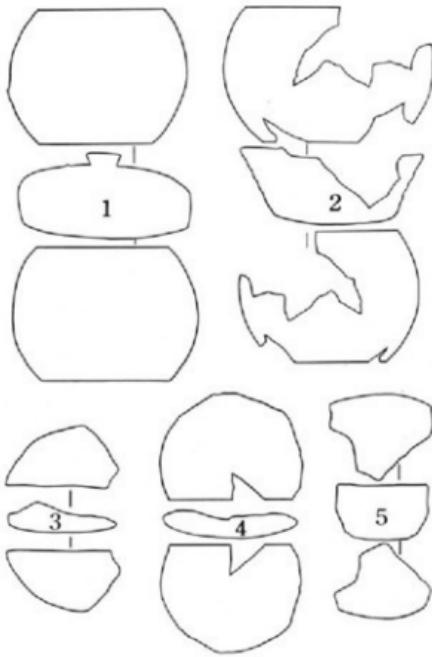
第55図版 土器類



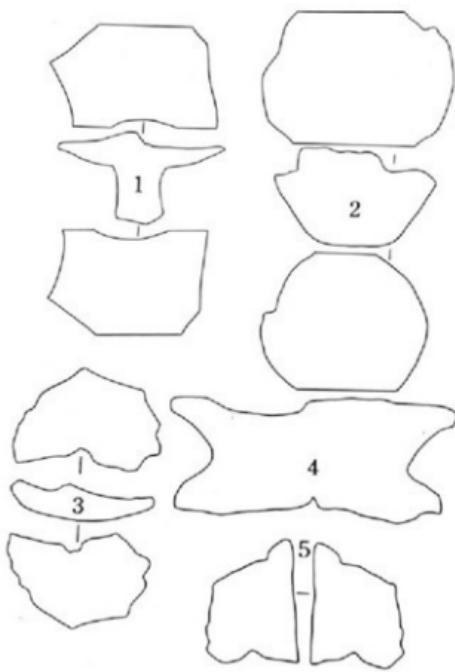


第56図版 土器類

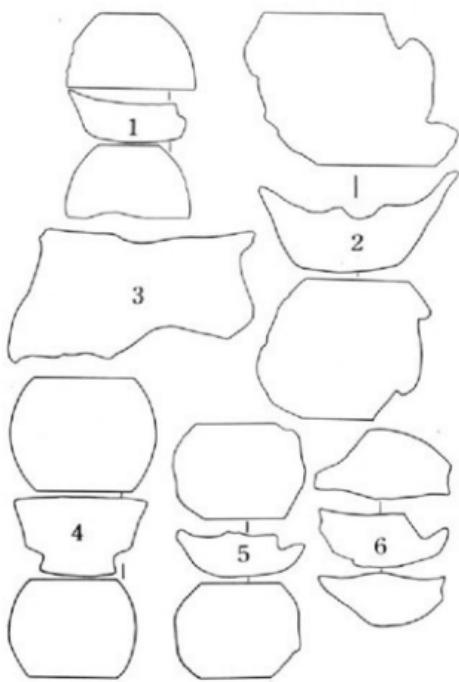




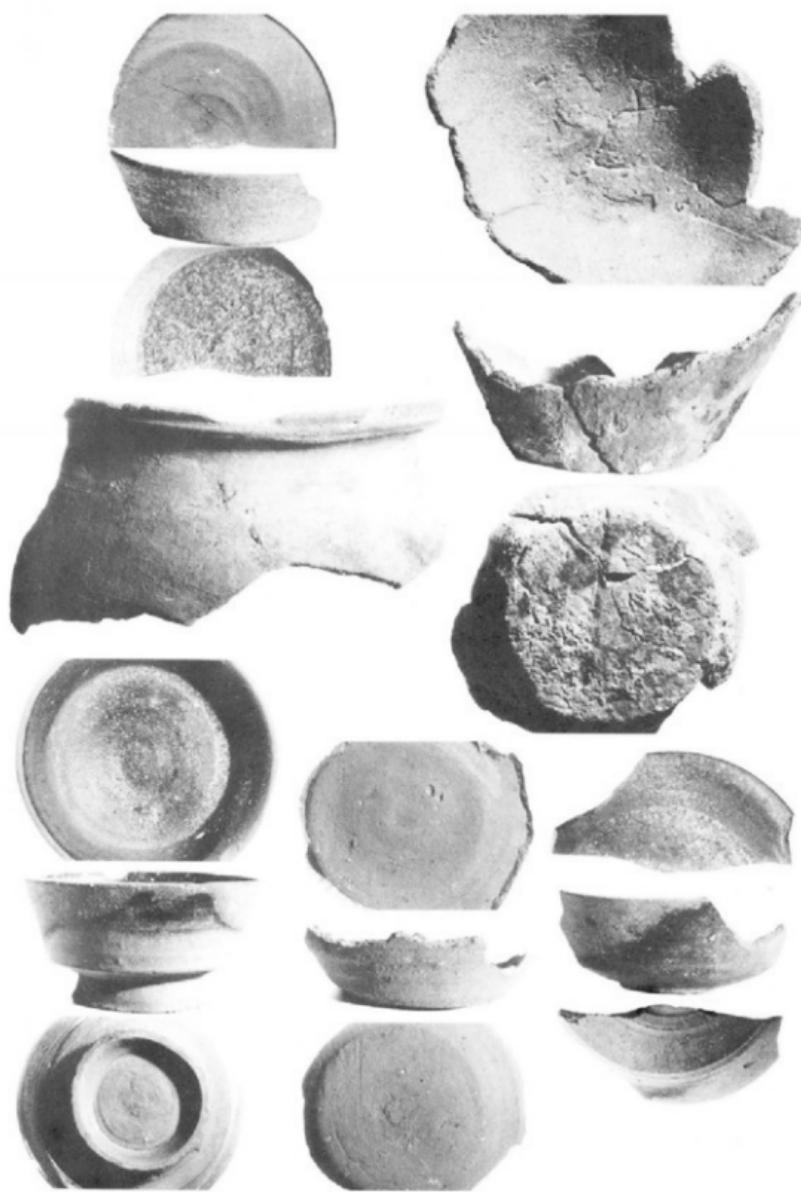


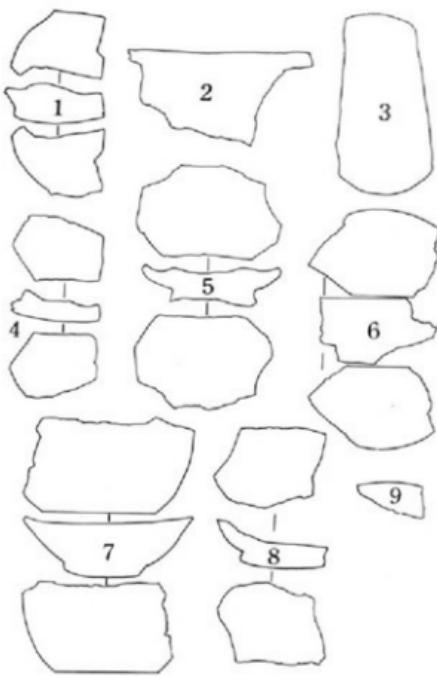




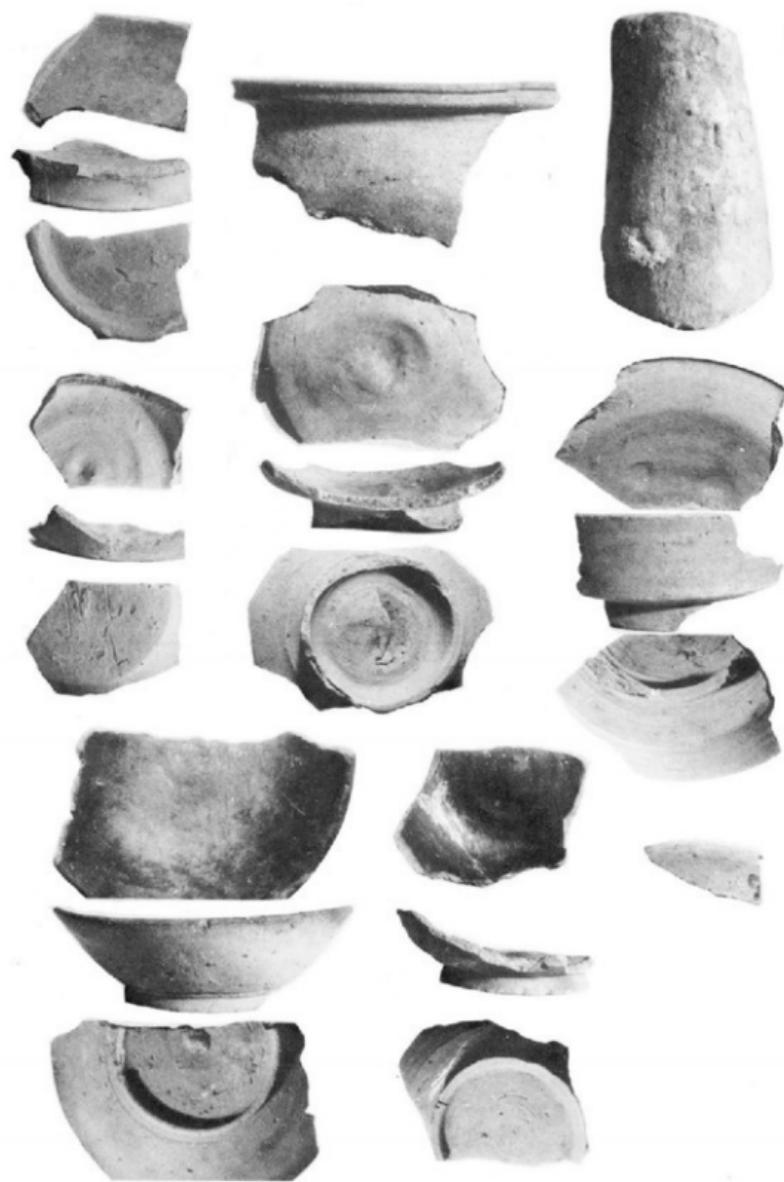


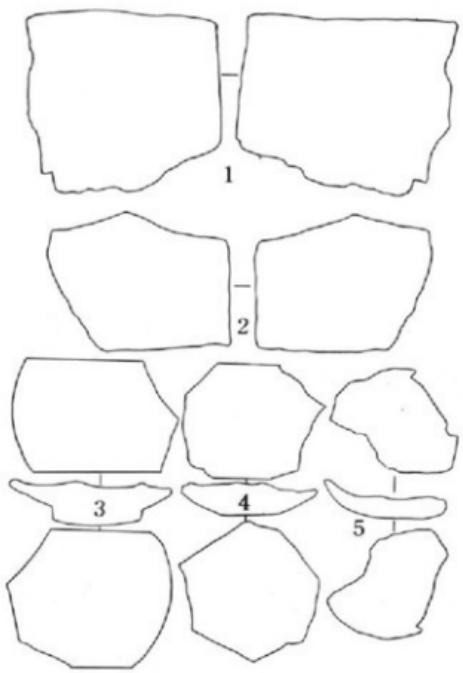
第59図版 土器類

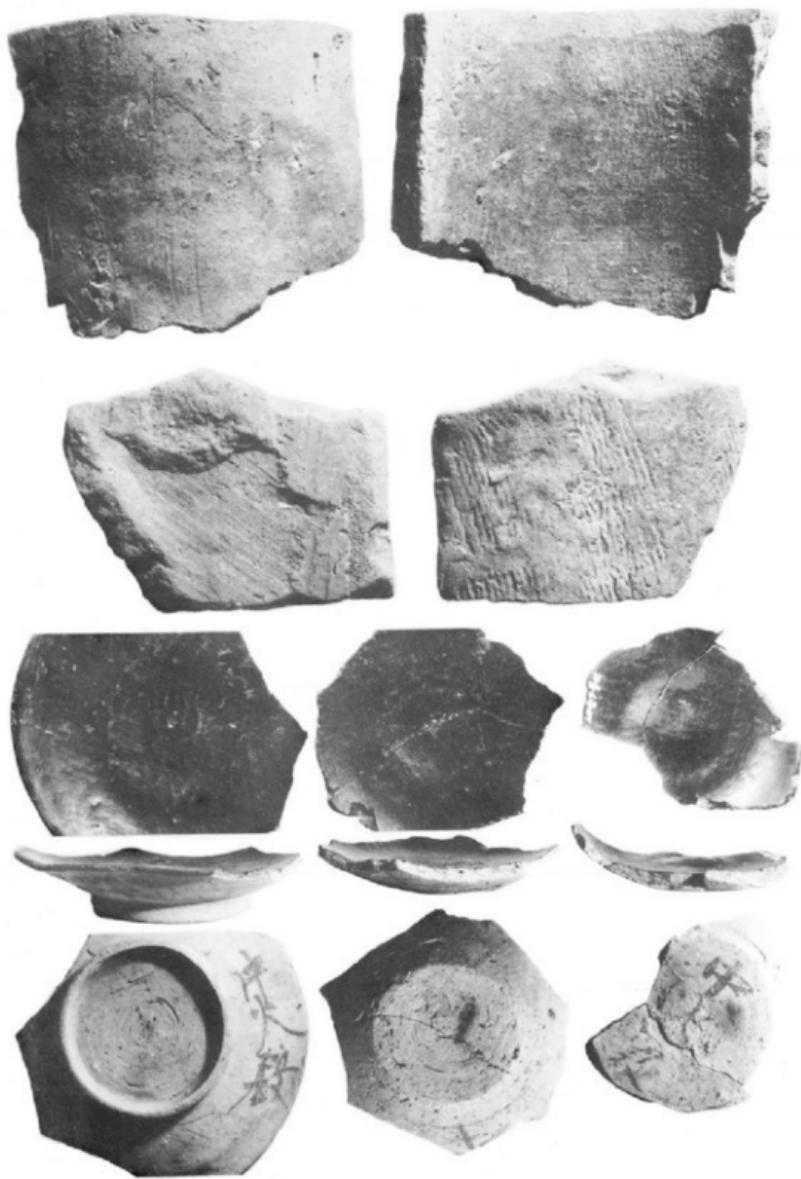


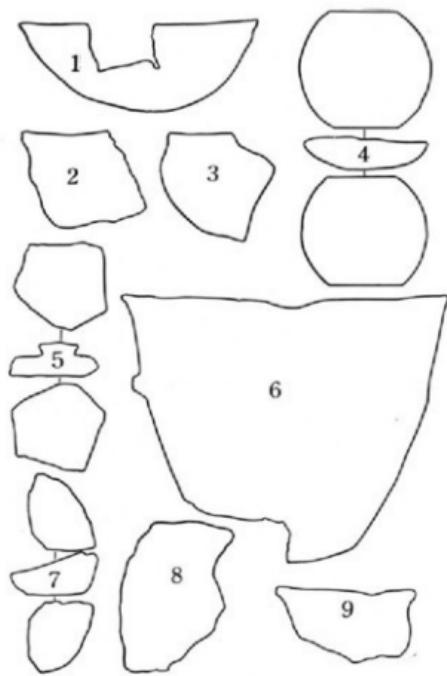


第60図版 土器類



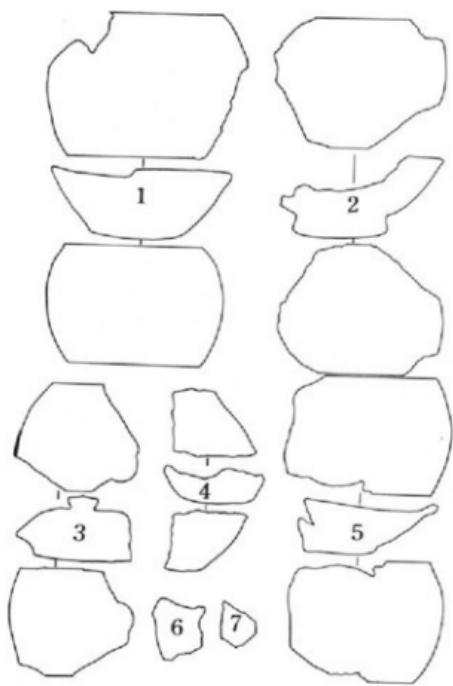




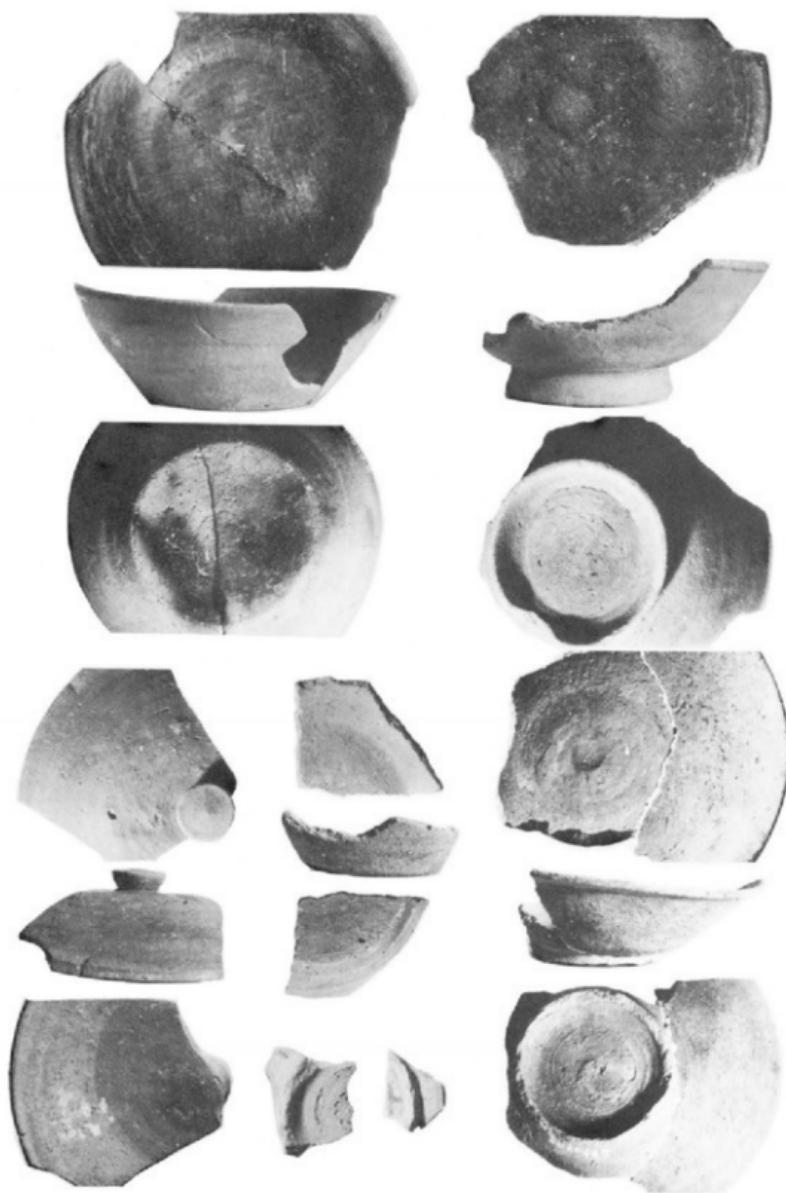


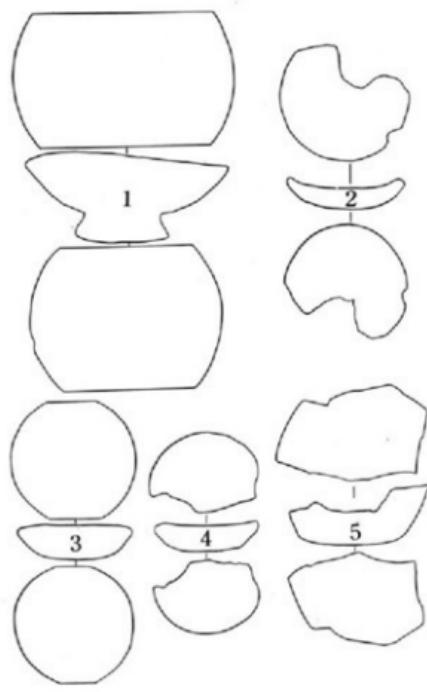
第62図版 土器類



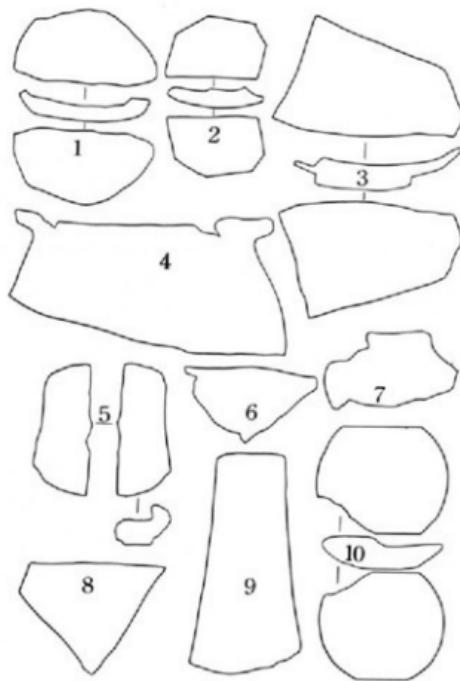


第63圖版 土器類



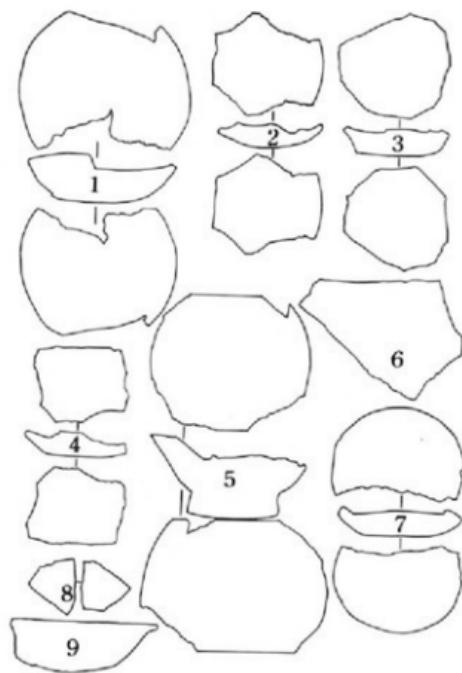






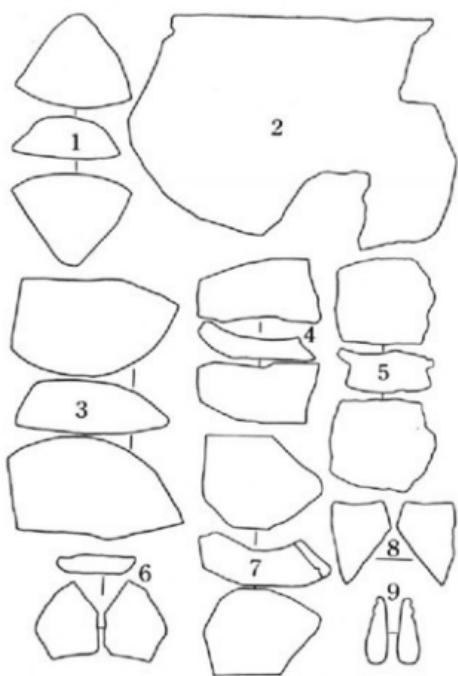
第65圖版 土器類





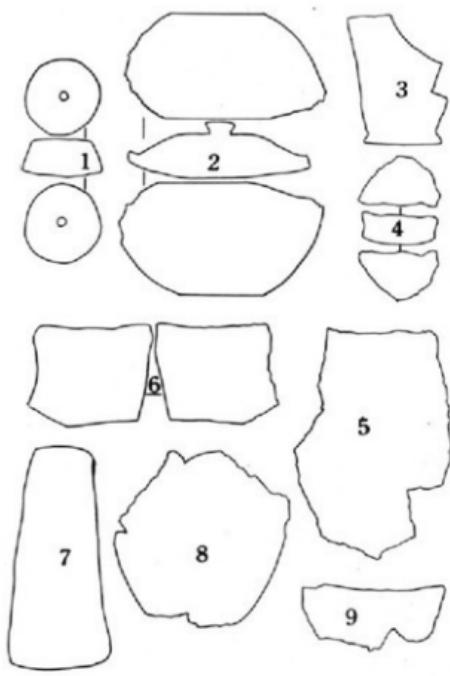
第66図版 土器類



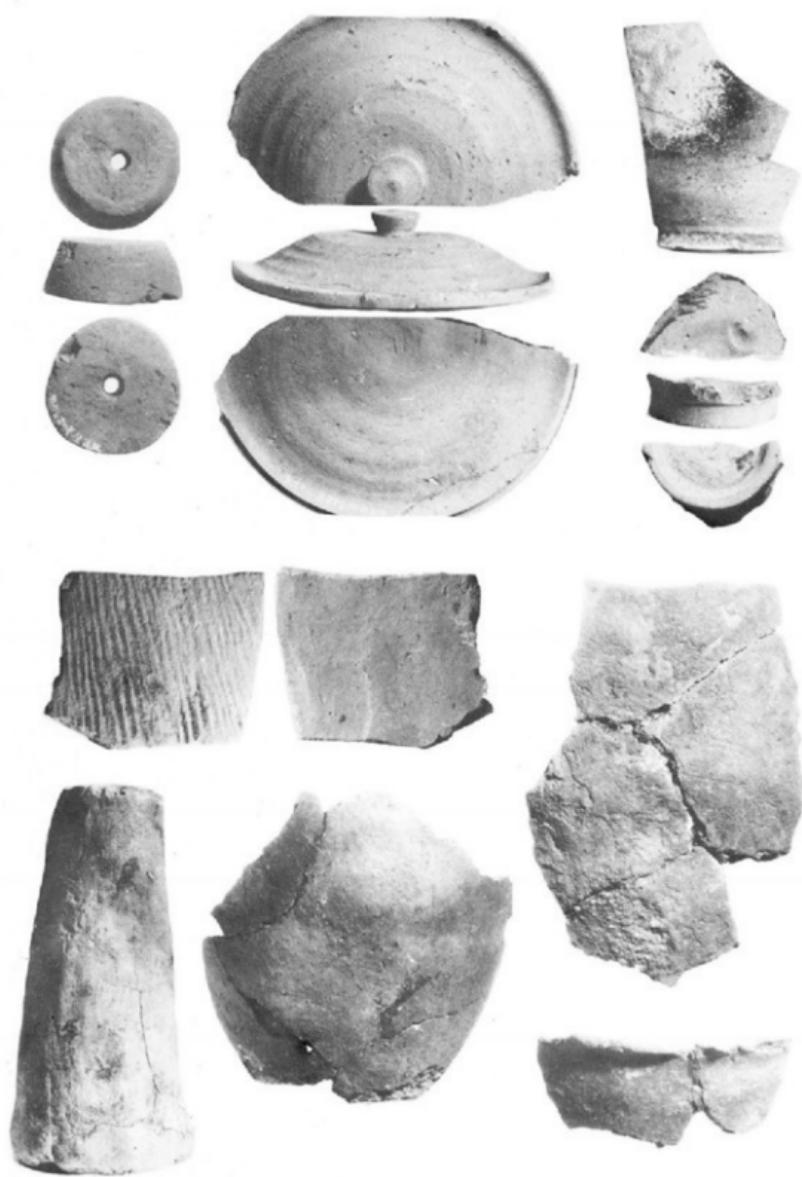


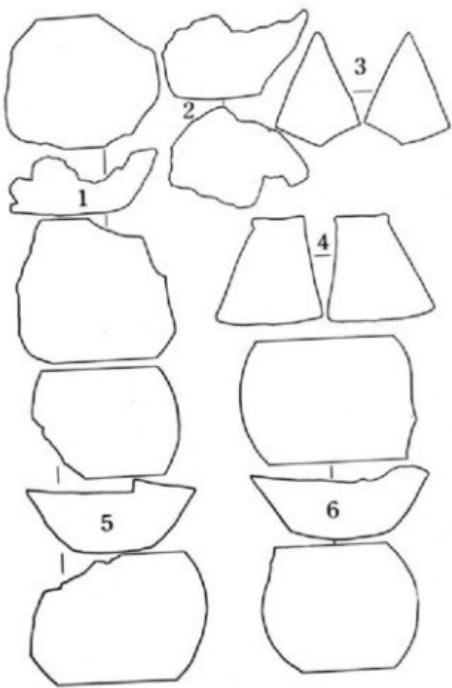
第67図版 土器類



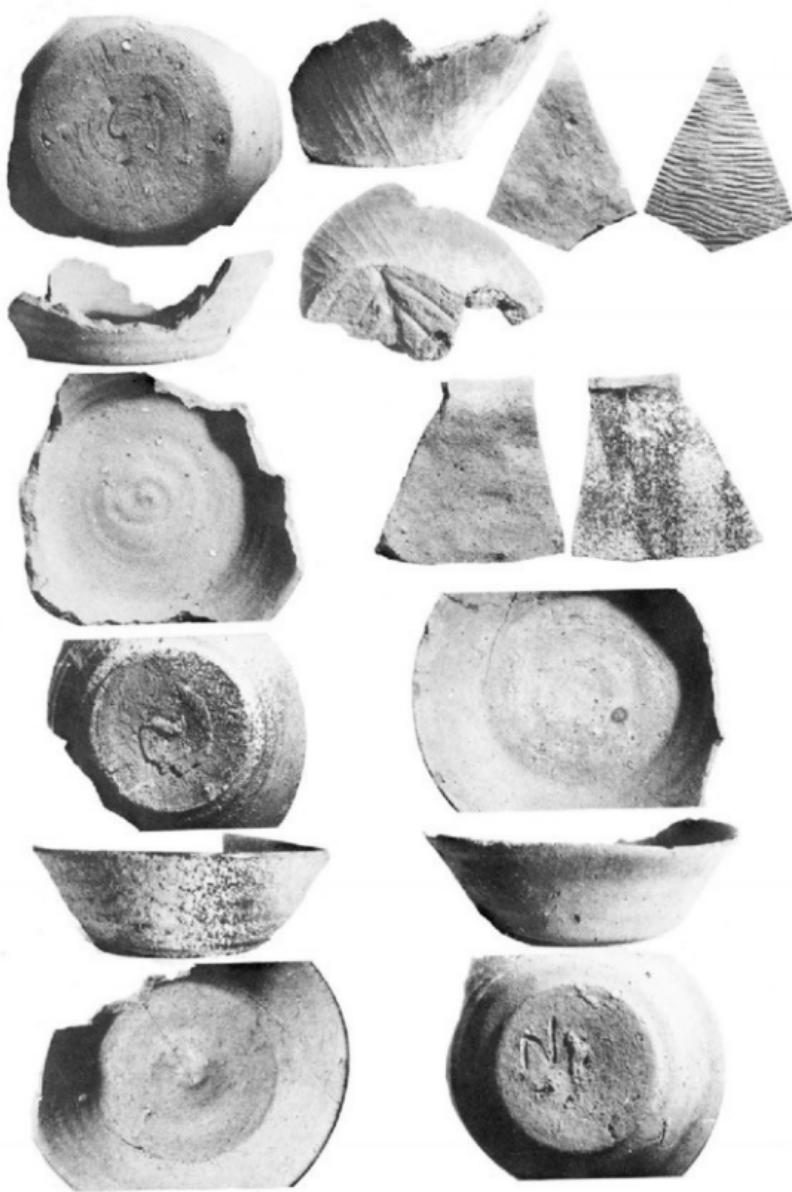


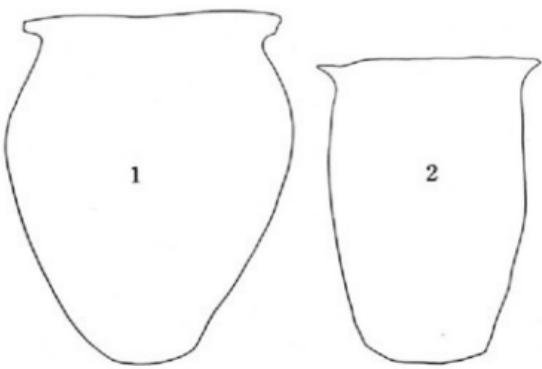
第68図版 土器類

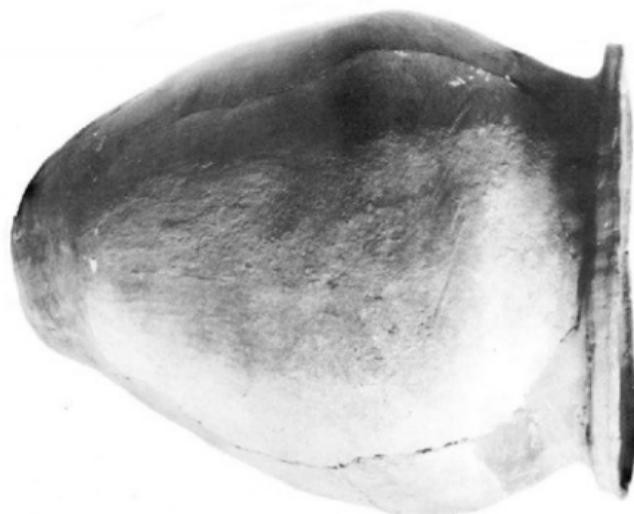


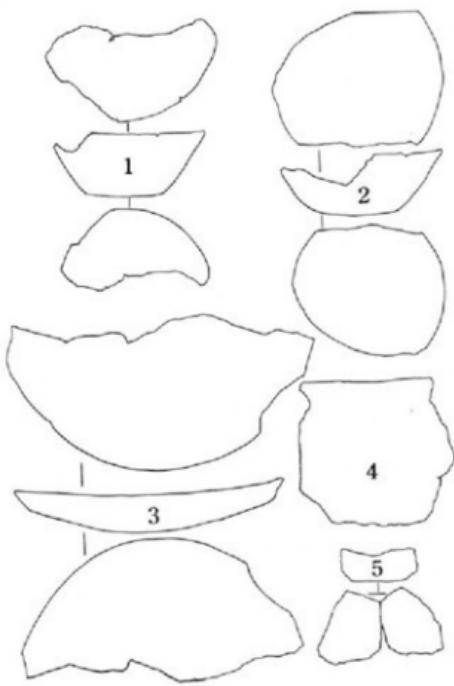


第69図版 土器類



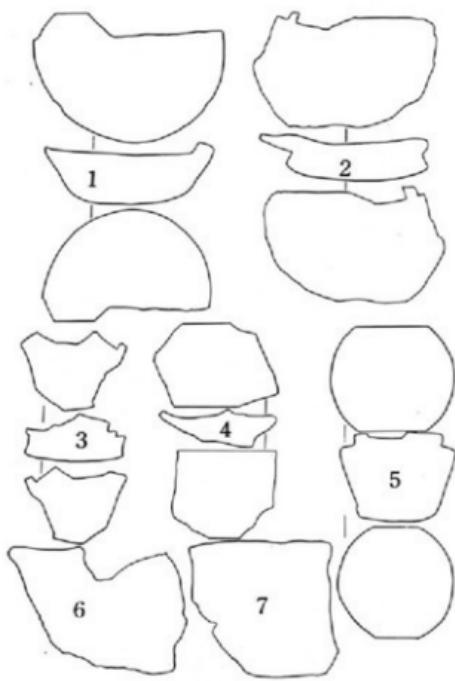




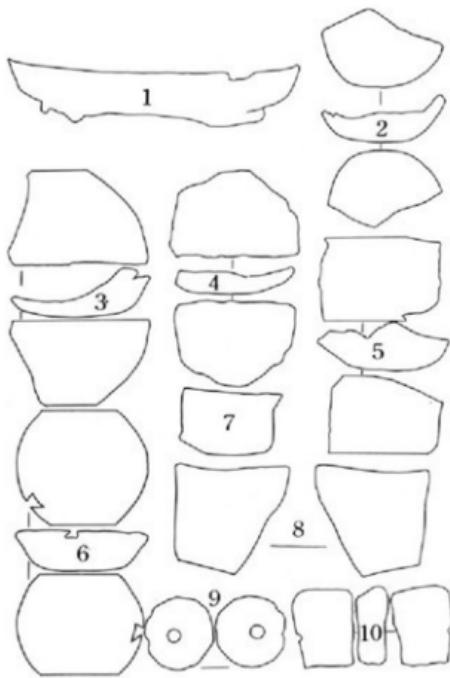


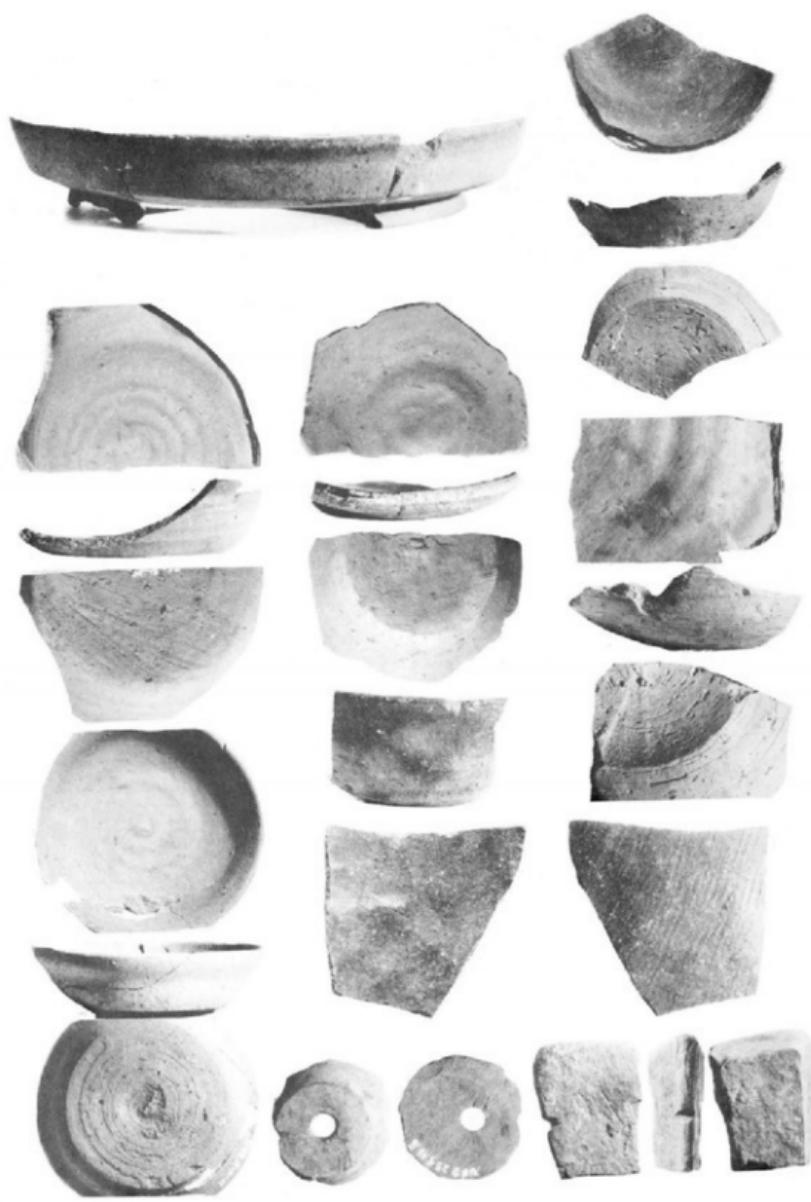
第71図版 土器類

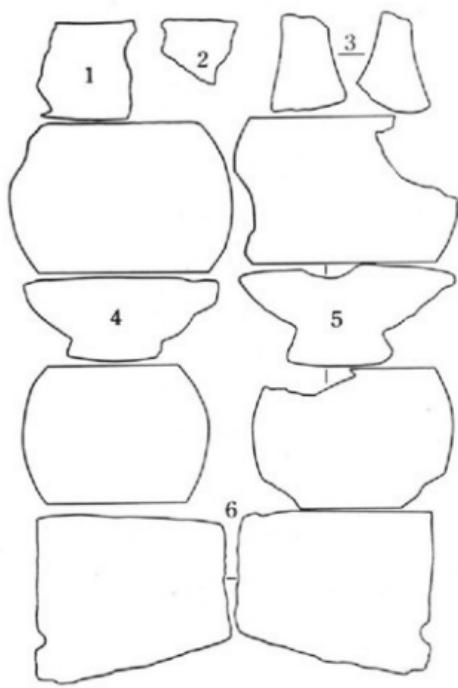




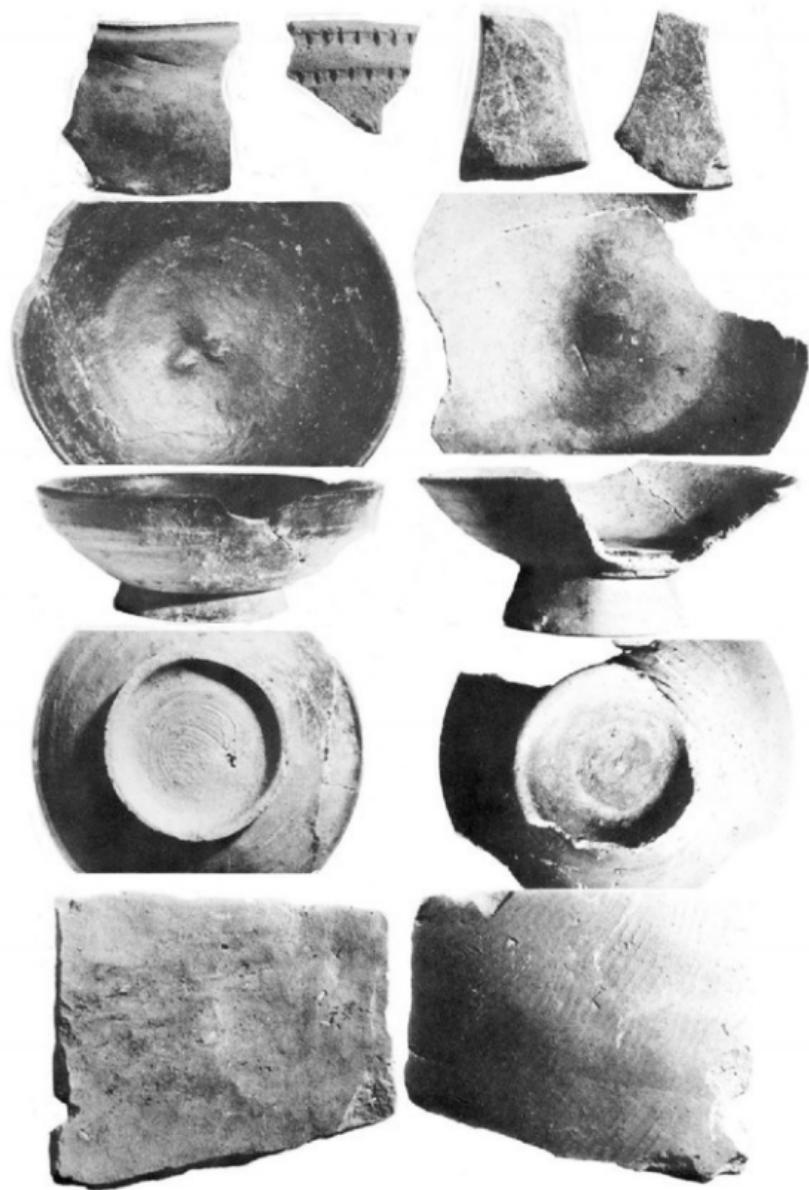


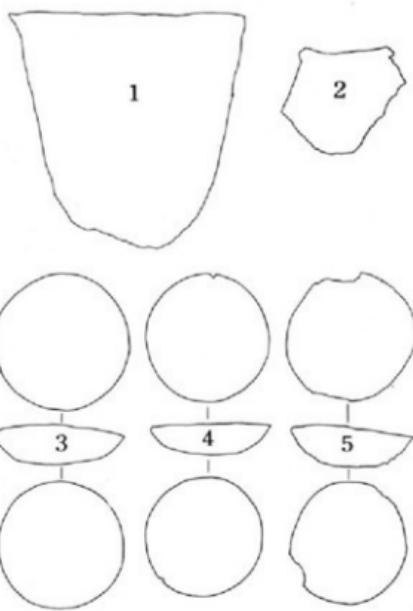




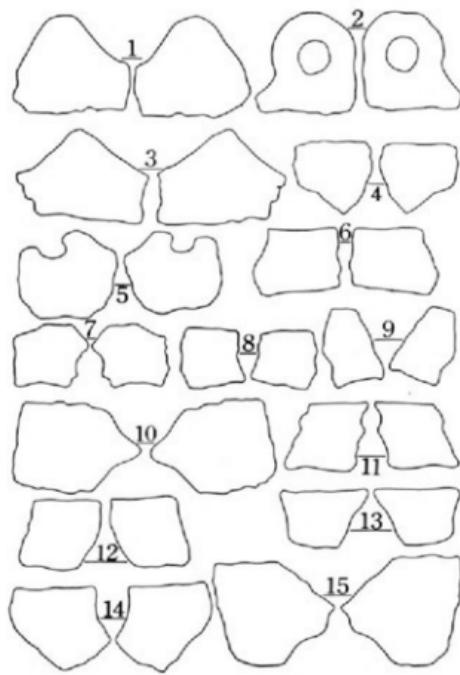


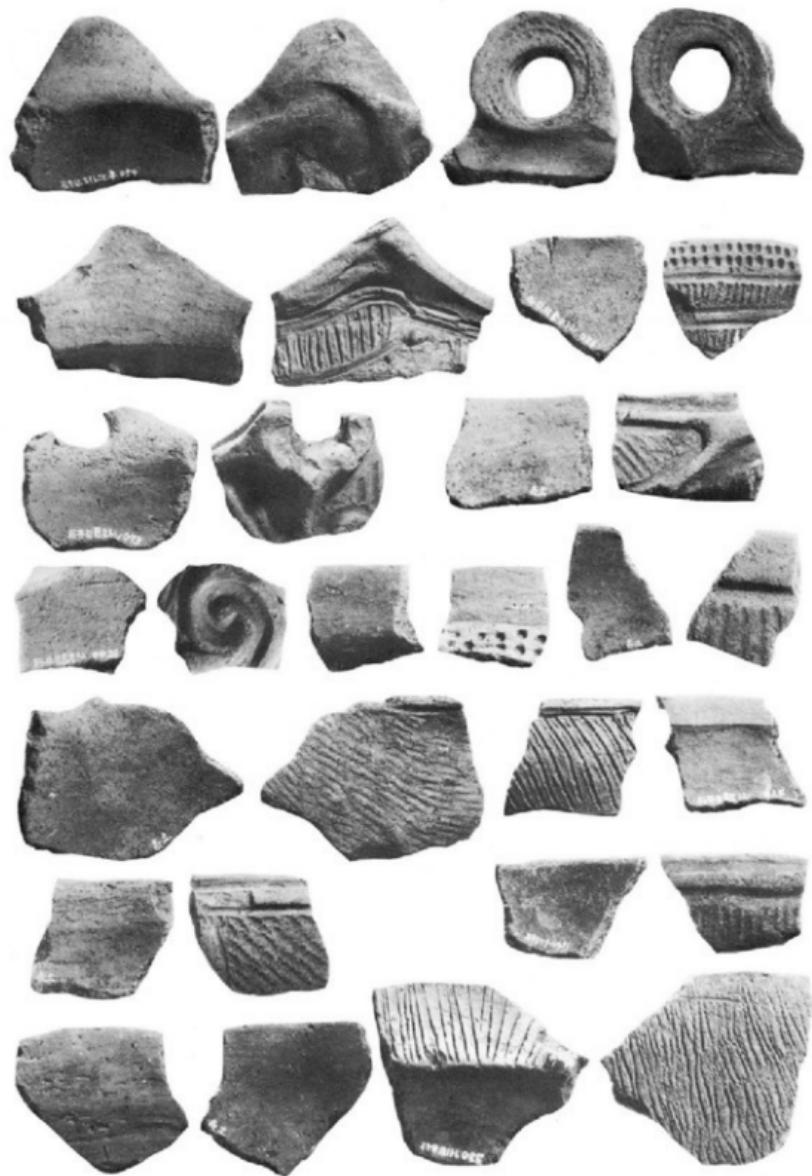
第74圖版 土器類

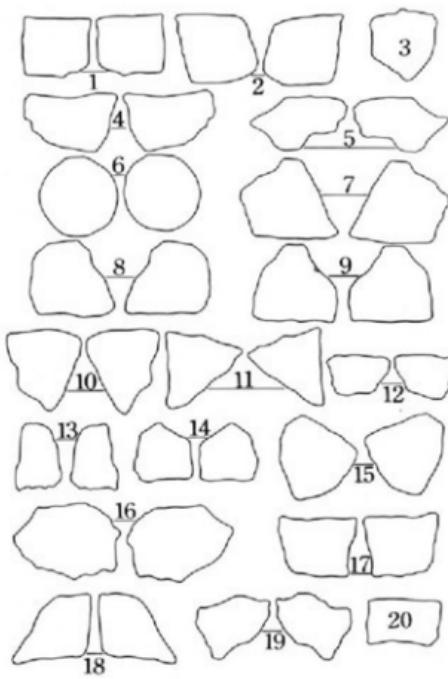




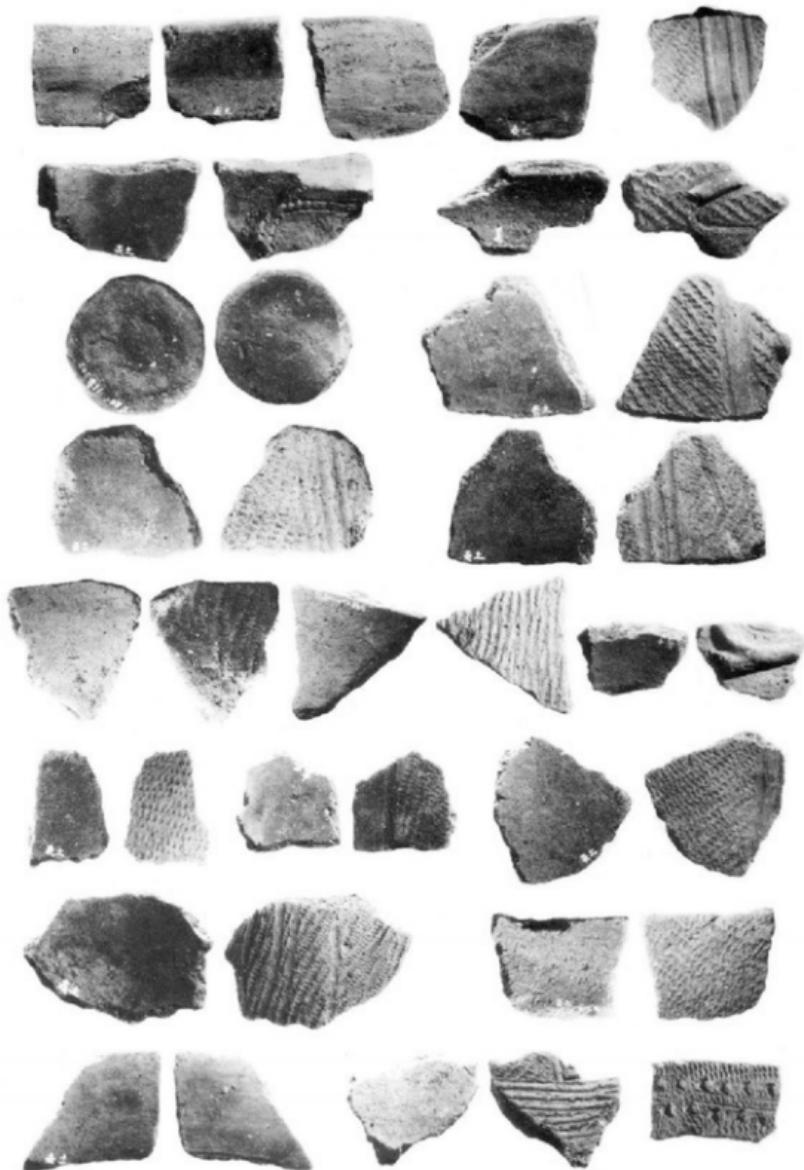


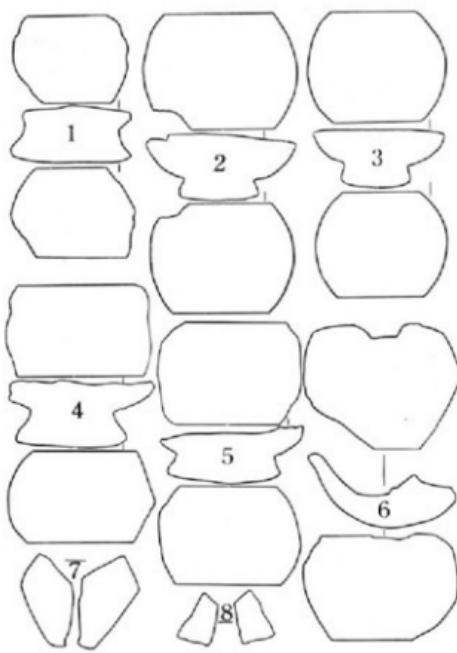






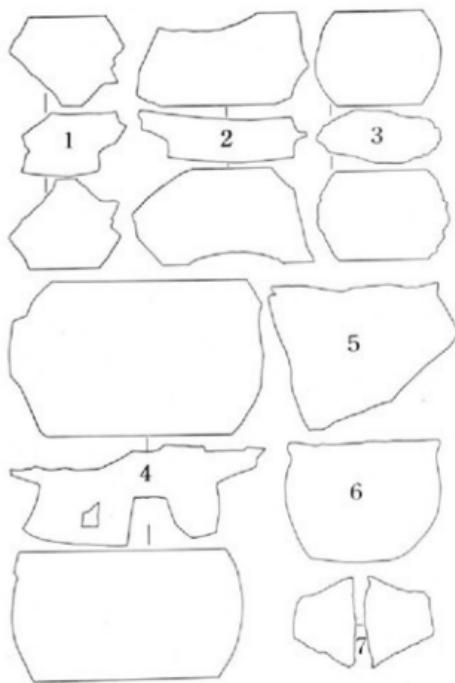
第77圖版 土器類





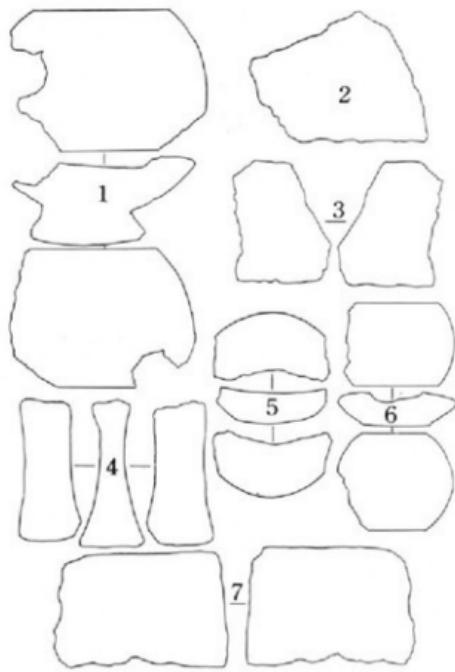
第78図版 土器類



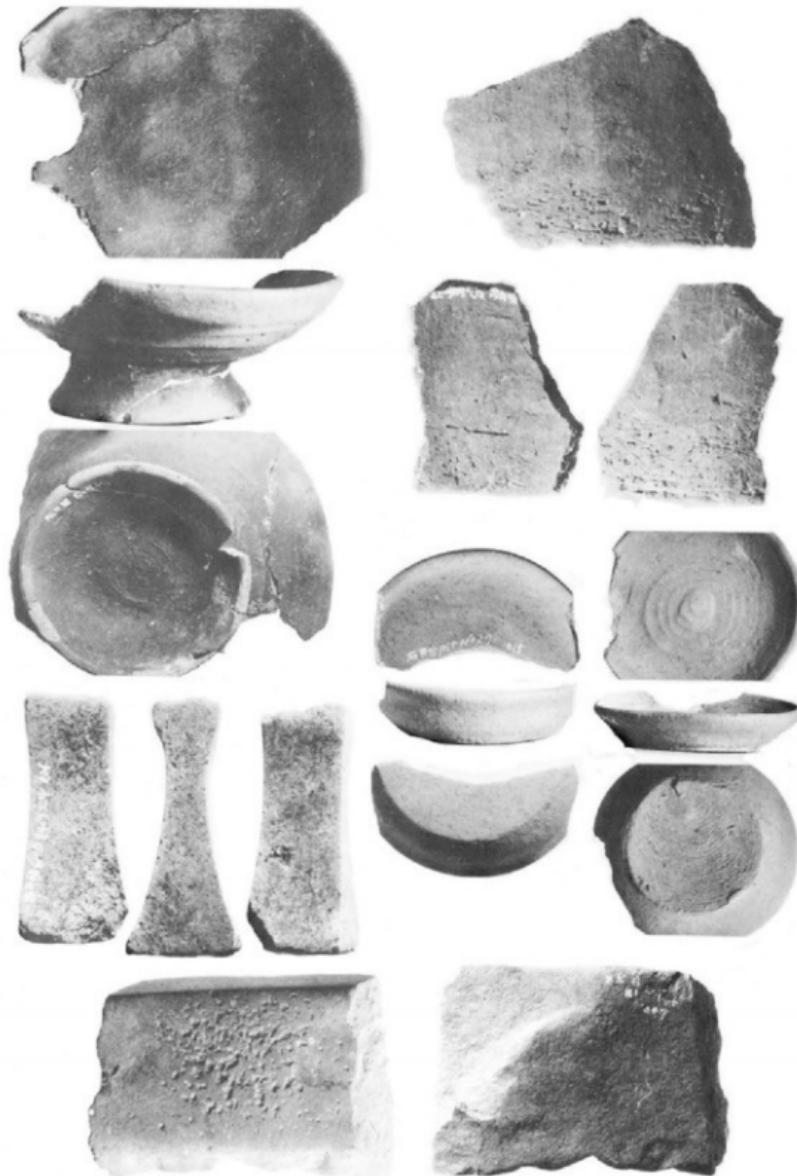


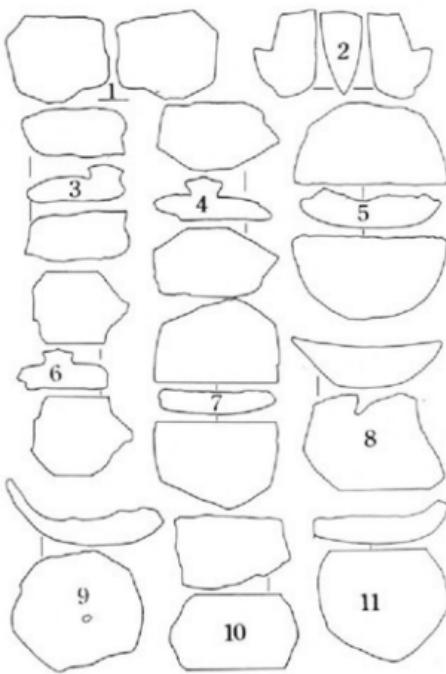
第79圖版 土器類



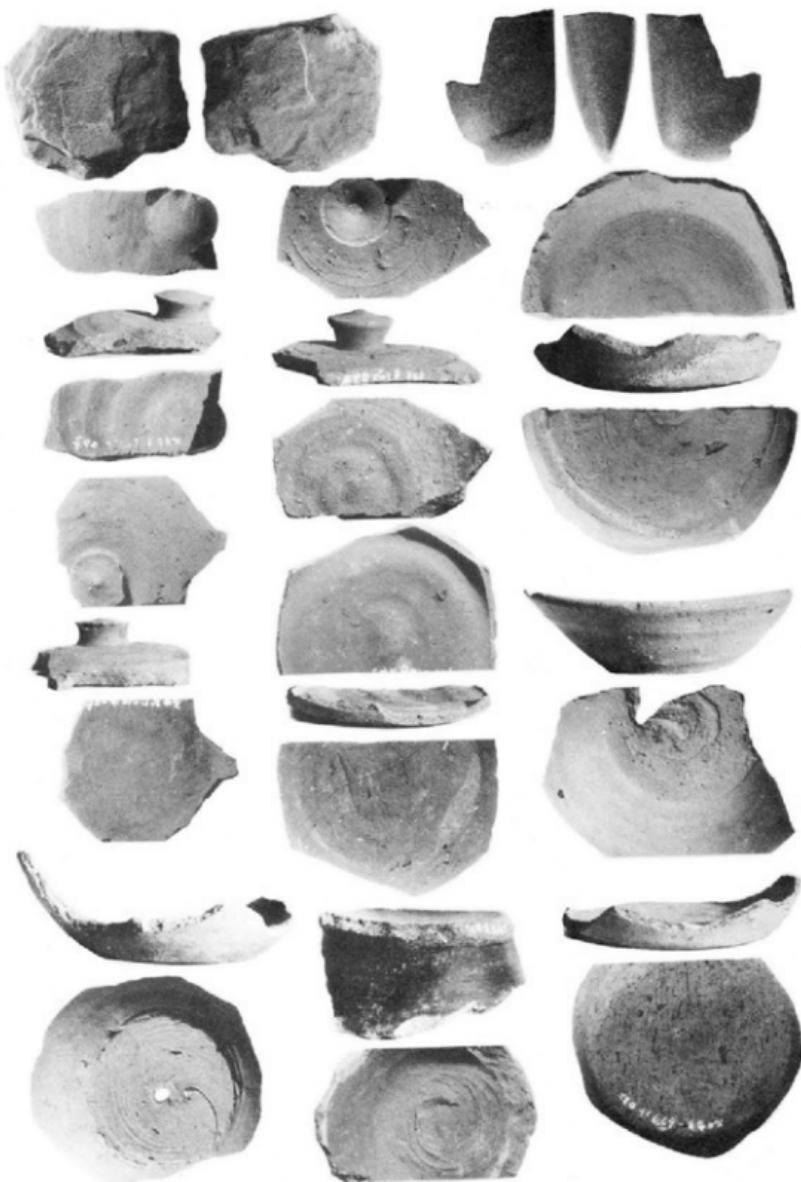


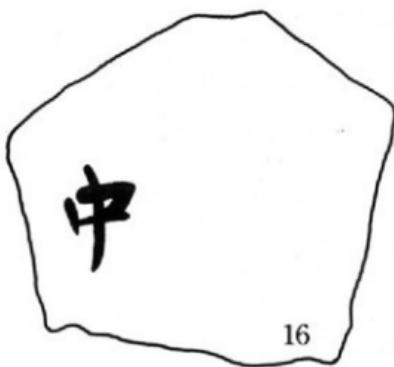
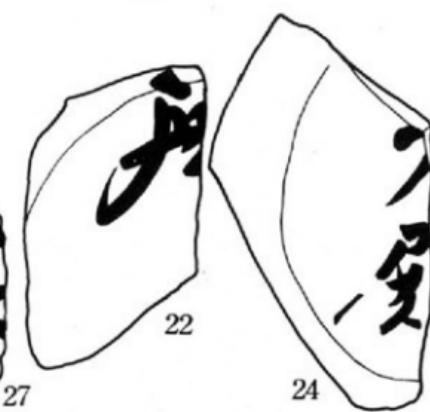
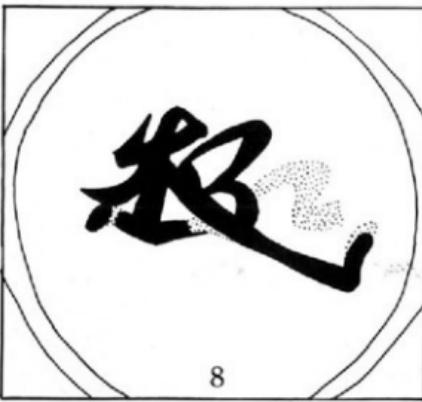
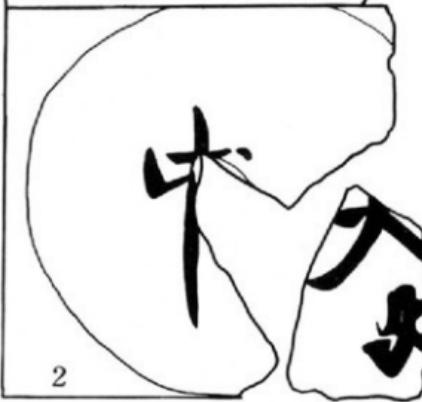
第80図版 土器類





第81図版 土器類





27

8

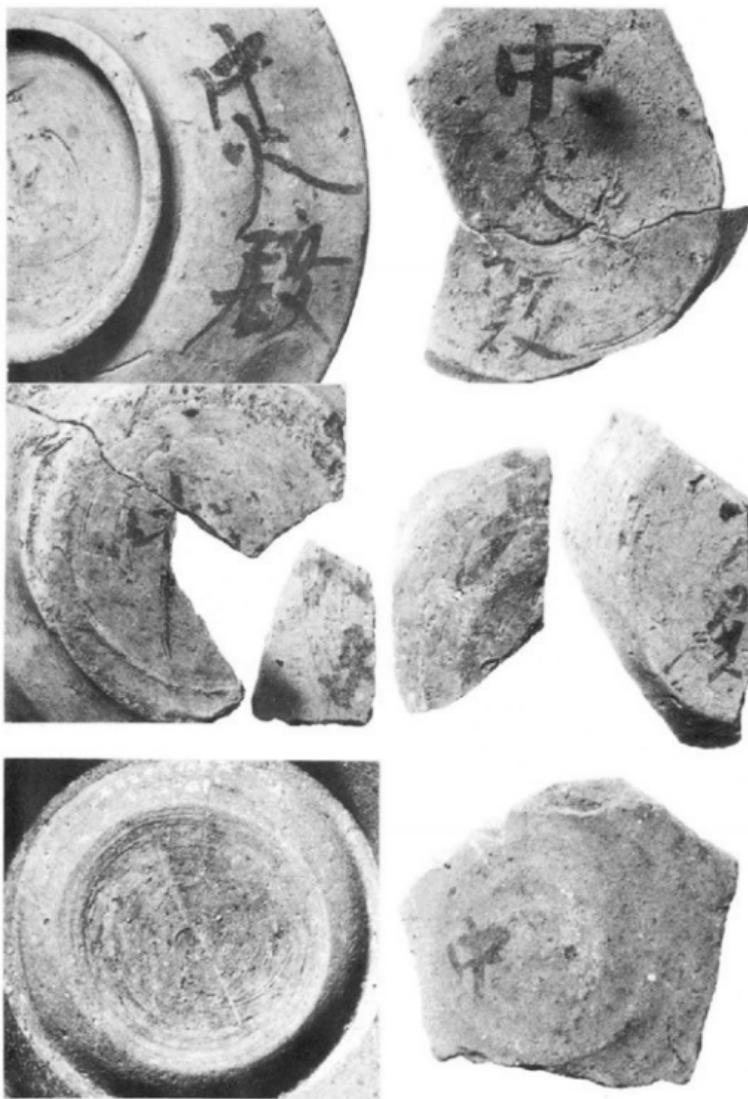
13

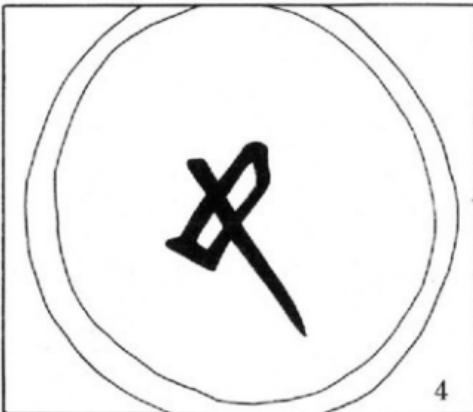
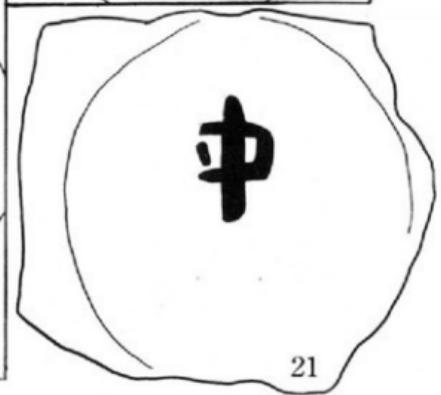
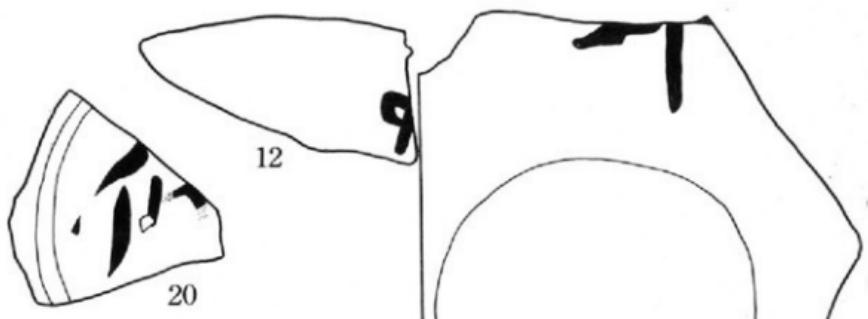
24

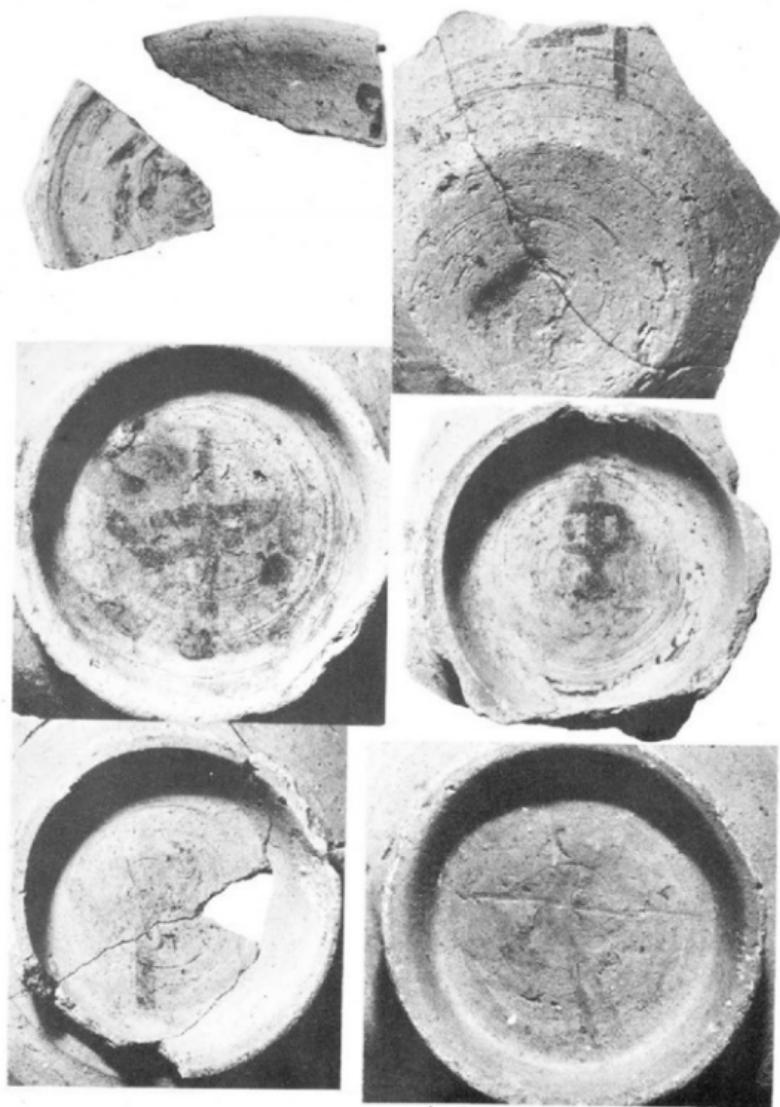
16

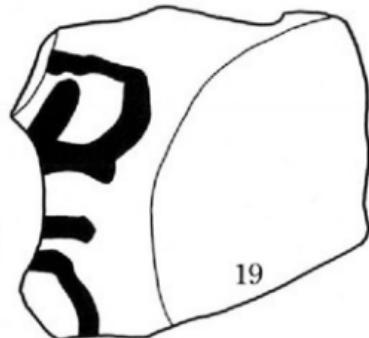
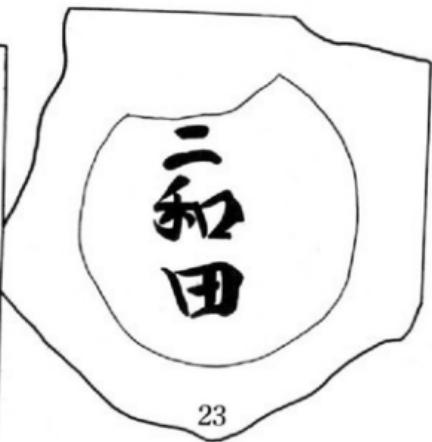
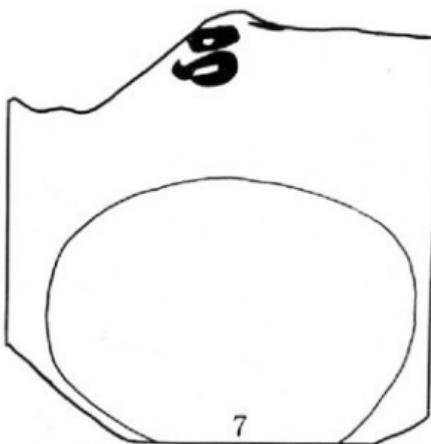
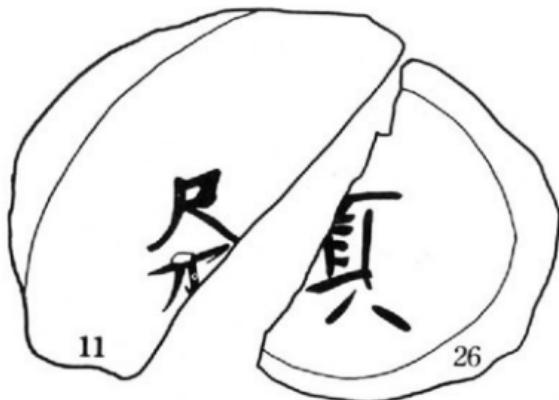
14

第82図版 墨書き土器



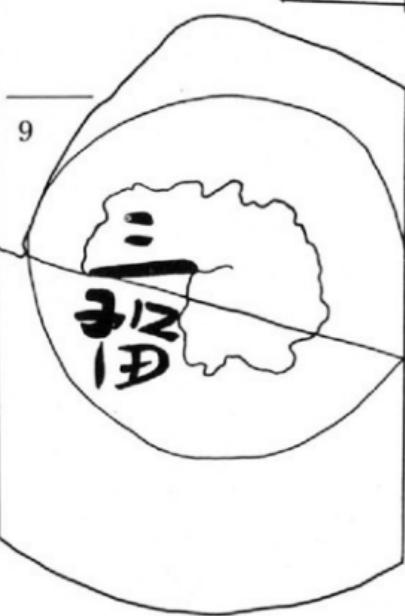
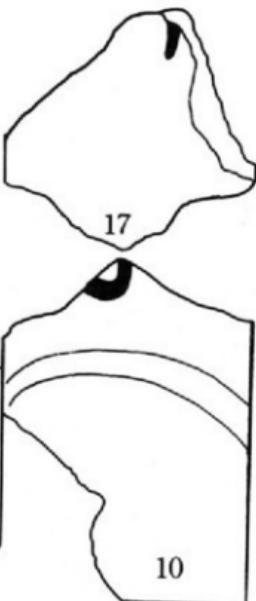






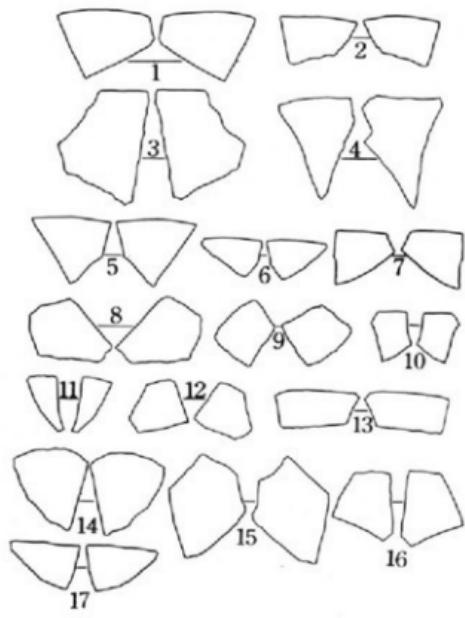
第84図版 墨書き土器



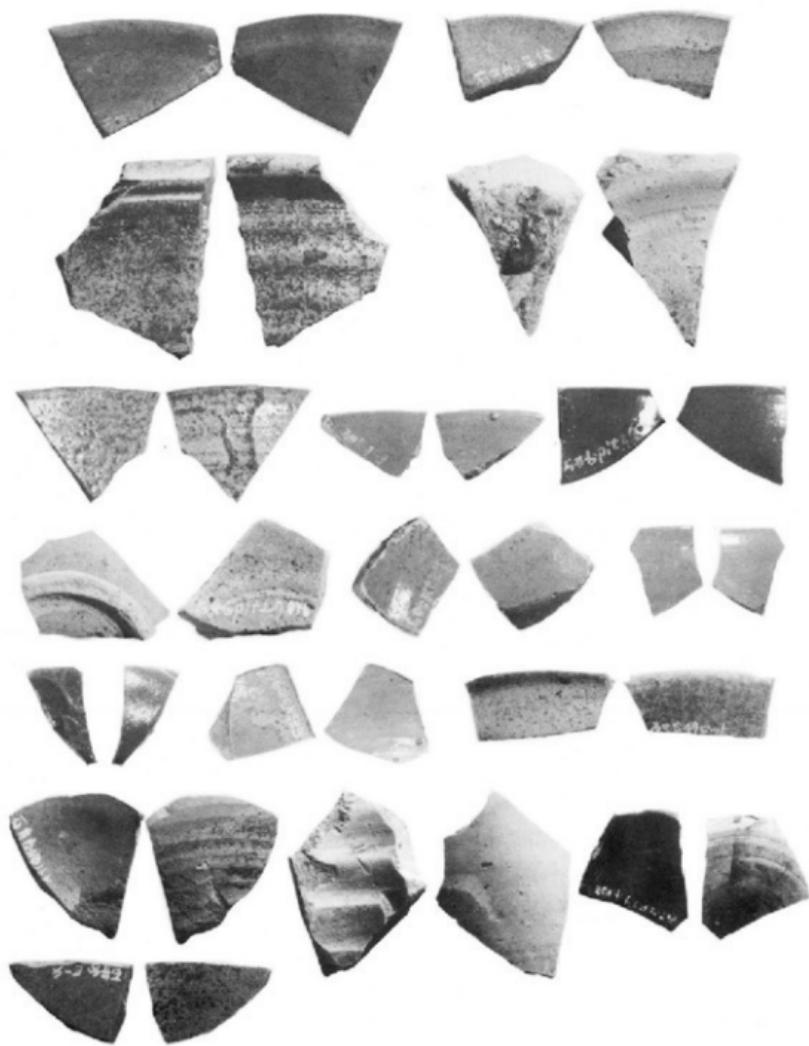


第85図版 墨書き土器

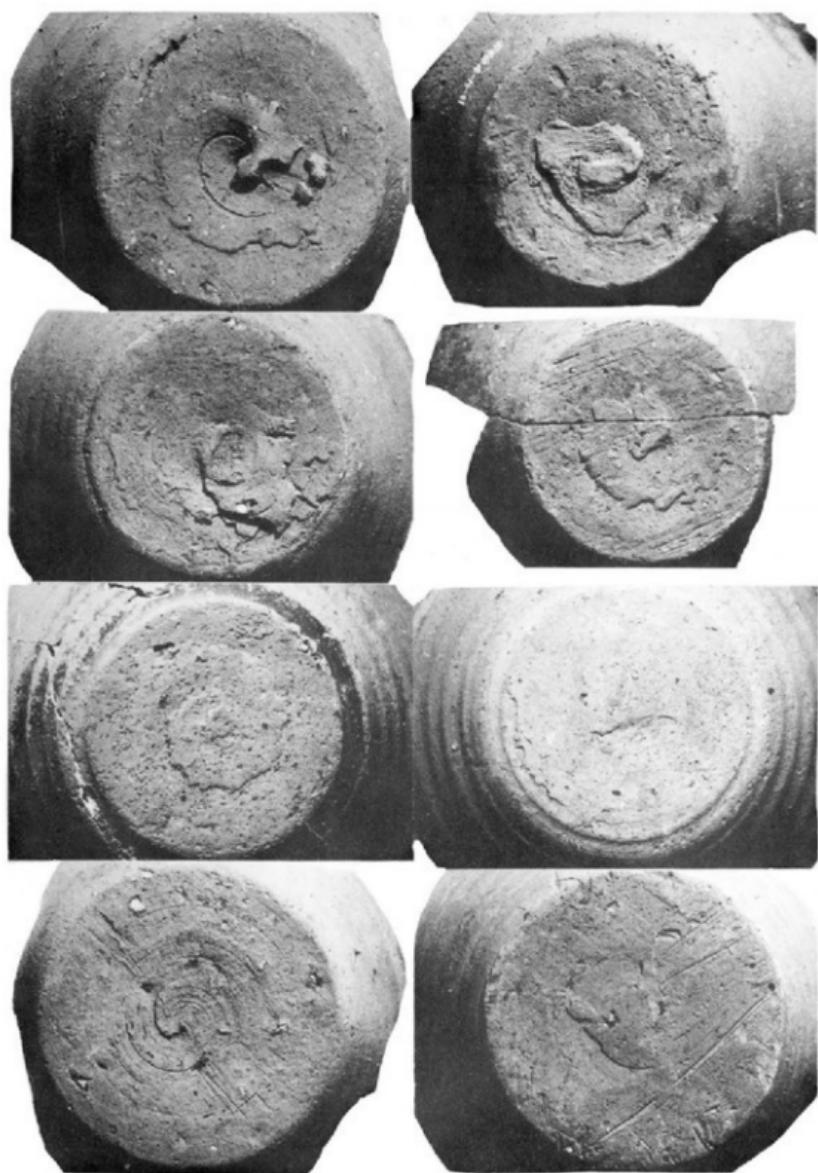




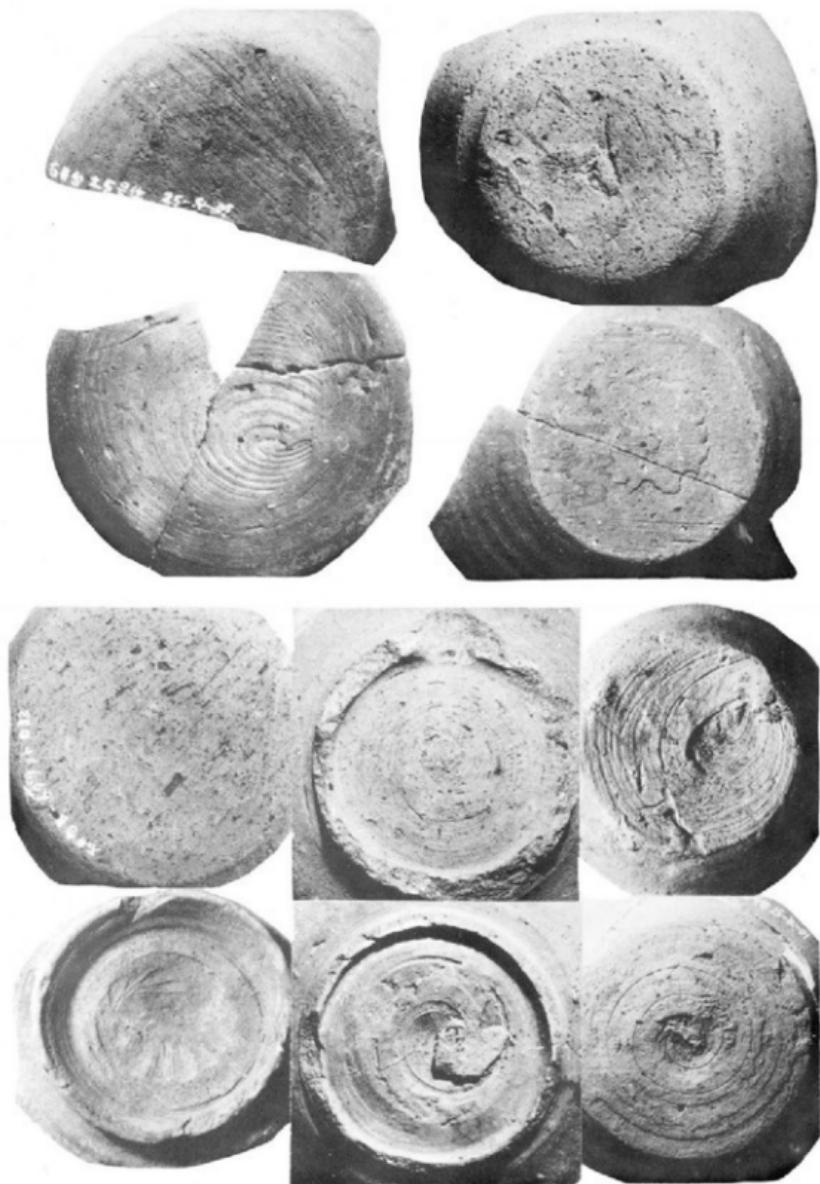
第86図版 土器類

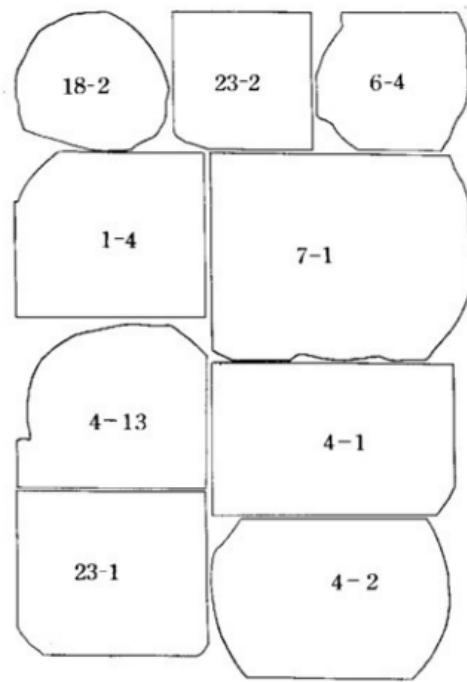


7-10	4-15
7-9	6-6
4-7	4-9
22-1	7-7

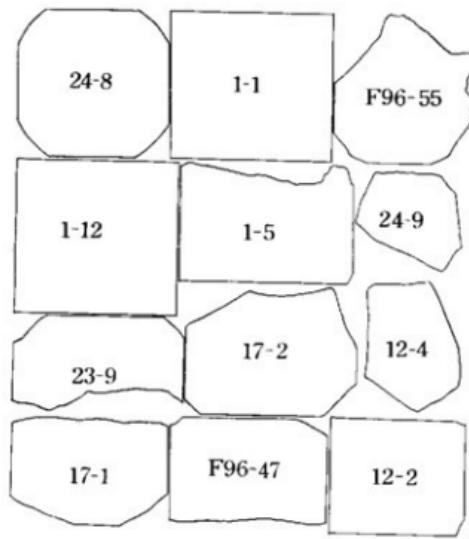


	25-2	23-3
	9-2	6-6
F96-52	4-3	16-18
8-2	6-1	25-7











「茨城県 うら山古墳・石井台平安時代集落跡」
笠間市 調査研究報告書

(非売品)

昭和47年3月25日 印刷

昭和47年3月30日 発行

編著者 国立郷土博物館
大川 清

発行者 笠間市教育委員会

印刷所 石崎印刷株式会社
茨城県内久慈郡笠間町大字笠間174
TEL 笠間 2117

3
4